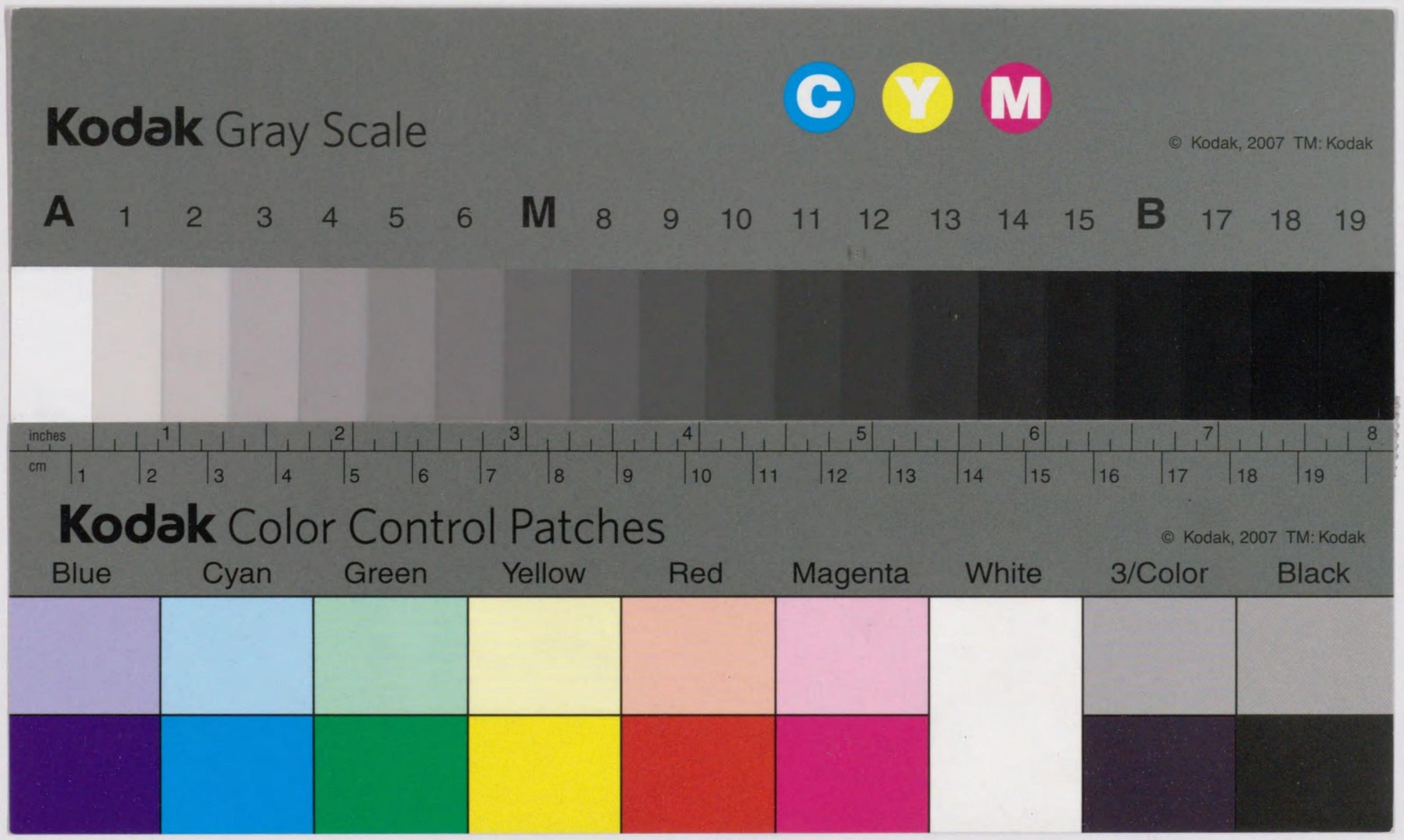
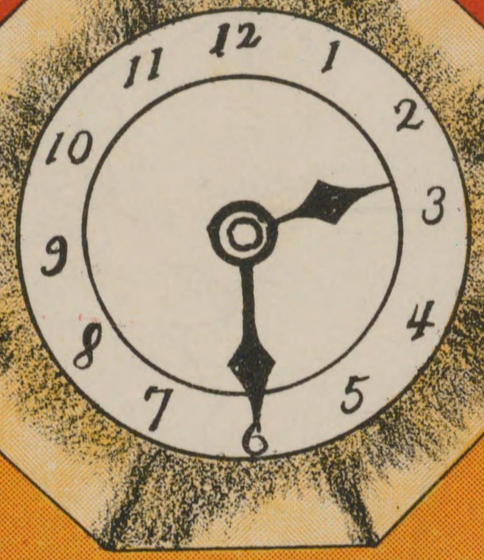
600-90
1200501529793



少年誌

大正十五年

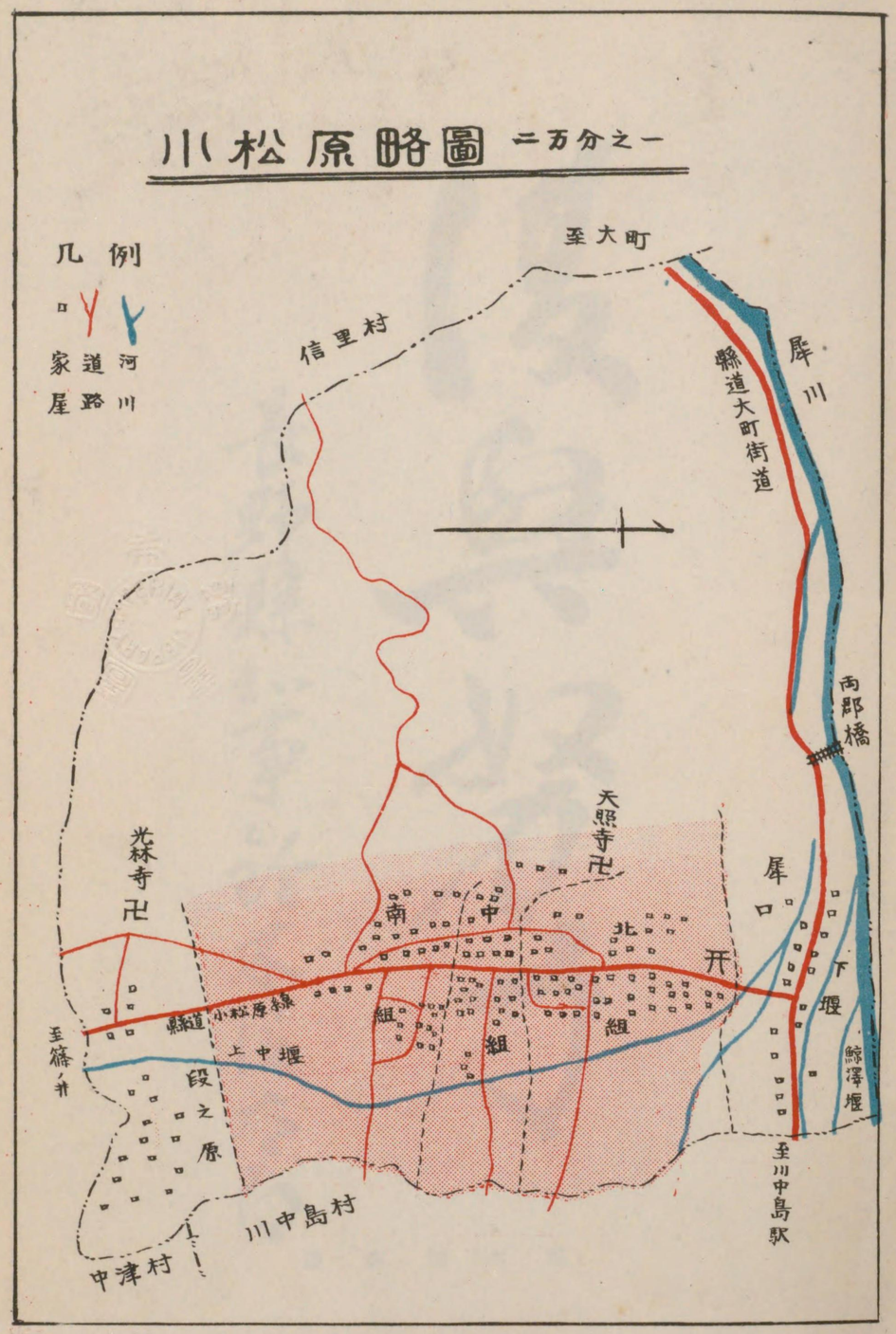
二十日



共和小学校　学校政男画

小松原

小松原略圖 二万分之一

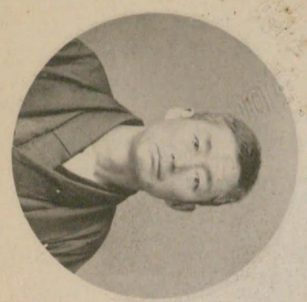

凡例
河川
道路
家屋
至大町
信里村
縣道大町街道
犀川
丙郡橋
天照寺卍
光林寺卍
南
中
北
開
組
組
組
縣道小松原線
上中堰
段之原
至篠ノ井
川中島村
中津村
犀口
下堰
鯨澤堰
至川中島駅

復興努力

長野縣知事 鈴木治太郎 題

當時小學校長
坂口俊雄氏

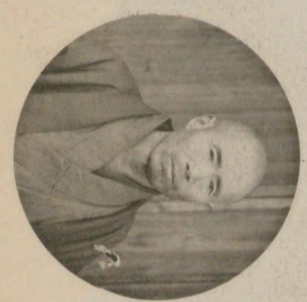
當時小松原區長
澤鶴治氏



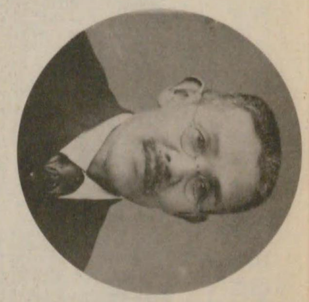
當時岡田區長
澤市之助氏

當時陸軍部
阿部寅吉氏

當時岡田區長代理
原田嘉十郎氏

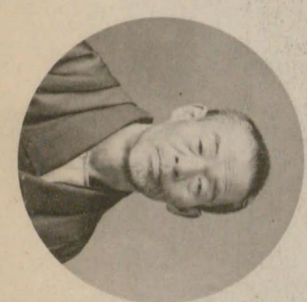


當時小松原區長代理
久保田義三郎氏



陸軍組合
林部安十郎氏

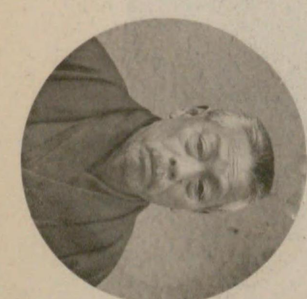
當時軍人分會
野口昌一郎氏



現岡田區長
島田平十郎氏

現村長
井邦友氏

當時青年會長
藤川隆算氏



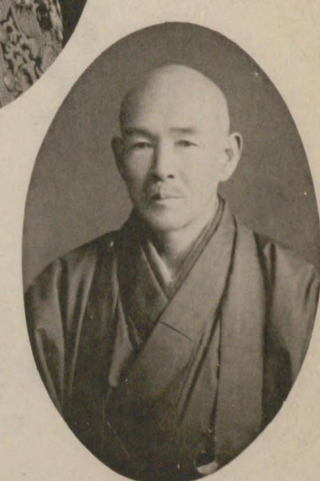
現小松原區長當時村
口權內會議員氏

當時篠井警察署長
岡田長左衛門氏

當時更級郡長
小林一重氏

當時長野縣知事
梅谷光貞閣下

當時村長
大澤鐵左右氏



復興委員長
澤種二郎氏

現村長 福井邦友氏

當時寄年會長 藤川隆算氏

現小松原區長當時村會議員 野口權內氏

產業組合長 林部安十郎氏

當時軍人分會長 野口昌一郎氏

現岡田區長 島田平十郎氏

當時駐在巡査 阿部賢吉氏

當時岡田區長代理 原田嘉十郎氏

當時小松原區長代理 久保田義三郎氏

當時小學校長 坂口俊雄氏

當時小松原區長 瀧澤鶴治氏

當時岡田區長 岡澤市之助氏

向左構內員 村議 岡澤宇吾治氏

向右構內員 書記 村議 小森藤兵衛氏

具場役ゞ及員議會村の時當

○此寫眞に就いてのお斷り　各自に寫眞を頂戴致すつもりでありましたが出來ませんでした

昭和三年度村會議員の分裁當時のものを用ひましたのを御承知ありたし

額口山議村　○氏治愛袈田坂議村　○氏左邦井龜役助　○氏計主澤龍議村　氏龜二竹林平議村（ゥ＝右列前）
澤彌阿　役助　○氏龜治善野丸　役入収　○氏通安禪大員衛技（ゥ＝右列中）　氏伊藤口野　議村　○氏龜太
列後）　○氏恐龍原河小　記書　○氏平岡狩亡　議村　氏治欽原河小　議村　○氏助原林小　議村　○氏龜一
生先十五四木鈴　長校學　○氏龜一蔦角廣　記書　○氏男軍山保久　記書　○氏男義幸河小記書（ゥ＝右

◎此寫眞に就いてのお斷り　各自に寫眞を頂戴することが出來ませんから昭和三年度村會議員の分袂當時のものを用ひましたのを御承知ありたし

向右楕圓內　書記　森慧典氏
角內　村議　小田切良作氏

向左楕圓內　村議　馬場林治氏
角內　村議　岡澤宇吾治氏

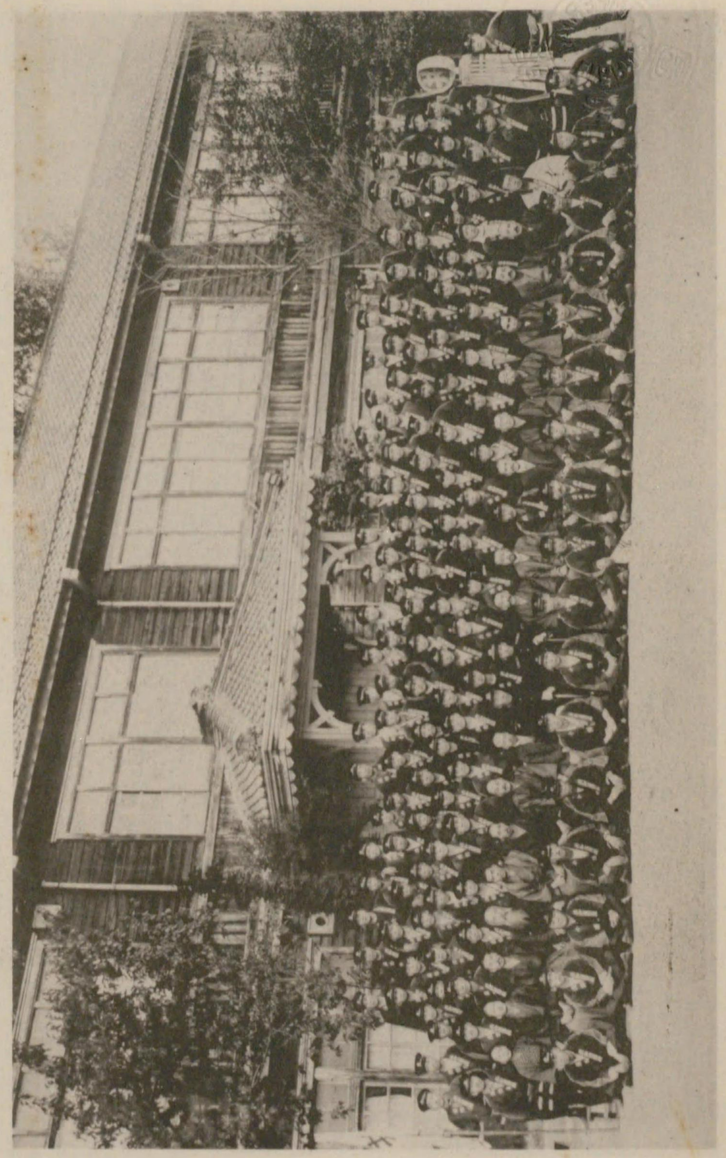
當時の村會議員及び役場員

（前列右ヨリ）村議平林竹二郎氏　村議瀧澤主計氏。助役福井邦友氏。村議坂田袈治氏。村議山口新太郎氏。村議野伊藤口氏。村議小林松助氏。村議小河原鈴治氏。村議小河原鹽一郎氏。（中列右ヨリ）技術員大澤安通氏。収入役丸野善治郎氏。助役岡澤素一郎氏。（後列右ヨリ）書記小河原松氏。書記周科仁平氏。書記南角茂一郎氏。書記久保田重男氏。學校長鈴木先生四十五

前列右ヨリ　中列右ヨリ　後列右ヨリ

小小柳丸坂田袈山田與
林林澤山田袈治郎
元瓦鳥喜文四郎
鋼五太文治氏
氏氏氏

（撮影日五十月



火災當時の共和消防組員

海老平ヨリ見タル復興後ノ全景

（昭和四年十二月十五日撮影）

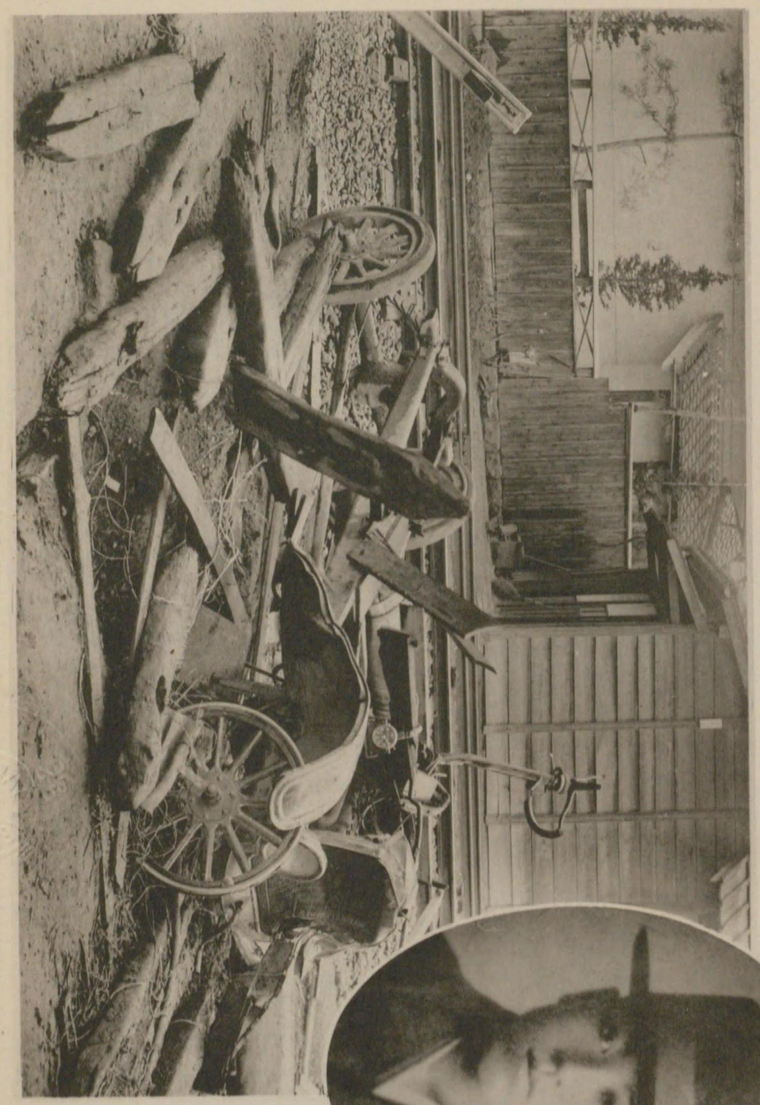
曲松正面ヨリ見タル復興後ノ景（昭和四年十二月十五日撮影）

燒失前ノ村社伊勢社ノ景

景ノ社勢伊社村ノ後失燒

燒失前ノ村社伊勢社ノ景

火災中ニ御神体ノ遷座サレタ池田家



殉職者中島今朝五郎氏

國道十號線富線號十道國

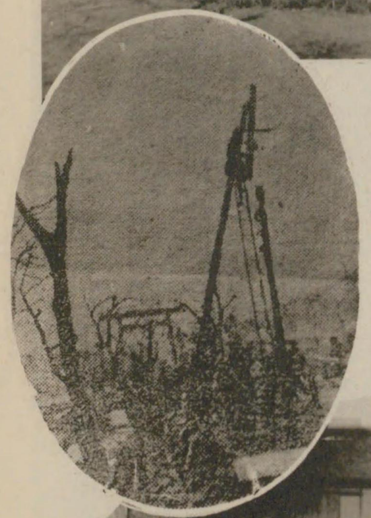
像自ノ者職殉ゼ及塗現ノ突衝ノ車動自ト車列ルケ於ニ切踏井之線富線號十道國

（二ノ其）景ノ跡燒ノ後間週一災火

火災一週間後ノ燒跡ノ景（其ノ一）

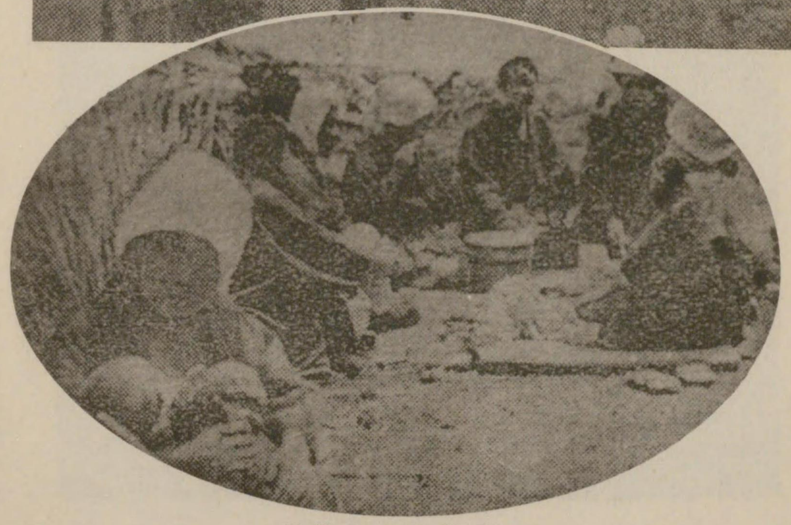
臨時村役場出張所ト同情品ノ山

火災當夜ノ電燈修理ノ景

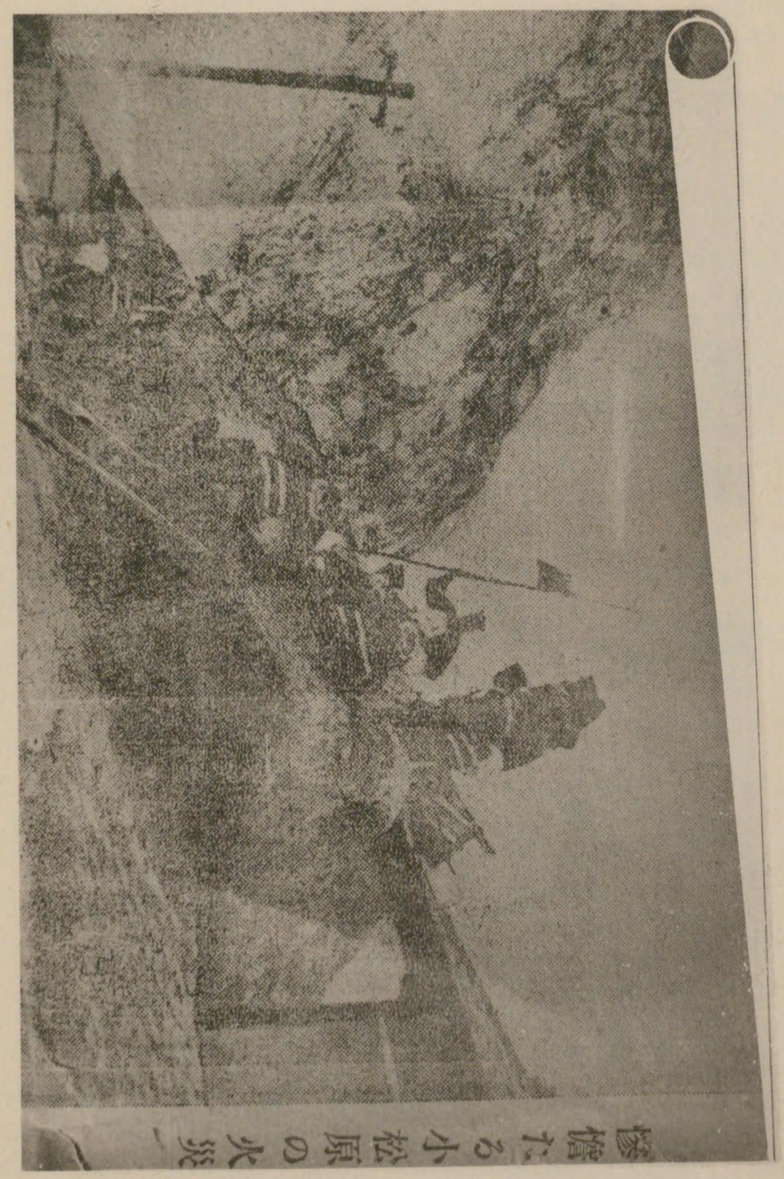


殊勲ノ小松原部ノポンプ

火災ノ慘狀

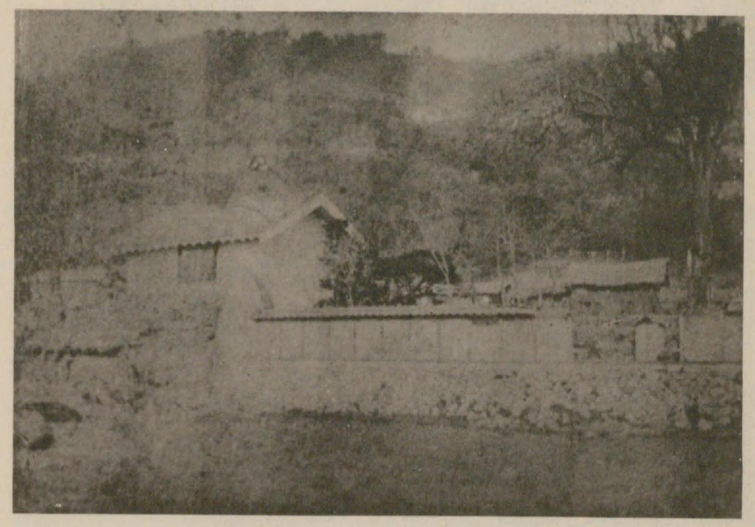


火災中ノ避難民



慘憺たる小松原の火災

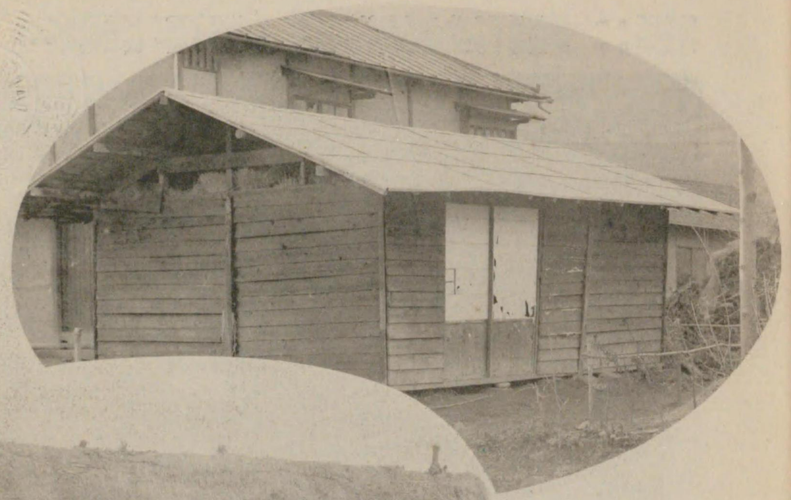
（眞寫開新ノ時當）狀慘ノ中災火

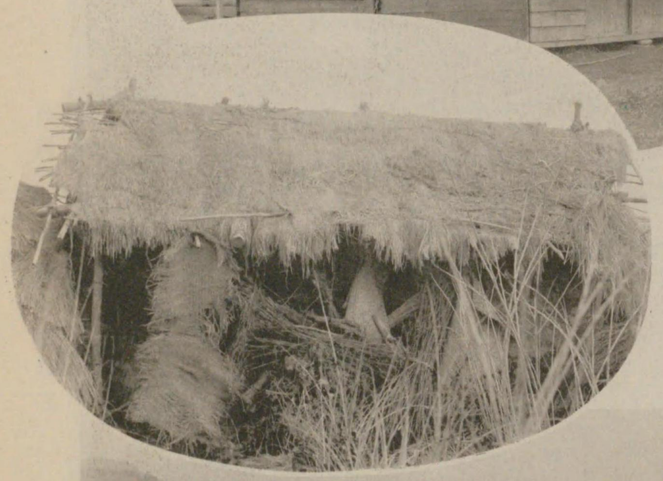


燒跡ノ慘狀（南組久保田岩太郎氏宅）

燒跡ノ慘狀（中組瀧澤主計氏宅）

クツラバルタシ配給ニテ場役村





當夜ノ避難小屋

復興ノ魁小松原製材所

燒跡ノ慘狀（福井邦友氏ノ土藏）

中央道路上ヨリ見タル燒跡

後列右ヨリ　福井本昭。野口幸治。吉岡豊。久保田重男。
前列右ヨリ　吉岡隆。宮内意知夫。龍澤茂。野口敬一郎。野久保田孝夫。司。

本誌刊行會ト員事務所

600-90

序

唯感慨無量

當時村長　大澤鉄左右

序文

大正十五年四月廿日共和村小松原區火あり暴風災を煽ぎ全區猛火に包まれて阿鼻叫煥の巷となり住民僅かに身を以て免れ櫛比の大家高甍瞬時にして跡なく只焦土の黑きを見るのみ燒失百五十四戸損害約數百萬圓慘狀筆舌に絕す當時を追懷すれば慄然として今尙肌に粟を生ず。

惟ふに小松原區は往年弘化震災の際犀川の水一時に奔流して全土其洗ふ所となり無毛の砂磧と化せしもの幸に區民の拮据經營宜しきを得地を拓き農に努め家を建て產を治め爲に殷富里閭を凌ぎ父老稍意を安ずるの時復此災あり、天何ぞ此區にのみ禍するの甚しきや、然りと雖も古老旣に災餘に善處す今人安んぞ策なかる可き罹災者の刻苦奮鬪は着々復興の實を擧げ協勵努力は更に却つて前緖に倍加す可きあるを疑へば玆に火災史編纂の擧ある蓋し其慘狀を永遠に貽し昆弟子孫をして永く先人刻苦を仰ぎ相警め相愈るなからしめんとするにあり。當時予乏を復興委員長に受く故に一言を述べて以て序とす。

復興委員長　寺澤種二郎

序文

畏友吉岡君小松原火災誌編纂の計を樹てられ今や其稿成り版に付せらるゝに當り余に之が回顧事項の記事を需めらる然りと雖も災害に關する事項に對しては特に其体驗者たり罹災者たり又た文筆者たる君の筆に殆んど遺憾なく盡されたり別に變た感想の如きは有り得ない從て何等の資料をも有せない即ち左記の如き歷史的の事項を摘錄して本誌發刊に際し敬意を表する次第である

仄に聞く八十有余年前弘化の大震災は岩倉山を崩壞し犀川の激流を湛へし事數日其豪水は一時に氾濫して狹き兩郡峽の喉頸より擴張せる小松原の鄕を浚へりと其蒼烈たる水量甚だ高く當時の社木の先端數尺を水面に露出せるのみなりと其慘狀や想像にも及ばざる處なり察するに今次の火災と髣髴たる災害ならん然るに四十年に足らざる明治の初年我等の記憶に存する頃へ旣に復興し鬱蒼たる段の原の松原を過ぐれば曉天の心地せる小松原の鄕祖先供養の木魚や鉦の音に和したる念佛の聲を耳に聞き白壁土塀四圍を廻らし香薰鼻を打つ誰か其榮華と餘祐あるを驚かざらん大災后四十年間努力の結晶たる賜爰に精神一統何事か成らざらんの語を味ふの眞の理想鄕の感を深くせり然るに弘化大災後八十年大正十五年四月二十日午後二時何たる惡魔ぞ未曾有の南風猛烈木を拔き屋を倒すが如き折柄而かも南端より火を失し僅か時餘にして北端に亘り百五十二戸を火の海と化せしめた火は烈風の爲め形を現わさず走り行く其色の深紅さは宛ら黑雲に包まれたる九天の龍舌も尙ほ斯くやと慄然たらしめ剩へ堂宇神社迄も此渦中に誘へ笑ひ初めたる桃杏は他鄕の櫻花爛漫たるに反し黑く焦げ無情さ例ふるに物なく見んとせば涙に潤えて見えず宿るに屋なく食なき異鄕の感に打たれたり然も開け行

く聖代の有難さ救護の施設あり公衆の同情あり自覺せる村民の努力に依り十有數日にして雨露を凌ぐに足る假の寓居を設けらる以來前日來の木魚の音は藁打つ聲と變じ老若男女晝夜を別たず復興に餘念なく今や災害後三年の努力は經濟界混沌せるにも不係最早普通の狀態に復せんとす此努力此精神未來永遠に記錄に存して忘るべからざるものならん余等又た當時自ら產業組合の事務を執掌するの任に當り急學役員會に謀り住宅、食糧並に生產資金貸出に對しては特別の方法を採ると共に又一面には小縣信用組合聯合會及產業組合中央金庫より二十万圓借入出來得る準備をなし役員中よりも馬場理事原田理事寺澤監事及不肖の四名は村施設の復興委員として專ら是れに當ると同時に物質的に又精神的に萬腔の努力を拂ひ殊に生產及經濟方面に對しては村諸機關と協盟して遺憾なからしむるに勉めたるに外ならず吉岡久保田兩君多大の努力に就る火災誌は畢竟するに過去を語り將來を策するの資料なるべし之により罹災民は一層堅實なる奮勵に依つて更に一歩を進め禍を變じて福となすの覺悟を劃すると同時に範を社會に示すを想ひ重ねて謝辭を述ぶ

昭和五年二月

共和產業組合長

林部安十郎

序

回顧すれば五年前、即ち大正拾五年丙寅の四月貳拾日、そも此日は如何なる凶惡なる日なりしぞ、村の南端の一角より突如失火するや、風伯狂暴猛威を逞ふして瞬間八方に延燒し、傳來美玉の鄕土小松原中百五拾有餘戸實に五百有餘棟を殆んど烏有に歸せしめたりき。噫々何たる慘狀ぞ、何たる悲劇に當着したる吾人の同胞九百五拾有餘名は、皆暗涙滂沱茫然自失して其の爲す所を知らざりき。然るに苦辛漸く僅に一戸を構へ今や復興して其の慘禍を知らざるの觀ありと雖も、冥想沈思すれば彷彿として當時の狀態を目擊するの感あり、覺えず人をして戰慄を生ぜしむ。

今茲に吉岡豐君號を自文と稱し文章を良くす、面かして卒先常に克く公事に投じ業を爲す、君首唱となり靑衿有志を督勵して、阿鼻慘憺たりし當時の實況を詳錄し一冊紙を編纂上梓して各人に配布し、以て記念と爲さんとす、顏して小松原火災史と云ふ、蓋し此擧たる一は以て各人をして永久に失忘することなく、此悲劇を演せざらしめんことを規し、一は以て同情ある義捐者の芳名を不朽に存して其の厚意に酬ひんとするにあり。編纂成るに及び、予に囑して其の序を草せしむ、予や當時其の慘禍に遭遇する者、豈に領せざるを得んや、乃ち欣然筆を援て所感を錄し卷首に題す。諸君乞ふ編者の意を諒とし幸ひに等閑視せらるゝなく以て座右の銘とせられんことを。

昭和五年庚午の春

御安酒家主

福井有本謹識

序

私は最近中央線によつて木曾福島を通過し、遙に同町の新しい復興姿を瞰下して、多大の教訓を得た。今この小松原火災記念史を繙いて同一教訓を得ることを喜ばずにはゐられない。

昔から『燒けぼこり』といはれて、火災に遭つた個人や、團体にして復興しない事は稀であつた。小松原火災當時の慘狀は、文字通りに、目もあてられぬほどであり、この慘狀とこれに伴ふ罹災者の絶望的なる心理狀態は、編中に滿載されてあり、何人も涙なくしては讀み得ないだらうけれども、これと同時に今この記念史の編纂そのものが、悲しき一切のものをして、過去のものたらしめたる點に於て、小松原村の復興がおのづからこゝに暗示されつゝあることに想到すれば、何人もまた同村の爲に、慶賀せずにはゐられないだらう。

否、同村は今現に復興しつゝある。『燒けぼこり』の諺を、今その儘に實現しつゝある。かくして禍を轉じて、福となしつゝある同村民の大活動と、大努力に對しては、何人も滿腔の敬意を要求されつゝありと雖も、この復興に伴ふ巨額の負財と、その返還の、至難にして、しかも長期に亘るだらうことを想ふとき、同村民の不撓不屈の精神に、更に一層の大緊張を要求せずにはゐられない。

この大緊張の要求は恐らくは同村に於ける現代青年の一生を覆うであらう。痛ましき事の限であるけれども、この大緊張と、これに伴ふ彼等の大努力と大勞働とは、惟ふに習ひ性となり、人格となり、勤勉と、質實と、剛健とが、久しからずして同村民の特性となるだらうことは明である。そして『燒けぼこり』の諺が、こゝに完全に實現されるのみならず更により大なる効力を發揮して、倍舊の繁榮を同村の將來に持ち來すことであらう。同村の、同村民の上に幸あれかしと祈るものは、單に私一人のみではないだらう。

喜びの餘り、こゝに一言を序す。

昭和五年五月十五日

桐生悠々

歌琵琶憶追災火大原松小

曲作歌作行旭谷島

一家は興復し立ち並む家居の數百戸
白根山の上に月澄み出でぬ
心に圍繞の樂しき心もて
村の榮を勉めなん

新興計畫の同情と努力とに
花咲きぬ
各方面の同情と努力とに
力せよ
嘯浮、すらふ樣かれそしみ食べて
命じなしよりかな
家は立ち並む家居は焼け
住の忍び堪へ
學校の焼け
ぬ恨れの百五十
の末長く
損害叫喚を
凡そ
損害叫喚を
午後
ら
の
地獄
に
貢ぎ
し
て
め
ん

春の夢は破れ
時は
正十五年
警鐘の響
二瞬に
宿る
融は
村の
門に
四方
の
見舞
に
集
の
古
より
の
山
の
根
永遠に
木
に
れて
美
ひ
し
れ

村の煽り
の
最端
火事
よ
人々
の
躍
火を
發
し
は
し
に

消防隊
は
焼け
の
警鐘
と
の
火
を
發
し
は
り
ん
と
焦れ
ど
怪
火
出
に

取締
ら
なき
財
有
樣
な
道具
な
り
は
り
ん

誣
ら
れ
て
ん
と
焦れ
ど
怪
火
出
に

出す
家
財
諸
有
樣
な
具
は
り
ん

此
後
見
ら
れ
て
ん
と
焦れ
ど
怪
火
出
に

持
出す
家
財
諸
有
樣
な
具
は
り
ん

身を逃るゝ
家財
諸
有
樣
な
具
は
り
ん

雄を松天文の古より
松鳩
鳩
祐
茂る山の根
小松原
鳩
鳩
茂る山の根
遂に
鳩
に
祝
宿る
融は
村の
門に
四方
の
見舞
に
集
の
古
より
の
山
の
根

雄を松天文の古より
松鳩
鳩
祐
茂る山の根
遂に
鳩
に
祝
宿る
融は
村の
門に
四方
の
見舞
に
集
の
古
より
の
山
の
根

村の
の
榮を
勉め
なん

瓦の
の
銀
瓦
昭和
の
聖
代
和
の
波
の
樂を
勉め
なん

村の
の
榮を
勉め
なん

此後
共に
和
の
波
の
樂を
勉め
なん

夕
朝
の
夕
朝
の
夕
朝
の

緒言

大正十五年は卽ち昭和元年であつて此年に於て永遠に忘れ得ないことが二つある。

一は畏も大正天皇の崩御により遠く多摩の稜に神去りましゝ悲しみの十二月二十五日と一、は本誌をものせむとする小松原の火災四月二十日である。

住みよい村としての小松原は父老の傳說に附會する時　弘化四年三月　岩倉虛空藏山の山崩れから急流の犀川を堰止めること二旬其漲水は一時に奔流してあたら先祖よりの昨日の美田は磧と變り住み馴れた家は倒れて濁水の恣に破壞されて辛くも裸一貫となつた事があつた猛り狂ふ濁流に人々は皆　天照寺山へ麻久保の高地へと避難した　そして食ふ物は僅かばかりの取運んだ穀物と松の實乃至草の根であつたとか。

水漸くにして去る時　疲れた身に　老幼相擁して　繩モツコに棒を差向ひて約二ケ年は沖積數尺の砂礫の取片づけが每日の仕事にてありしときく。

今にして憶へば百年昔の事ながら現在にても我小松原は至る處に一名（砂山）と稱し小丘の點々たるを見尙今度の災害に於て損傷した村社境內の松杉の枯木拂下に於て（長野市橫山町高野善助氏）が伐木の時を見れば地下數尺迄も大幹が埋沒するの現象は雄辯に往時の慘事を物語るもので考ふるだに　今次の大火災と結び併せて大自然の業とは云ひ乍ら呪はずには居られない恨めし事である。

吾々の祖先は苦勞した　眞に復舊の爲めに粒々の辛苦だつた。

然し神は最後迄は虐げなかつた。

川中嶋平原一帶の灌漑用水の幾條かは犀口に其取入口を起して土地亦肥沃　中部山脈の末系西一帶の傾斜地は　靑森北海道を凌ぐの果樹栽培の適地として漸く其改良を見る　昔甲越の兩雄を苦しめた犀川の朝霧は各處に無霜害桑園を出

現して養蠶も亦盛んである諄朴な村民は勤勉努力　克く理財に盡し近時漸く富める村として近鄕近在の羨望の中心となつた時　好事魔多し？

天譴？　惡魔の遊戯か　春酣な花の時一瞬にして百五十余戸數百棟を灰燼し　着のみ着の儘の丸燒姿である、前者の水と後者の火と水と火との相違こそあれ、結果は再び同一な宿命であつた。

今回本誌編纂の動機は一度此悲報傳はるや世は擧げて人心は物質文化を衒ひ精神的道義紙よりも薄いと憂國の志士は等しく澆季の世たるを嘆く時に全信州は愚か遠く海外よりも溫い同情が　文書に物品に金圓にと翕然として小松原に集まつて感涙の禁じられないものがあつた、そして人類自然の同情心は非常時に於ては斯くも期せずして蒐まるものかと共存共榮　相互扶助の人情美の偉大さを今更痛感したのである。

傳へきく弘化震災の慘事も今になつての物語りは一片の記錄さいなく唯きく者をして一つの訓話に過ぎずとさるゝ嫌なきに非ざるを考へて記憶の一つにても散逸せざる間に之れが狀況を記述し以て子孫に傳へて鑑戒とし且つは大方江湖同情者各位の人情美を一括として感謝の意を捧げ　將亦將來も必ずや來るべき災害を尠しにても未前に防ぐの一助ともならば本懷として編纂した所以である。

歲月は流れて四年旣に一部は散失して趣旨に副ふの叶はざるものあるを遺憾とす嘗讀者をし諒察を得ば幸であると共に。信濃每日長野信濃日日東京日日長野支局の各社を初め長野縣廳長野篠の井各警察署更級農學校篠の井高等女學校日赤長野支部　愛國婦人會長野支部岡澤信衞氏其他の御援助を摘錄して禮に代ふ。

復興を祈りつゝ犀川峽畔にて

自文　吉　岡　豐　記

小松原火災誌

目次

口　絵　コロタイプ　一――二二
序　大澤鐵左右、矢田鶴之助、小河原欽治、寺澤種二郎……
　　林部安十郎、福井有本、桐生悠々
大火災追憶歌……嶋矢旭行……
緒　言……吉岡豊……
大火災後の惨狀（石版畫）

第一章　火災篇

火災概記……一
火元と出火の時刻……かくして愈大火に至らしめた四大原因……自轉車の山と高野自動車……其の日の川中島驛……伊勢社の燒失……無邪氣な迷子と小學校兒童……昨日に變る今日の河原乞食……同情に對する感謝……信念なき復興と災害後に於ける財界……宅地變更三戸……縣稅特別稅戸數割の四分減一年實行と村社建築準備金五千圓の分配問題……村當局一部視察旅行の出來事……更級郡醫師會の藥價半減……迷信？前兆？……（防火標語）……一七
火の系路圖……一八
火勢遲速表……
災害前年より昨年迄の農家の負擔と農產物の價格變遷……大東岡澤信衛……一九

○……當時郡長　小林一重……二
小松原大火災の大悲慘……當時篠ノ井警察署長　岡田長左エ門……三
大火災の際に於ける學校……當時共和小學校長　坂口俊雄……二五
火災を思ひ出して……酒井才治……六八
火　難……曾根川千治郎……二八
其の日の有樣……瀧澤壽作……六九
御神体搬出の眞相……若林武男……三三
大火に際して……瀧澤もと……七二
大火災回顧……大日方祐三郎……三九
其の日の憶ひ出……庄田茂雄……七三
火災追憶の二三……渡邊眞……四〇
南信視察旅行先で……坂田袈裟治……七五
○……野本貞男……四一
火災をきいて……山口新太郎……七五
小松原大火災救護班の思出……瀧澤朝治郎……四三
火事の想ひ出……瀧澤すゝみ……七七
小松原大火災に就ての回顧……大澤安通……四五
當時の想ひ出……立浪秀光……七九
異鄕の地で大火災の報に接して……福井吟治……四六
當時を追想して……宮本義廣……七九
鄕里兄上樣……山田朝之進……四八
犀南の新生……吉岡隆……八〇
斷片二三四……藤川隆算……四九
鄕土の大火を顧て……野口孝夫……八一
思出の記……宮林忠二……五二
大火災に遭遇して……久保田庄司……八二
川中嶋村……石井清三……五四
其の日……同人……八三
小松原大火と私の感想……山野敏三……五五
思ひ出の一つ……野口敬一郎……八五
罹災所感……福井邦友……五八
其の日の追憶……福井本昭……八六
大火の想出……森慧典……六〇
大火災追想……宮內憙知治……九二
火災に就ての所感……小山熊太郎……六二
風荒ぶ凶變の朝……久保田重男……九四
四月廿日の筋かき……野口渙次郎……六四
其の日……野口幸夫……一〇〇
燒死の父……庄田嘉平……六五
火事の想出……町田植太郎……六七

第二章　學校役場篇

共和村役場救助日誌……一〇五
失火原因……概況……村の應急處置……救護應援狀況
救護日誌……一一三
罹災家族人員調査表……一二七
罹災同情金配頒表……一三八
配分各部落配當……同情金分配査定案總括
更級郡共和村大字小松原罹災調……一四七
火災被害……役場出張所日記……罹災救助規定……物品給與……燒失建物調査表
小松原火災につき各學校記録……一六八
更級農學校の活動……小松原火災義捐金醵金者名……篠ノ井高等女學校同情記録……共和小學校
校務日誌抄……學年別罹災兒童氏名並保護者名……小學校を經由したる同情……凄慘を物語る手紙
と手紙……六里を飛んだ手紙の文面……共和小學校宛義捐金送附芳名……火災罹者に對する供給
教料書調……學用品供給調
日本赤十字社長野支部の活動……一八五
救護人名……大正十五年四月二十廿一日病類別患者表……外傷患者種類及部位表……救護班派遣申
請ノ件……日本赤十字社長野支部救護班閉鎖後ノ救護者
雜纂……一九三
共和村大字小松原火災記事……共和消防組會員に對し長野縣聯合消防同盟會總裁より慰問……自動車
衝突と消防手の死傷……弔詞……自由詩……思ひ出五首……共和村大火災を詠みて……消防常

識……防火標語番附……燒失戸數一〇〇以上火災調……燒失戸數二〇戸以上一〇〇未滿火災調

第三章　新聞報導篇

信濃毎日新聞報導……二〇二
第一報……四月廿一日第二報……四月廿二日續報
時事新報々導……二二三
新愛知報導……二二六
長野新聞報導……二二八
東京日日新聞報導……二三六
報知新聞別報……二四一
防火宣傳童謠（石版畫）
當時小學校の兒童作文……二四三

第四章　同情篇

共和村災害義捐金募集……二六九
見舞金品寄贈芳名錄……二八二
愛國婦人會同情記錄……三二一
上水内郡幹事部扱義捐金調……上高井幹事部扱義捐金調……埴科郡幹事部義捐金調……下水内郡幹
事部義捐金調……小縣郡幹事部義捐金調……東筑摩郡幹事部義捐金調……南佐久郡幹事部義捐金調
……北安曇郡幹事部義捐金調……上田市幹事部義捐金調……上伊那郡幹事部義捐金調……西筑摩

郡幹事部義捐金調……南佐久郡義捐金調
小松原火災同情金收支決算……三三四

附　錄

歷代共和村吏員名簿……三三五
村吏員名簿……區長及代理者……村會議員……岡田區會議員……小松原區會議員……土木委員
……學務委員……常設委員……岡田消防組……小松原消防組……共和消防組幹部名簿
本誌賛助員芳名……三四七

第一章　火災編

火災概況

◎火元と出火の時刻

大正十五年丙寅四月廿日、火曜日、早朝より風あり午後に至りて烈風、晴。南北拾余町東西四町の長蛇の如き小松原は僅かに二時間にして百五拾四戸數百棟を燒燼した前代より今後と雖も農村には絶後の大火は、部落の最南端材木商松本和市方に於て烈風中庭先に於て味噌煮をなしたる際孫金治（四才）が傍らにあつた鉋屑の鴉に弄火したるものである。各地の花は半開の見頃なるに花には風の讐へ、此日は朝來より平生よりも强い風で丁度村農會でも名古屋より斡旋の初生雛が到荷したので急遽小組合に使ひを以て分配したるも其仮母器に使用するの火さへも各自氣遣ふ程の風の日で刻一刻と風力が增すばかりであつた。

そして田舍の事ではあり非常時の事と云出火時刻は正確には判らねど早い者で漸く午後の仕事に取りかゝり遲い者でも晝休みの茶を飲んで居た最中だから、午後二時十分とも云ひ午後二時三十分ともまち〳〵ではあるが十分が最初出火を知つた時刻で近鄕近在共に警鐘は亂打されて大火を報じられたのが三十分であるらしい。

兎に角小供に燐寸は世の人の親として注意すべきことである。

◎かくして愈々大火に至らしめた四大原因

從來より我小松原には火事らしい火事はなかつた、そして偶々あつてもそれは小火か又は一棟燒失が關の山であつたのに何が故にかゝる大事を惹起したかを攻究したい。

先づ有機的に觀て

一、出火の場所が村落の最南端であつた事

これは何人が觀ても尤もな譯で火元松本和市方は小松原區の最南端で幾分坂路の頂縣道添へにあつて其隣家小山莊三郎氏は瓦製造業とて常時山なす薪塊を二つも三つも積重ねてあつて初めは瓦燒の焚火とのみ思つて居たのも無理からぬことであつた。

一、未曾有の南烈風であつたこと

以上の如く最南端で搗てゝ南の烈しい風であつた、長野測候所の風速を聽くに一秒時二十六米であつたと云ふ、だからすぐ隣家の小山莊三郎氏の薪の山へ延燒し、半乾の松葉の束は火の付いた儘に二三町を距てた里組へと飛んだ。何處よりも早く飛火した瀧澤國治（精米所）氏宅へは北の方より火元さして應援に飛ぶ人によつて雨戸唐紙は取り出し得たけれども木葉の樣に處定めず舞ひ上つてしまふ、こんな例は各所に演じられて瀧澤壽作方より搬出された唐紙も一旋風に卷き上げられて坂田袈裟治氏入口の飲用水の屋根に叩きつけられて最後は灰になつて居た。

農家は丁度陸苗代の播種期で朝の内は少々な風だけれどもと順次仕事はするけれど種子は短冊より遠く吹きとばされて中止する者、麥の二番除草の時季ではあるがあまりに麥の動搖が烈しいので麥の除草さへ出來ない、それだけ應援隊や各消防隊の行動にもすべて自由を欠いた、そして各所に氣壓の爲か大旋風を起してアヽあそこに白い煙が立つたと云ふ頃は麥稈葺の屋根のことゝ風は直面より押つける樣に吹きかけて屋根裏の奥の奥まで火になつて居た。幾分火元に遠い處では先づ雨戸障子を全部閉ぢてネコや莚の類を濡らしてはかけ馬欠に水を汲んではかけて居る、けれど風と火とでよく云ふ燒石に水であつた。二階の障子紙を燃して飛び込んだ火は二階全部を火にしてさながら溶鑛爐の其儘だ。比較的大伽藍と云はれた家屋も二十分位で皆破烈して仕舞ふ全くガスリンに火を點けたも同じ有樣だつた。であるのに火事

に慣れない經驗の乏しかつた村人は田甫に出かけて居た者は農具を田畑に置き去りにし、又家に居た人々も時を移さず火元を差して飛び付けた南部方面より駈付けた人々の云ふに、あの曲松の處で小松原を一目見た時、何んであの飛火の早いのに後に目こそないが火元へ火先へと駈付けるのが知れないとさへ云はれた。もう夢中になつて駈つけた時は五六町を離れた火の系路圖に示す如く瀧澤精米場や、里組では町田植太郎氏鈴の宮方面では內山定吉坂田袈裟治兩氏邊りは飛火の爲に盛んに燃へ出して居たのだ。それを火元二三の家は駄目だからそれからそれへと家財の搬出やら消防に應援して居る內に火は益々猛威を振つて北へ〳〵と延燒した。夢中の中にも此の大火事にあの位集つて居た人々が順次少なくなるので氣がついた時はすでに自分の家は猛火に包まれて手足のつけ樣もなくなつて一時間前には變りない我家も火の悉なる惡戲に噴激の余り怨號するもあり火と睨め合ひをする者もあり或は膝まづいてなつかしの我家の見納めにと男泣きに慟哭する者さへあつた。

悲しみの內の喜劇の樣な話であるがこんな實話もあつた。

一、烈風！旋風！と風のまゝに火は蛇行した、或瓦葺屋根の主婦は暗雲低く垂れて風の吹き廻しで幾分洩れる牡丹色の薄氣味惡い雲の道行に養蠶本業の農村とて蠶具の棚竹が燒ける騷音はトン〳〵〳〵バチン〳〵と宛然破竹の勢そのものゝ阿鼻叫喚の中で自分の腰卷を取はずして竹竿の先へ結へつけ猛火に向つて打振つて居た。これは一ツの迷信な咀へに過ぎざるも又一面眞劍さが伺はれる。

一は火が直ぐ向ふの家まで延びて來た燃ぶる惡臭に例の棚竹の燒け割る音の中に雨戸障子は全部閉ぢ切つて天照大神の神棚を座敷より取卸し緣先に鎭座し鎭火と無事を一心に祈りたるも火勢愈々猛烈にして背中の方より蒸さるゝ樣に刺さるゝが如き焦熱に堪へ兼ねて道に神棚を置去りの儘避難した者もあつた、一面笑ひ事の樣な實話で如何にも無念さが現はれて居る。

又或者はあまりの烈風で田甫の仕事も思はしくないから山仕事でもと夫婦揃へで山へ薪とりに行つた仕事も濟んで皈る時、後より慌だしく消防の法被を着た人々が驅け拔けるので（信里村有施方面の消防手）不審を抱き何かありますかと聽くと、あんたは小松原ですか小松原なら南の端から火が出て全滅です今盛んにお宮が燃へて居るそうですと云い樣驅けて行きます。よもやそんな事とは思はれなかつたけれど、折角の薪の荷を尙背負ひながら（俗稱のぞき）の處迄來

ると案に違はず村中火と煙でした、度胸を拔かれて背中の荷も放りなげて飛びつけたが既に遲くて家はなかつたと云ふ悲劇もあつた。

一、地の利か惡がつたこと

西は茶臼連丘で漸く東南に開濶地帶を持つ小松原は北は犀川を狹んで上水內郡安茂里村で大町街道によつて信里村の一部と安茂里、小田切、七二會、長野市一部の應援を望むのみで他は悉く東南の應援を賴むより他は出來得ない。上高井、長野市、上水內、更埴北部は川中嶋驛を通ずる縣道犀川線に依り、更級中部は小松原今里に通ずる村道中央道路、南は篠ノ井町を起點とする縣道篠ノ井安茂里線に依るより他はなく其縣道は小松原の中央を南北に貫通して其兩側一帶は人家軒を並べ約十餘町一時に猛火に包まれたので應援隊や消防隊は、駈付けては見ても到底危險で村落へは足が踏み込めない。氣は焦つて見ても傍觀するより他なく、漸くにして器械を使用するも何れも村落の東側の家屋位なものである。其內に犀口組が危險に頻したので上中堰は蠶箔やら麥稈薪など踏込めて流水を堰止められたので下流へは一滴の水さへ下らず、萬一水さへあれば幾分は助かつた家もあるものをと死兒の齡を數へるに等しく、唯破壞消防を以てするより他なかつた。然し何れの應援消防組も優るとも劣らぬ活動振りで格別にも南組松坂七藏氏の篠ノ井町ガスリン、犀口組で眞嶋村のガスリンは殊勳中の効であつた。

一、建物の多くは可燃性の建築であつたこと燒失家屋百五十四戸中の多くは弘化の震災以後の建築にかゝるもの數多く、唯俗稱腰ノ手及び鈴ノ宮一帶にそれ以前に建築のものもあつた。然し大体に於て七八十年此方のものであるが何れもが田舍の事とて木造麥稈葺で瓦葺の家屋を列記すると漸くにして左の二十一戸に過ぎず、卽ち

南組　坂田菊治　清水兵藏　松坂慶作　小出はない　小出貞幸　小出寅太郎　飯田新吉　瀧澤淺太夫　庄田嘉平　清水鶴治

中組　飯田　保　飯田國之助　瀧澤鶴治　山田行太郎　堀內君太　唐木田宇多治　坂田　禮

北組　野口俊治　野口藤伊　太田時男　福井睦治郎

以上であつた。此可燃性建築の處へ翌大正十四年十二月は元小松原部落有地であつた鄕內山（明治四十五年村有地となり總面積三十三丁歩）の手入の爲掃除伐をなし舊緣故を以て小松原區民だけへ希望者には一般入山を許可した。始めて

の試みではあるし初冬の天候も良かつたので十二日より一週間の期間中は何れも我劣らぬ精勤振りで大概の家には一二の薪の鳶が積まれた。それも此火災には與つて火勢を猛烈ならしめた一大原因である。燃へた燃へた、家混んだ處の此樣な場所へ火の付いた時は全く唸りを生じのの字に渦きしの字に燃へた。一里に餘る霜解け道を一週間の勵みも一氣にして灰火した思へば惡火の手助けをしたに過ぎなかつた。中にも忘れられない南組馬場時重飯田新吉の兩氏は或は土藏に又は蠶室にと新築されて瓦葺最中のもの何れも火災一週間前に全部竣成したが中へ一物も納めずに燒いてしまつた。他北組野口忠治郎氏は村內に於ても大規模の養蠶家である。前年より着工して漸く理想的な蠶室を建築し落成の其日に於てこれも燒失した。尙此他にも中組小山熊太郎小山利兩氏の如き多年の設計は報ひられて何れも家屋の改築に一部は改造に大工と共に專念したが共に百年の恨を殘して燒失してしまつた。こんな話は養蠶發生前とて各所に見られた。噫純農村とはいへ小松原は家造りの立派な村として近鄕第一に指を屈しられて居た。然も漸く內外共に充實して來た時に於て惜むらくは昔を偲ぶ寫眞のないことを殊の外の恨事とする。

一、火事の季節であつたこと

我國には火事が比較的多いが地方別に於て其原因に又季節に相違がある。關東關西が冬期に多くて我信州の如きは春季卽ち四月五月に多い。これ畢竟空氣が乾燥し過ぎるのと養蠶國であるだけに火の取扱ひの多いことも大變關係する事と思はれる。小松原の火事は實際火事季節であつた、そこへあの風だ、春はしやぎに加へて烈風、燃へるだけ燃へずば止まない、あれが幾分花の盛りを過ぎて靑葉若葉の候なれば同じ飛び火も立木に遮ぎられてあれ程迄には至らないものをと愚痴も出したくなるが事實もそうらしい。そして此日は近鄕近在の多くは春祭日で七二會村では古間の大々神樂で練があり其他川中嶋平一帶は皆それらしく、神ならぬ身の知る由なく、前夜より泊りがけに出かけて居つた者も多かつたそして急を知つて駈け付けた時にはなつかしい自分の家は勿論隣り近所は跡形もなく、家族の立退場所さへ不明で失神した者さへもあつた。

◎自轉車の山と高野自動車

丁度東京大震火災直後に本所被服廠へ參詣した時先づ驚ろいたのが燒出されの自轉車の山だつたが、小松原火災につ

いても南よりの者は道路は猛火の爲に遮斷されて仕方なしに曲松上下一帶の畑の中に山と置かれ東よりの者は四ツ屋池田大太郎氏の周圍、吉岡才太郎氏の庭一面に置かれて直に自轉車の山だつた。一方瀧澤精米所の庭の一部に車庫を設けて營業中であつた高野新治郎氏は當時感冒にて臥床中なるも此大火を見て猛然離床先ずガスリン鑵を積み猛火の中を犀口を西へ兩郡橋を渡つて長野市へ避難の豫定で疾走した途中、火は犀川を飛んで安茂里村字小市の山林に火災を起し、尙小市部落の人家へも盛んに火の子が飛ぶので急遽應援の爲め出動した安茂里消防組小市部員も自分の部落の危險を見てはと疾走中の高野自動車に器具を滿載して直ちに歸村の上村の警衛に任じた。尙大町街道を駈けた安茂里及び長野市三番消防組も多くは小市部落に止まつて警戒したのであつた。それより高野自動車は長野市を迂廻して川中嶋驛前に避難し引續き復興の爲に更級繭糸會社の自動車と共に東奔西走して盡力する處が多かつた事を附記する。

◎其の日の川中島驛

小松原より川中嶋驛へは徒歩にして二十余分の、十二町の距離にあつて、通學生勤務者等で信越線中乘降客の多い方では他驛に其比を見ないのである。長野市のサイレンや警鐘が鳴る、然し强風の爲火は蛇行して地面へ這つてしまつたのと長野市ではあの旭山の突峯が邪魔をしてよく判らないが警察電話や新聞社の速報は隨所に掲載された。六十三、信毎、の屋上庭園に踏切の袴線橋に登つて見る者が多かつた、村の火事として一刻も早く歸りを急ぐ生徒や親戚知己への見舞客で一列車二列車と何れも滿員だつたが火事場に近づくにつれて犀川の鐵橋を渡る頃は早くもドアを押あけて列車が停車するや乘客の多くは切符も渡さずホームより西垣を越へて驀(まつしぐら)に駈け出す者、ホームに辭座して動かぬ者など一時の混雜は到底名狀すべからざるものであつた。驛では切符が符合せずして皆欠番にて報告するの止むなき狀態であつた。

◎伊勢社の燒失

○木曾義仲の建立に依るとされて居た村社伊勢社は遂に燒失した。此火の系路は大体に於て觀音堂の高所より吹卸す飛火らしい。千年の老松老杉の落葉は拜殿より奥社へと屋根一面に堆積し、松柏の枝亦屋根を覆ふて文字通りの晝なほ暗いものであつた。犀口へ駈付けた應援隊の一部は、村社の屋根より一條の白煙を見た時、森嚴な森に吹き包まつた風は又も一大旋風を起して屋根一面は火となつた。人々は騷いだ。多くの寶物は寶藏庫にあるものゝ氣になるのは御神体である。然し焦れば焦る程奥社の扉はあかない。森を燒き拔く音全く燎原の火だ、バチ〳〵ゴウ〳〵と宛ら鬼神の業だ、千年の御神木も類火の爲に燒けた、木兎(ずく)の巣穴か空洞一面は火になつてチヨロ〳〵と燃出す火は鐵砲風呂の煙突其ものだ、脂の多い御神木はヂリ〳〵と尙も火勢を增して人の魂も何も怖氣を起して傍へも寄りつかせない、何時中途より燒け折れるも判らないからである、水は無いし燒けるばかりだ、燒けるだけ燒き盡さなければ……と人々は殺氣立つて來てゐる、若しや氏神までは何う考へても燒けるとは思はなかつたから、あの太い格子戸は開かない、アレ〳〵と人は喚聲を擧げるのみだ、若い警察官も居た（姓名不詳）消防手も大勢集つた其内に飯田捨雄氏は神樂舞臺の脚を以つて奥社の扉を叩いた、町田藤太氏は眞榊の框を以て一たまりもなく叩いた、非常時とは知り乍らも神罰でもと幾分躊躇した人々はこれに力を得て一層なぐつた、蝶番はパツと破れた、人々は雪崩込んだ、ゴム底足袋で土足で、如何にしても呪はしい此惡火よ、火の前には何の罰も科もない、狹い場所で揉みあふ樣に出せるだけ出した、火風は息つきながら愈々猛火に勢力を增して來る、周圍は皆紅である何處を見ても　三才の兒童に拍手を打たせた恭じけなさの宮居も、もう骨組だけに燒けた、尊嚴と禁足で常に不案内の場所だけ樣子のわかる者とてはなく不可解の裡に御神体は猛火を潛つて搬出された。

そして境内につづきの町田藤太氏へ持込まれる處同家も愈々危險に迫られたので上中堰の堤防を池田大太郎氏方に遷座されたもので鎭座まします事三日である因に梁に函入れとされ固く釘打として納められた。木曾義仲の記錄は嵩を打込んでは登るはづれては打込みする内に嵩の柄は折れ狂ふ猛火に包まつて遂燒失して仕舞つた。

◎無邪氣な迷子と小學校兒童

火事の恐ろしさを知らない無邪氣な子供等は、朝からの風の爲に大概は家に居たらしい。こんな大事になるとは知らない親達は、皆火元へ又は火事の見へる處まで出た。後を追ふ小供等は平生通り樣子の知つた方へと出掛けた。飛び火は數ヶ所から一時に燃へ出して、唯煙と火と風とで村は一寸の先さへ不明である。偶々駈け付けて通り過ぎる人々の手

に依つて多くは安全地帶へと救はれた、親を尋ねる泣聲、稍恐怖を知る小供達の喚く音で生れながらの生地獄であつた。幸にして畫火事であつたからよかつたけれど、夜中の出來事ならば大人は知らず小供等の生死の程は想像に難くない。

私に四才の小供があつた。自分の駈付けた時は村全体火の海であつた。火で建てられた樣な家を見る時にあきらめはついたもの丶同時に起るものは家族殊に子に對する親心であつた。立退場所へは皆集つたけれども四才になる女兒はまだ見へない、誰に聞いても知らないと云つて居る、家の燒けたよりもそれが又心配でならない、村一面の焦土の中は尋ねきれない。見舞つて呉れる人々の情の言葉さへ身に入らない、一体何處へ行つて居るのだろうと。もしや家は東側だから火事の何物かを知らない子供が樂しい賣出しか何かの音樂隊でも來たのを見る氣になつて西へ〳〵縣道の方へ行つたに違ひない、思へば氣の毒な事をした、死ぬ時のない樣に一人遊びの出來る迄になつて煙に火によつて悶死したと思つた時、頭が熱してならない、目の前に見せつけられたなつかしの我家の燒失と間髪を入れずに此の悲しみを考へる時、一時は狂亂の狀態だ、飲む酒も更にまわらない、熱した頭は却つて冷へた、燒土の中を種々と棒を以てつゝき乍ら彷徨したが見當らない。誰彼の別なく聞き廻つた。大方燒死んだとは思ひますがメリンスの梅の模樣のチャン〳〵を着た四才位の年には割合に大きい女の子が居りませんでしたろうか、名は「宮子」と云ふのですどうぞ御願ひします。体は寒く動哭するのであつた、火は下火になつて唯各所にトコ〳〵と燃へ殘りして居る、もう隣村へは電燈が點いて愈々其光さへ明瞭になつて來た、見知らぬ人に助けられて泣き腫らした目をしてシャクリ乍ら歸つて來た、聞けば火に追はれ名も知らない人に連れられて今里へ避難して居たとのこと、同生の思ひであつた、瀧澤主計氏の三男暢君は火事一ヶ月前に出生したのだ、丁度ツグラに包まつて座敷に眠つて居たのでした、未だ乳兒で火か風か何も判らない其内に火は延びて來て當家を燒き初めた、人々は駈付けたそして仁ある人の手によつてツグラ諸共罹災を免かれた、元水車屋吉岡才太氏の家にと救はれたもの丶鎭火後になつて家内中は何處其處の別なく探した結果漸く見當つた、助けられた子供は頑是ないけれど家族としての惱みは並大抵でないものが伺はれる。

何時もの樣に往つて參りますの言葉を殘してこんな事のあるとは夢にも知らない小學校の兒童等は今になつて思へば一生の見納めとは氣にも止めずに登校した、各地は花の世の四月二十日である、年々に行はれる春の遠足に一年は茶臼

山何年は大雲寺と一日千秋と待つて居た、學校側でも放課後春の遠足に就ての職員會を開く時の刹那の出來事であつた、今しも（當時）坂口校長が一二の意見を發表した時ガン〳〵〳〵の警鐘であつた、そして我も人もと曲松まで來る時通り慣れたる縣道は人の波と騒音とで到底通行も出來ず山の根越を迂廻し又は東田甫を轉ぶ樣に朝出る時變りなかつた我家へついた時にはすでに甘へた家へは入る事が出來なかつた。何につけても罪ない子供よ、伸びるだけ伸び得らるゝ青春の時に於て身の毛もよだつ此不仕合には眞に同情せざるを得なかつた。

◎昨日に變る今日の河原乞食

燒けた、眞當によく燒けた、それも火早やかつたからだ、幾分投げ出す樣に出したものも棟が落ちると一所に火を被つて燒けて了た。全く瓦かけと灰だけで充された一面燒野原になつて了つた。火より離れた場所にと搬出した一二の物品を大事と其傍らに藁を重ねて田の水口の手堰の中に身を沈めて寢るには寢たが夜に入つて寒さと宵の口から降り出した火事雨とで疲れた休は何うしても眠る事が出來なかつた。

住宅の燒盡されたのは仕方ないものとして、何より痛切に感ぜしめられたのは日常事欠く便所の燒失だつた。一望焦土には便所とては更になく皆野天葬だつたそして愧ずる氣持もなかつた。當夜は各方面や親類の情ある握飯で空腹も感じなかつた。翌日よりそろ〳〵不自由を感じたものは炊餐具である、庖丁は燒出されたものか、鎌で代用し三本の棒で組合せたものにこれも棒ばかりの鍵を吊して鍋釜をかけて焚く本當に原始時代そのものだつた。隣村の消防隊や應援者が棒に莚をつけた急造擔架によつて數多の財寶の灰は一定の場所へと積み重ねられて跡片付も日一日と整頓されてゆく大黒柱の沓石、炬燵穴等皆なつかしいものである。平面になつた燒跡を見つめる時陽炎の樣に懷しい我家があり〳〵と見出されてならなかつた。此處は奥の座敷あそこは御勝手となくてぞ、人々は戀しがる、一掻きの灰の中からは泉岳寺參詣の時買つた義士の名入れの茶椀欠も見へた、明治四十一年長野に開かれた共進會の時記念に買つた花瓶のかけたのや國運を賭した、日露戰爭の凱旋兵士の記念の盃や、岩村田の鼻顏稲荷の狐の像も見出された、此火には稲荷さんも八幡さんも何もかも駄目だ總て灰そのものだつた。

◎同情に對する感謝

夜が明けて各地から一揆そのものの様に群だつて吾村指して集ふ者は皆跡片付けに應援の人々である。救護事務所に共指揮を受けて部署を定めらるゝや眞劍にやつてもらつた、折惡しくも二十日より二十四日までは斷へず强弱こそあれ毎日よく風が吹いて輕い灰は無暗に舞つた宛ら雲霞の様に、そして第一目を痛めてならなかつた。其中をも厭はず働らいてもらつた、がつかりとしてなすことを知らない否手のつけ様もない爛れ果てた燒跡は此人々によつて力づけられて幾分宛も秩序を立てられたのだ。トラック、荷車、リーヤカー又は自動車何れもが救護事務所前で停止する皆心からなる各地同情物品の運搬であつた。

小學校の高等科兒童は午前は授業で午後は職員の指揮の下によく罹災者への同情品の配給を甲斐〳〵しく働かれたのも涙の種であつた。

曾て青年會に關係して居つた當時、上高井郡保科村に大火があつた。私は幹事の人々と自分の組内を一戸〳〵と廻つて白米を本位に義捐した事があつた。出來るならばやりたくなかつた。そして俵に納めて會長（野口近治氏）と共に數臺の荷車であの坂道を保科村役場へ届けた事があつた。又大正十二年九月の關東震災には矢張り同じ様に漬物を本位として義捐し廻つたことも呼び起されて實は厭々やつたあの仕事も人の事ではなかつた、自分の事をしたのだと考へ出されて遺瀨がない。相互扶助だ、共存共榮だ、人の事は自分の事だ出來る時の同情は出來るだけやらなければならないと思ふ時頭は遠くなつた。そして應援の人々を見る時神の前に在る時の心持がしてならなかつた。

◎信念なき復興と災害後に於ける財界

災害後の幾日かは混雜に追はれ花は何時の間に散つたか八十八夜も近づいて世は若葉の時になつた。燒野ケ原に偶々殘る立木は眞黑でわからないがそして一本二本と伐り倒されて今迄は遠いとされて居た南組も腰の手もすぐ手前に接近して見へる。疲勞の余假を見て耕作された麥は既に穗を出して天照寺山にツヽジの赤が眞紅に旭に映へて居る。燒野ケ原を見んものと蕨刈をかこつて來る里人は一腰据ては又登りして行く平年ならば二度三度の蕨取りをしたものを今年は

蕨取り處ではない。こんな事を人は云つて居た、こんな災難に遭ふにつけても穀の値もよし繭相場もよくて幸福だ（糊一俵拾圓三十錢、繭一貫匁白拾圓八拾錢大麥一駄十四圓、小麥十七圓）先づ蠶だ養蠶でなくては收入の道がないと一圖にこれに頭を入れた。農會も村當局も皆これだそれにつけても先立つものは家だ蠶室だ、何はともあれ大工だ材木だ又これ等の人々もあらゆる手段絲故を辿つて運動や奪取に競爭であつた。火災直後に名入の茶腕を見舞に使つたり忘れた頃にいとも丁寧な物品を以て建築の必要を迫つた。先づ誰よりも最初に建築をされた者は南組小出重作氏だつた、あの小高い腰の手に日當りよく東面した蠶室は建てられた、繭相場はよいしどうせ遲し早しなくてはならない家だし年寄りは老先き短かいにこんなバラックから死んで出て行かなければと思へばよく〳〵の緣念だと悲しむ樣に洩らす言葉、そうだ誰かが云ふどうせ建てねばならぬ家だ今年の養蠶を一年遲く建てると思つて棒に振れば以前に優るいゝ家が出來る、捨てる神もあれば救ひの神もあるからそうだ家を第一に建てよう何しろ蠶でなくちやあ收入の道がないから可成大きな家を建てゝ養蠶をどつしりやれば何のこれしきの火事は忽ち挽回される、一つ信用組合か小松原銀行は利息が高いし北原の實業銀行からでも一時借入れて同情金も貰つたし早速建築しやうと各地に共話が一番詩入れがよかつた。春蠶の收入と無盡を一本取つて半分償却しうまくいつたら來年一ぱいで借金は帳消しになる家が新しくなるだけいゝと云つた樣に明日は鬼門柱が立たればあちらでは復興を謳くドーヅキの音で毎日賑やかだ、やれもうあすこでは建前だ偉いものだと賞めれば我負じと又鬼門柱が立てられた、かくして輕い思慮と今に至つて判る國を擧げての財界の恐慌は翌昭和二年に至つて差づめ向つて來た政府直轄の臺灣銀行は貳億の補償の爲に時の若槻内閣は交迭され、續いて第一、十五、渡邊アカジヤ等の有數の各銀行も取付けの狀態である、政府は取急ぎ奏請して勅令に依る支拂猶豫令さへ發布するの止なき狀態になつた、折角と的事にしてた養蠶も均一相場とのみ見越しての計畫はすつかり裏切られて了つた、物價は下る收入は減ずる建築請負の方からは催促は受ける、急造の請負普請は手拔きの多い爲狂ひを生ずる戸障子の開閉は不自由で銀行會社よりの利息の支拂さへ出來兼ねるの結果であつた。憶へば保科の火事は大正五年で時季がよかつた剩さへ保科の罹災された人々は、木材の多くは自給自足であつた。そして翌六年より七年八年と歐洲動亂の餘波を享けて日本に黃金の波を漂はせて來た、物貨は暴騰して試みに當時の物價を示せば肥料に於て（大豆粕一枚五圓五拾錢、棒桑一駄拾五圓、繭一貫匁拾七八圓、大麥一駄拾八圓、小麥一駄貳拾圓）と實取引こそ行はれなかつたが人氣は頗る順調だつた。

かくも破格な狂ひ相場であつたので忽ち復興した苦痛を感じなく復興したらしい。焼け上りと云つて此意氣と努力とに活動するせいか何處の火事場を見ても皆焼ける前よりよくなるものだと昔ながらの言分だ、然し今や世は何から何まで國際關係が一層烈しく響く様になつて來た、先づ焼上るなんと云ふ事は、やり方で不可能とも云へないが普通のやり方に之をかけた位では到底駄目だ。

災害後富める村としての小松原への融資先及び金額は大体に於て、長野農工銀行、更埴銀行、當時長野實業銀行、當時小松原銀行、共和信用組合、其他個人貸借、無盡等である。

次に融資された金高は正確を欠くも編者の調査を概略表示すれば次の如く。

長野農工銀行	七萬圓
長野實業銀行	四萬圓
更埴銀行	參萬圓
小松原銀行	貳萬圓
共和信用組合	五萬圓

個人貸借（不詳）として尚無盡に於て小松原同志間のものは論を俟たず、他村のものと雖も從來は入花する者さいなかつたものを、災害後は何れも落札者は小松原の者と、確定された位になつた。中津登記所も暫らくは小松原の人を以て充たされ烏の啼かない日はあつても小松原の者の居ない日はなかつたとさい云はれた。

小松原の火災は財界に於て時季は悪かつた、尻上りもしなかつた、復興は外見だけである、鬼門柱を立てた時の努力や計畫は何時實現されるかも判らない、徒らに悲觀の説を述べるものでもない事實だからだ。

◎宅地變更三戸

未練なく焼くに焼き盡された焦土の中からは復興の茅生へが伸びて來たが、何處も同じ前の焼跡へ寸分違はずの宅地を選んだ此際だから幾分宅地の變更はあるものと、又なければならぬものを漸くにして中組の宮本義廣氏の腰の手より平坦地に瀧澤瀧治氏の天照寺大門口にあつたものが縣道添へに南組庄田嘉平氏の里組であつたものが縣道添へに何れも

現在の場所へ移轉したものだけである。

◎縣税特別税戸數割の四分減一年實行と村社建築準備金五千圓の分配問題

村當局もこんな突發事に處した努力も感謝せねばならないが、罹災者も忘れない出來事に人心は動搖した田草取る休みの時も、苹果の袋掛けに建前の手傳へに出る話しは相變らず火事の話であつた。燃え始めから避難するまで、十人十色の話で持ちきつた。

此大火事に村費の補助のないことはない筈だ、岡田の隧道（トンネル）を開けるのにさい村費を支出したものだなんで云ふだけ云はねばと協議した。罹災者の全部は勿論出席がなかつた。今夜は半數の出席者を見ないから明晩はお宮の焼跡へ集合すつた。誰云ふとなしに天照寺へ集つた夏の短か夜を終日勞働して蚊に攻められながら裸ローソクを灯して何とかして貰ることゝ申合せて解散だつた、翌晩はお宮の焼跡の野外集會をした。燃へざしを拾ひ集めて焚火し乍ら種々と詮議を重ねた。先づ村社建築準備金の五千圓はわれ〳〵罹災者の貰つた金だからそんな準備金などは不要だ、申出で各自に配頒を受ける方がよろしい、お宮はお宮で改めて寄附を募つて建てるがよろしいと硬派の人々大多數は主張した。中にはお宮も罹災者の一人だこれ位殘すのも然るべきだと主張した軟派の人も見受けた。そして結局は配頒を受けることを請願することに意見が一致し此請願者として各組より參名宛の代表者を選出した時八月七日であつた。

代表者の氏名左の如し。

北組	酒井才治	吉岡長藏	野口渙治郎
中組	唐木田友彌	吉岡豐	飯田國之助
南組	福井莊	庄田肇	小出忠一郎

右代表者は共和小學校作法室に大澤村長及び各村當局者と面談懇々請願の上遂に諒解され數日を經て罹災者各戸へ配頒されたのである。

續いて罹災者有志は瀧澤瀧治氏宅に集合の上昭和二年二月十一日大澤村長宛に請願書を提出した。

請　願　書

一、大正十五年四月二十日ノ小松原大火災ハ東西古今自他共ニ驚クノ大災害デアリマシテ其突發事タルニモカヽワラズ村民擧ケテ之レガ復興ニ狂奔サレ聖代ノ餘澤ハ江湖同情者ノ救助ト共ニ辛ジテ昭和ノ新年ヲ迎フルコトヲ得マシタ巷間茶話ノ裡ニモ唯涙ヲ以テ感謝致ス次第デアリマス

一、惟フニ自治体トシテノ小松原ノ災害ハ夫婦ニ例ヘハ其一方ヲ欠キ部落關係トシテハ其中樞ヲ失ヒタルモノニシテ災害ノ程度ハ貧富ヲ通シテ零トナリタルモノデアリマス

誰カ四月二十日ヲ目ノ邊リニ憶ヲ致シ年餘モ速カニ元ノ小松原ニ完全ナ共和村ノ復興ニ精進致シタヒノデアリマス

一、思ヒラク大災害後ハ必ズヤ人心ノ動搖ハ期シテアルベキデアリマス況テ思想變移スルノ現代ヲヤ万全ニ進ミツヽアル村治ニ對シ殊更ノ請願モ輕率ノ沙汰カトモ存ジマスケレドモ復興ノ努力ニ御鞭韃ノ意味ヲ以テ左ノ請願篤ト御審議ナサヒマシテ賢明ナル貴下ヲ始メ公正溫雅ナ議員各位ノ御同情トニ依リ本年度豫算編成前ニ於テ御諒解ヲ得バ一人被害者ノミナラズ共和村ノ幸福ナルコトヲ

右連署ヲ以テ請願ス

要　項

一、縣稅特別戶數割賦課率減額ノ件

一、資産ヲ酌酌スル等級割ノ公正ナル見立方稟請ノ件

以上

村當局の理解に依つて昭和二年度一ケ年は罹災者に於ては特別戶數割の四分減を實行されたのであつた

◎村當局一部視察旅行中の出來事

年々に兒童は殖へるばかりで、明年度新學期からは一學級を作らねばならぬので、學校の一部に村役場を仮用する關係から村役場新築を決定された。それに就ては可成理想的な役場を建てたい見地より、南信地方の優良町村の視察旅行を企てられ愈々四月十七日の夜行列車で（役場側より當時收入役岡澤素一郎氏）他村議一同十二名は出發した往復四日に亘る視察も無事に終了して今しも飯路につく時下諏訪驛からの同行者小河原欽治氏の不圖とした電話に依つて承知した一行は不安の裡に篠の井驛に下車取敢ず驛前の飯嶋幸右工門氏の自動車を同情され飯村した罹災者の議員は共意志に任せ急遽村會を召集して善後策は講じられた此時四月二十日夜十二時であつた。

◎更級郡醫師會の藥價半減

醫は仁なりとは云へ近時動もすると種々な背德醫師の現れる中に小松原火災を同情した更級郡醫師會は（齒科醫師會も含む）其翌日急遽醫師會事務所に役員會を召集し堀會長以下會員出席向ふ壹ケ年間は小松原罹災者に對しては藥價半減の申合せをなした。

◎迷　信？　前　兆？

大正十五年の冬は降雪が多かつた、數多の傳說を秘めた前河原の道路添に在つた（曲松一名一本松）は雪の爲めかそれとも前兆であつたか北へ地上二三尺の處より折倒れた人々は大變惜んだ炎天百度前河原一帶の桑畑への耕作の往復に北山中より篠ノ井町へ出る馬子又は通學兒童は早くあの曲松の日蔭へ、早く一本松の下で全身の汗を冷したいものと張合に一心に働いた處だ馬さいも停つたものだ此下迄來ると、樹齡百年余かくも多くの人々を慰め喜ばせた風致の曲松は此年に限つて然も風さへない夜北に向つて倒れたこんな事も前兆ではないかと今にして火事の話しには附物である。

小松原住民としては知らないが隣村の人々の云ひ合せた咄火災より一週間程前の夜の事用便に出た時西の方に當つて一本の太い火柱が狼烟（のろし）の如く立つたのを見たそしてあまりの不思議な現象なので暫らく我れに飯つて見てる內に其火柱はパツタリと北へ倒れた此話しは丹波嶋の人にも上氷鉋の人にも又於下の人にも異口同音に話された。迷信？前兆？眞面目な人々の咄共ま〻なるも一定の場所から北へ倒れたこと今に見よ大天災が突發するから心ある者よ用心せよとの知らせか、神ならぬ身の知るに由なく遂此慘狀を惹起した一犬虛を吠へて万犬共實を傳へたものではないらしい。

大正十四年は小松原四組（卽ち段之原組、南組、中組、北組）の祭事係の若衆連は中組が本組だ、北組が本組だと互にせめ合つた。北組の人々は氏神の境內つゞきだから本組だと主張し、中組の人々は俺が方には各組とも當時の當事者間に於て連署した四組共通の規約書がある、それが論より證據だと主張した各組とも讓らなかつた、集會に集會を重ね

て散々揉め拔いたこんな問題で若い衆理窟で此飛沫が何處へ影響するかも計り知れないと見た村當局、駐在巡査、氏子總代、其の他有力者は調停に立入つた。仲々妥協出來ないで春が來たそして遂に四月二十日は此火事であつた。年寄りは云つた氏神の祭事係が今迄に何事もなくて濟んだことを持ち出して揉み合つたから神の怒りでこんな目に遭つたのだ神罪だなどと片腹を痛めた人々もあつた迷信か！前兆か！天譴か！罹災區域三組共申し合せた樣に太神樂や附隨する道具一切はあまりの火早さのため全く皆灰化して了つた。就中中組の如きは段々延びに延した太鼓が春の祭にあまりにも破れて音色が惡いので漸くにして組の基本金も約二百餘圓程積立てがあるので一部を組內寄附に求めて太鼓を新調することに決した。急遽寄附をして愈々長野で買ふかそれとも何處か或者は越後の高田へ行けば汽車賃處ではない品が良くて値が安くて要するに値打だから高田迄出掛けて貰ふ樣にとの事で八十八夜の養蠶神祭に間に合ふ樣にと祭典掛りに世話人と朝の一番で高田へ向ひ夕刻早く中央道路を代る〳〵新らしい太鼓を打鳴らしながら歸つたそして八十八夜に組內一般に披露すべき豫定の處此火災であつた。畢竟燒く爲めの太鼓を高い安いの詮議の結果越後高田まで買ひに行つた飽くまでも授からぬ太鼓なのだ。

（防火標語）

緊縮節約大事ぢやけれど
火の元用心なほ大事

火ノ系路圖

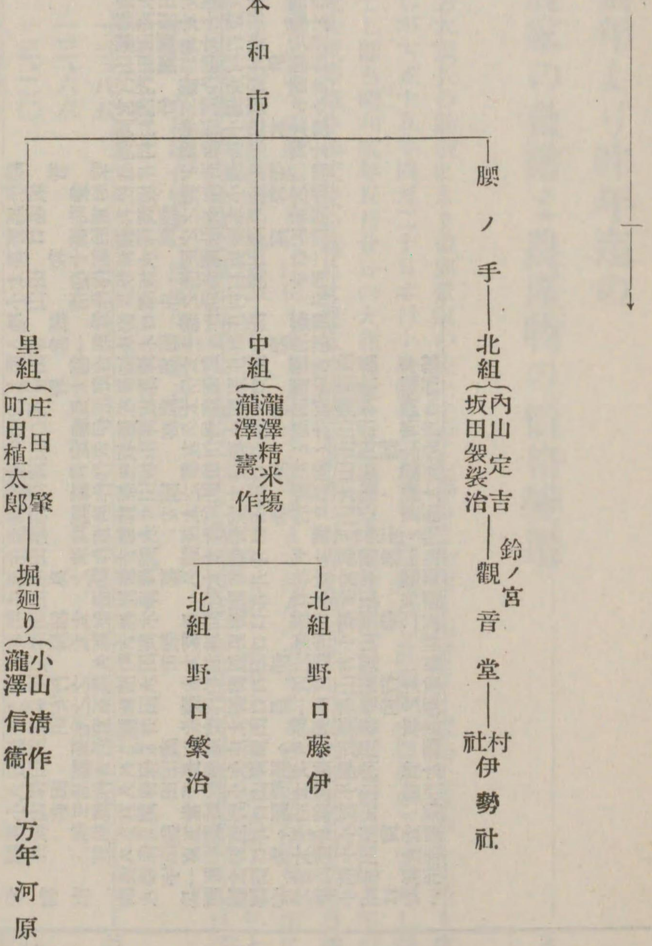


表　速　遲　勢　火

火元	午後	
松本和市	2時30分（緩火）	
觀音	3時	松馬野森太小地久飯久吉野内瀧瀧瀧馬庄馬庄町柳松柳久久坂坂久小松福坂場口田山藏善一稲太長藤定利藏國時清之槇房太太之之宅菊藤治三秋岩岡口山澤澤澤場田場田澤坂澤田保田保山坂井和一郎吉郎造伊吉作作治重作助藤郎郎久進藤高治吉作郎松莊堂治重治郎作堂郎吉郎造伊吉作作治重作助藤郎郎久進藤高治吉作郎松莊
		飯唐瀧塚山宮宮岡岡酒松吉瀧瀧瀧松瀧野唐瀧瀧松瀧坂松飯龜龜吉瀧瀧瀧吉町清飯福久久久久宮久久渡清田木澤田田内内村村井坂岡澤水坂澤口木澤澤坂澤田坂田井永岡澤澤木岡田水田井龜田田保保尾駒田保保宇竹田淺瀧瀧奥田奥福著國安嘉之太茂餌久雇翌太永鑛佐三長千常五喜一兵政友太喜三藤寅才鑛之民道之龜奥太信太久友肇之太茂餌久雇翌太永鑛佐三長千常五喜一兵吉瀧夫太郎作郎治浩治作郎治助作郎郎郎男伊雄助郎作太太郎助雄郎作市郎藏
3時30分		曾坂飯飯石村水馬小松酒小本瀧坂石村庄野福小福野太塚野福龍福野野飯野野太庄矢小野酒野太瀧田澤山口井口田澤田澤田原田田田藩出坂水山戸喜田黒田口田口井井口田口田口田口田井井口田田口田井井口田田口田澤給龍延今豐安之原伊樂吉本二之常四卓才藏治高と治鑛常太治助江郎男進鑛鑛文繁まち太郎三郎助治郎郎郎

昭和元年	同	一〇、〇〇	同	七、八三	同	八、二〇	
同 二年	同	七、四三	同	五、一二		五、六七	大霜害秋蠶不作
同 三年	同	六、四七	同	五、六二		六、六〇	秋蠶大凶作
同 四年	同	八、〇二	同	六、四二		七、〇九	

農作物の價格

	粳一俵ノ價格	大豆一石ノ價	大麥一駄ノ價	小麥一駄ノ價	米一石ノ平均價格	
大正十四年	九、五七円	二〇、七〇円	一四、〇〇円	二〇、七〇円	四一、九六円	國勢調査八三四五六、九二九人
昭和元年	八、三〇	一九、二〇	九、七〇	一九、二〇	三八、五〇	大正天皇崩御
二年	六、八〇	一七、二〇	一一、五〇	一七、二〇	三八、五八	稻熟病發生
三年	六、九一	一九、〇〇	一三、五〇	一九、〇〇	三〇、五〇	卽位大禮
四年	六、二六	一七、〇〇	一一、五〇	一六、八〇	二八、六五	秋冷不作

なほ肥料の價は左の如く大なる變動もなく所謂農家の負擔は多く生産物は低下しつゝある悲慘のものであります。

肥料の價格

	大豆粕一枚	豐年撒粕	硫安十貫目	種粕一	玉粕	鰮〆粕十貫目	燐酸肥料十貫目
大正十四年	三、〇五円	四、八〇円	六、六五円	二、〇五円		七、三五円	二、一〇円
昭和元年	二、六〇	四、二〇	五、五〇	一、七五		七、三五	二、〇〇
二年	二、一二	三、八〇	五、三〇	一、七五		五、七五	一、九〇
三年	二、一五	三、七〇	五、三〇	一、九五		五、五〇	一、九〇
四年	二、四三	三、三〇	四、三〇	一、七〇		五、〇〇	一、七〇

想ひ起せば、五歲前、冬去り春も方に酣なる大正十五年四月二十日、我が更級郡共和村小松原區は、突如として祝融の大禍に遭ひ、二十町餘に亘れる大部落も忽ちにして烏有に歸し全く燒野ヶ原と化したりしは寔に地方稀に見る一大慘事なりき。

余當時迄きを更級郡長に奉し、時偶々同郡稻里村鄕社氷飽斗賣神社の例祭なりしをもつて當日同神社に參向、祭式萬端を終へ、將に歸廳せんとする刹那、耳底を劈く警鐘乱打に愕然、出でゝ西方を望めば、折からの烈風に煽られて、紅蓮の炎の天に冲するあり、瞬時にして事態の容易ならざるを感知し、急遽歸路につきたりしに、狂へる魔風に火勢は愈々猛り既に數ヶ所より火焰の上るを見る、早速所員數名を現場に急派し、應急の所置並善後の策を講ぜしめ、廳にありては、町役場、警察署、隣接町村等の各位と協力之が救濟援助に努め、遂に徹宵、翌二十一日親しく罹災各戸を慰問しその慘狀を目睹して、災害の甚大なるに驚き、更に前夜來の豪雨はまた一層の罹災者各位の悲慘なるを痛感せしめられ同情の念禁ぜざるものありき、その慘狀、この悲慘、何時の日、何れの時にか復舊各その堵に安んじ得るならんと、しばし、瞑目暗然たりしは當時の余のいつはらざる心情なりき。

然るに其の後村當局並村民諸氏の不眠不休の活動及鋭意不斷の努力と罹災者一同の自憤自勵とは郡內外各位の溫情と相待ちて、その善後の處置宜しきを得、今や復興の機運著しきものあるは、誠に欣慶に堪へざる所なり。

這般、同區青年有志諸君相謀り、罹災記念帖を編纂すべく當時の文獻を蒐集して、その慘狀を錄記し、更に大方諸賢の厚き同情、村、學校の高配、村治の現況其の他をも揭記し以て永く後昆に垂れんとて、幾多の苦心を重ね勞資を費し今將さに上梓の運びに達せりと。

○

小林一重

余當時の關係者たる故を以て求めらるゝまゝに一文を草せば、一朝にして燒土と化せる慘禍の跡、髣髴として眼前にあり、轉々感慨無量なり望むらくは、この記念帖により、當時を偲ぶよすがとなし、以て往時を追想し更に緊張努力各其の道に善處するあらば轉禍移福の事期して待つべきものあらん乎。

小松原大火災の大悲慘

長野警察署長　岡田長左衛門

小松原大火災の大悲慘と題して感想の一端を述べて見たいと思ひます。

回顧すれば五年前小松原の大火災は地方に於ける古今未曾有の大悲慘事であつた私は其の當時篠の井警察署に奉職中であつた關係上殆ど終生忘るゝことの出來ない深い印象を殘して居るから火事と聞けば直ぐに小松原の大火を想像し暴風の時には四月二十日を思出し四月廿日と云へば小松原大火の惡日を聯想して止まない大正十五年四月二十日小松原大火災の當日時恰も私は管内大岡村笹久消防組の出初式兼巡檢の爲め早朝武田巡査部長と共に出發して麻績村を經て大岡村笹久分教場に到り午前十時より豫定の式次第順序に依り巡檢を濟ませ午後三時頃同地を出發して大岡村巡査部長派出所に到る途中に於て小松原大火災の急報に接しましたけれども其の詳細の狀況を知ることが出來ない只小松原大火災直ぐ歸れとの傳言であつたから直ぐ麻績驛へ引返して汽車便に據るのは早いか陸路を豫定通り急行することが早いかを考究したが汽車時間も都合が惡いし尙且巡査部長派出所へ行かねば詳細の實況を知ることが出來ない關係から派出所へ向ひ急行することに決心して行路を急ぎ午後七時頃同派出所へ駈付身仕度遠路步行の用意夕食を濟ませ同八時同地を出發したが生憎暴風雨の襲來暗夜泥濘の爲め步行も意の如くならない計りでなく淋雨烈しく全身恰も濡鼠の如く提灯の火を支持すること極めて困難を感じつゝ無暗に氣は焦せれども步行自由ならず大に馬力を掛けて自已を勵まし急行せんとするも捗々しく運ぶことが出來ない暗夜暴風雨を冒し惡路を拔涉しつゝ漸く同夜一時過ぎ信田村稍々中央部村役場所在地

部落の縣道に到着した其の時自動車の迎ひを受けて何共も言はれない有難味を感じ地獄で佛と云ふ形容詞も斯る場合ならんと感謝しつゝ直に自動車に乘り途中を急ぎ同夜二時漸く小松原近く駈付一巡するに節比連擔たる一大部落も今や何の見る影もなく一面に燒野と化し猛煙に鎖され火災直後暴風雨に見舞はれ恰も火攻め水攻めの悲劇慘劇を演じ殆ど目もあてられぬ實況であつた燒跡に佇み家を失ひ泣き叫び財寶を滅却して狂氣の姿怪我をして呻吟するもの燒死して冥土へ旅立つもの又幾多の大厦高樓も又所有文化施設も悉く烏有に期し只燒土あるのみ富者も一朝にして裸一貫の憂目を見るの悲傷慘澹たる光景である罹災者の心情察するに餘りあり轉々同情の念禁ずることが出來ない其の實況は到底言語筆紙に現はすことが出來ない嗚呼祝融の害や實に恐るべく人世の大敵である小松原の大部落を既に燒き盡したるも猛煙尙ほ止まず多數出場の消防組員は猛火と戰ひ殘火の始末に沒頭し極度の身心の疲勞をも顧みず勇氣を皷舞して殆ど晝夜兼行獻身的に活動して居る其の勤勞や實に多く其の功績や實に大なることは萬人の認むる所である尙ほ引續き同村の消防組は勿論隣町村の各消防組は數日に亘りて火災の後片付及罹災者保護救濟の爲め奉仕的活動を續行して居る本縣から罹災者救助の爲め出張して大に活躍せらる所屬篠の井警察署に在りても當分の間罹災者保護救濟の爲め多數の警察官を派遣して本縣より出張の係官及地方當局の方々と協力して救助に努め又長野市大新聞社に在りては何れも競ふて逸早く罹災者救助の爲め同情金を募集した各地の仁者より贈られし救恤品山を爲すのみならず同情金五万五千圓の多額に達した小松原火災の被害狀況を精査するに燒失戸數百五十四戸外に村社伊勢社燒失其の損害見積額は百五十万圓燒死者二名負傷者八十名消防組員の職務上の死亡一名同負傷者五十名と云ふ多數の犧牲者を出した。

大火災以降其の善後對策應急雜務に沒頭中最早日時は流水の如く止まることなく將に一ケ月に垂々とする日時を經過して漸く罹災者も其の緒に就きたる五月十八日を期し急々更級郡消防同盟會臨時評議員會を開催する運びとなつた臨時評議員會開催の事由及其の顚末偖て本日玆に更級郡消防同盟會臨時評議員會を開催するの止むなき運命に立至りたる事由は客月廿日郡内共和村字小松原に於ける古今未曾有の大火災勃發し居宅百四十九棟（戸數百五十四戸）建物總棟數四百九十九棟を烏有に期し其の損害見積額實に百五十萬圓の巨額に達したるのみならず燒死者二名負傷者八十名を出し空前絕後と稱すべき大悲慘事を惹起し消防組員にも職務上の死亡一名負傷者五十名を出すに至りましたことは眞に憂心焦慮に堪へない所である消防組員の職務上の死傷に關しては本同盟會に於て弔慰救濟扶助慰問等遺憾の無い樣にせねばな

らない責務を有して居るものであるが殆ど豫想することの出來ない大慘事に直面したる關係上從來の豫算の規約の範圍內に於ては本會の目的を果すことは不可能である非常時には非常時に相應すべく臨機應變の措置を取りて本會本來の目的に副ふ樣に努力せねばならぬ現在本會の規約の命ずる所に依れば殉職消防組員に對し弔祭金三拾圓贈呈したる事例あるも負傷者に對しては未だ何等手を染めざる實況である蓋し消防組員は自已の身命を犧牲にして義勇奉公の重任を帶び一朝不幸にして今度の如き職務の爲め死傷したる場合には之に對する相當の弔慰救濟扶助慰問等の途を講じ遺憾なきを期することは本會員の當然の義務責務であると同時に本會本來の目的使命であることは自明の理であるが故臨時評議員會を開き緊急事案を提出して考究審議を求めたるに規約より考察すれば異論多き問題なるにも不拘評議員各位には誠心誠意事に當り枝葉末節に捕はるゝことなく根本精神に立脚して專ら殉職公傷者に對する同情の美擧よりして一同何等異議を狹むものなく原案通り滿場一致の贊成を得て本會より殉職者に對し弔祭扶助料として金參百參拾五圓公傷組員に對し最高拾圓最底貳圓の範圍內に於て慰問金を贈呈することに決定して之を實行した。

尙ほ本縣聯合消防同盟會よりは殉職者に對し一層手厚き多額の弔祭扶助料を贈り公傷者に對しては其の程度に應じて夫々療治料を贈り又本縣警察部長より公傷者に對し慰問狀を交付し弔慰救濟扶助慰問の實を擧げ消防組員の士氣振興に努め又大火災當時出場せし數拾の消防組に對し表彰の手續を了して小松原大火災に於ける警察の取るべき善後措置も先以て玆に一段落を告げた嗚呼火災は人類の勁敵である社會文化の破壞であることを如實に之を物語るのである。

梅は寒苦を經て淸香を發し人は死地に入つて大功を立つとの言葉の如く小松原罹災者各位には隆々苦心努力奮鬪の結果五ヶ年前に於ける一部落の大破壞も今や建設復興せられ之を記念として永久に傳ふる爲記念史を發行されますことは世人をして禍を轉じて福を爲し人心の指導敎化の爲稗益する所極めて大いことと信じます嗚呼其の當時を追懷すれば感慨無量萬感交々禁ずること能はざるも本史發行者に敬意を表し擱筆致します。

大火災の際に於ける學校

當時共和小學校長　坂口俊雄

一、想へば四月二十日は、朝から薄曇りで、晝頃からは南風が强く、學校邊は、午後二時頃には、所謂氣違風となつて、突風が頻りに襲ひ、囂々と暴れ狂つて、砂塵を卷き樹木を鳴し校舍はミシ〳〵と軋り渡つて、實に物凄い有樣であつた。二時四十五分職員會の爲めに、一同相集つて、將に開會を告げようとした刹那、小松原が火事だと、叫ぶ聲が聞えた。素破大事だこの大風にと、一同耳を澄せば、警鐘が激しく聞ゆるので、直ぐに北校舍の二階に上つたが、火焰が少し見ゆるばかりで、火元も何も解らぬ、そこを下つて、光林寺の大門の北まで走ると、見ゆる〳〵、南端の火元の火勢は已に衰へたが、今しも、北側四軒の屋根へ移つて、眞紅の焰は烈風の爲めに屋根面を這ひ廻つて居つた。走り來つた者は、皆光景を見ては、口口に小松原全滅〳〵と叫びながら走つた。

職員は、この仕度では何も出來ぬと、學校へ取つて返へし、女先生は、御眞影の奉護と校舍の警備とにあたり、男の先生は、運動靴げーとる等で身を固め、直に現場に赴いた。到れば已に二十餘戶に飛火し、火焰は天を焦し天日は爲めに眞赤に輝いた、職員は思ひ〳〵に驅け廻つて、黑煙をくゞり熱風と戰ひ、家財の搬出や猛火の消防に、奮鬪二時間、鎭火と共に一同學校に引き上げたのは、五時頃であつた。（自分は四時少し過ぎ學校へ歸つた）

歸れば、役場には已に救護事務所が開かれ、學校には罹災者收容所の札が揭げられて居つた。

此時、岡田、段之原の婦人會員は、已に召集に應じて學校に集合し、學校の竈で炊き出しに當り、續いて、村內各戶より炊き來つた結びや見舞食品の受納と搬出とに當つて、大に救援に力めて居つた。そこで職員も其の中間に伍して、指揮協力夜の十時過ぎに及んだ。中には、天幕借り入れの爲めに、眞嶋、大塚、下氷鉋等の學校へ自動車を飛ばせ、夜を徹して奔走した職員もあつた。

二、學校の應急處置

明くれば二十一日、午前九時職員會を開いて、四日間臨時休業の件を決定、直に告示し、續いて職員見舞金の件、職員每戸見舞の件等、應急の處置について協議を行つた。

二十二日、罹災者外の兒童を召集し、大火災と兒童の覺悟について訓話し、且つ、學用品義損金等の醵出について話を行つた。

二十四日、職員一同で、罹災兒童の家庭を訪問し、且つ兒童に見舞金を贈つた。

二十六日、初めて授業を開始し一同を講堂に集めて、今後の心得、世の同情等について訓諭を行つた。

三、同情品の配給

同情品は山と積まれたが、その配給は、最も敏速に、極めて適正に行ひたいとは當局者の願ひであつた、しかし、かゝる際であるから、兎角混亂に陷り易いのは、彼の大震災の際の不成績に見ても明である。ところが、その配給手傳を學校に依賴するとの事であつたから、進んで其任にあたつた。其の方法については、十分に研究を凝し、出來得る限り組織的に計畫を立てた。先づ兒童は、尋六、高等の男子八十名とし、之れを數班に分け、職員を總指揮並に各班長に任じ、兒童には分擔の家を定め、每戸の燒跡に厚紙を以て番號を附し、配給品は、一切現狀に於て渡す事とし、二十二、三、八、五月三日の四回に亘り、遲きは午後九時半までも奔走し、遂に其の任を全ふし、殆んど遺憾なきを得た之れは局に當つた職員兒童の非常なる喜びであつた。この間女先生は、救護事務所に出張して、寄贈衣類の整理分配等に盡力した事が數回であつた。

四、災罹兒童に對する世の同情

罹災者に對する同情金品の、多大であつた事は今茲に、記すまでもない事であるが、小學校の罹災兒童に對する同情も亦甚大であつた。更級郡を筆頭に、全縣各郡に亘つて、小學校職員兒童、男女青少年團体、篤志家等より續々と同情品を贈られた、即ち學用品は數千點に達し、金圓も千圓に近く、何れも懇切なる慰藉の手紙を添えて寄せられたのであつた。（勿論此金は總て役場に納入し一般義捐金中に加へ必要なる額丈支出したのである）此の同情によつて、教科書は勿論、手帳、鉛筆、筆、繪の具等の學用品より、辨當箱、傘、洋服等に至るまで豊富に給與する事が出來て、兒童の

喜びは云ふまでもなく、我々教職にあつた者も無上の喜びを感じて、兒童と共に、厚き同情に深き感謝を捧げた次第であつた。

五、小學教育に對する影響

大火災の爲めに一瞬にして精神上に物質上に激甚なる打擊を蒙つた事であるから、教育上にも、種々なる惡影響を來しはせぬかと、憂慮したのであつたが。

第一には、父兄が悲歎失望の餘り意氣を阻喪し、延いては、兒童の潑溂たる元氣を失はん事であつた。第二には、物質上の多大なる損失の爲めに功利的に走つて、小供らしさを失はん事であつた。第三には、同情による金品の惠與に狎れて、報恩感謝の念の薄らぐ事であつた、斯くの如き事となつては、當面の教育上に大なる障碍となるのみでなく、人格上拭ふべからざる痛手であると思つた。學校に於ける對策としては、時々訓話を行ふと共に、職員協力、成るべく學校の生活を明るく愉快なるものにせんと力め、又一面運動を奬勵して元氣の鼓舞發揚に努めたのであつた。由來小松原は堅實にして剛健なる村風で、相當の彈力を持つて居つた上に、世の深い同情と激勵とがあつた爲めに、却つて非常なる緊張を示し着々復興を見るに至り、教育上にも特に惡影響を認むべきものは極めて少く、高等科への入學、上級學校への志望等も餘り減少を見なかつた。

第四には、村富の半を有する部落の燒失であつたから教育費の上に、大なる影響がありはせぬかと恐れたが、しかし教育の重大にして一日も緩ふすべからざる事を、よく理解されて居つた爲めに、豫算の上に於ては、五百圓の減額を見たのみで、それも翌年度には舊に復する事が出來、修學旅行の如きも、伊勢京阪の旅行を妙義方面に變更したが、之れも亦翌年からは復活する事が出來た。

只茲に困難を感じたのは、バラック生活なれば全家族が混頓として一室にあり、坐するに席なく、寄るに机なく、電燈は不足し爲めに家庭に於ける、豫習復習等は全く意の如くならなかつた事であつた。そこで上級に於ては放課後教場に於て、復習せしむる等の、臨機の處置を取つたところもあつた。

要するに、教育上に對しては多少の影響はあつたが、曩に學校で考へた憂慮は殆ど杞憂に近かつたわけで學校當局としては大に喜ばしく感じた次第である。

火難

當時共和小學校訓導　曾根川千治郎

(1)、嗚呼四月二十日

其の日は氣狂風の荒ぶる日だつた。小松原の南端から發した火は、炎々二時間にして百五十四戸の大部落を煙と化した。あゝ呪はれたる日よ。永久に忘れることの出來ない恨事よ。

(2)、花の村は忽ち火の海と化した

信濃の山奥にも春は訪れて、櫻はほゝ笑み桃杏は今を盛りと其色香を競ひ、百鳥は美聲をはり上げて、世の歡樂を歌つている。世は泰平に惠まれ人は豊作に富んで安茂里の觀音樣や虫歌の觀世音に花を訪ねて、一は日頃の勞を慰し一は今年も幸あれかしと心をこめて祈つていた。

何處の村も〳〵杏花に煙つて宛ら夢の國のやうで長塚山麓の細長い小松原も杏の花霞は横にたなびいて丁度パラダイスのやうだ。學校でもこの好機を逸せず、春の樂しい遠足をやらうと午后二時を期して職員會を開いて、「尋常科一學年は何處へ行くんですか」と、今や相談を始めた時だ！何處からともなく兒童の聲！火事だ！各職員は心配のあまり職員室から飛び出して見れば、北の方小松原なりと云ふ。直に北校舍の窓から見れば！こはそもいかに赤いものすごい焔の舌はぺろり〳〵と黑煙りと共にほとばしつているではないか。

私は思つた「あゝいやな日に火事を出したもんだ大事にならなければよいがなあ」と。

然しぐづ〳〵している場合ではない。直に校長先生の命令で男教員は火事場の救助女の先生は校舍の保護の任務についた。

自轉車で驅けてまがり松のところに出て見ればあゝ！何たる有樣だ！前の二軒が燃えてる半ばに北の方の五六軒へ飛

火して屋根のぐしの下には恐ろしい焔がぱつぱつとひらめいているではないか。自轉車を畑中に乘りすてゝ各職員は救助にかゝつた。

狂風に乘せられたぐれんの焔は、次から次、端から端、隅から隅と、餘すなく殘すなく、僅々二時間と云ふに、さしもの大部落をも遂に烏有に歸した。

あゝ何たる鬼神の惡戯か！　何たる惡魔の怒にふれたか！何すれぞこの小松原をかくは無慘にも悲慘の極に陷し入れたるか！あゝ夢のやうなパラダイスの花の村は一瞬にして火の海と化してしまつた。

(3)、慘憺たる狀況

北の方の家の人々は火事の聲に驚いて、南の方の火元の家へ消火に出た。其後に自分の家へ火がうつた爲め何一つ出すことが出來ないで皆なもやしてしまつた。先祖の殘して呉れた寶も親に買ふてもらつた家財も亦自分の膏血を搾つて求めた道具も全く灰としてしまつた。

罹災民は其灰を眺めて唯忙然と立つてゐるのみだ。食ふに米なく着るに衣服なし寢るに家なく唯途方に暮れているばかりだ。

其内に日はとつぷりくれた。見あぐる大家も只餘燼となつて眞紅に燃え殘りの火がものすごく光るのみである。あちらにもこちらにも小供の泣き叫びがいたましく聞へる。罹災民は仕方なく其夜は親戚知己をたより其餘は小學校の裁縫室や講堂に收容した。

(4)、庄田清作さんの燒死

清作さんは家の中に仕事をしてゐた。何だか火事らしいので飛び出して來て見れば前の家はもはや火の垣で、東へ逃げて見れば又大の垣だ、北へ逃れても火の垣で、辛じて西に血路を開いて二十間ばかりとんで來て見れば、このたつた一つの逃れ口も最早や火の垣だ、進退谷まつた時は大蛇の舌の時き焔になめられて遂倒れた。

無慘にも天はこの罪なき人の命を奪い去つてしまつた。後で見れば焔で燒けたゞれた黑こげの死体がつめたく殘つてゐた。

あゝ何たる悲慘事だらう。

(5)、淺太夫さんの家の籾

餘燼は其夜一晩中かゝつても消えない翌日も一日中煙つていた。罹災民は各々自分の家のあとらしい所に行つて灰の堆積した中を棒を持つてそれでも何か殘つてはいないかと探している。其顏は力なく唯氣のぬけた土け色をしていた。

淺太夫さんは村でも素封家で數多の小作人から納まつた年貢籾を、未だに賣らないで積んで置いたのだ。其家の燒跡からは二日三日も煙が立ち上つていた。それは何百俵かの籾の俵ばかりが燃えて籾が山のやうにうづ高く積み重つて燒けているのだ。聞けば淺太夫さんはせつなくて仕事も手につかなかつたとの事だ。

(6)、世　の　同

當日の消火の爲め遠くは八幡坂城長野須坂方面の消防の集り來つたは、さることながら罹災民の哀れな狀況を目擊したり、又傳へられて其同情品の惠與は引きも切らなかつた。

焚き出しをして當夜の食事にと、にぎり飯を荷車に山積し來るのも、亦夜中と言はず晝といはずリーヤカー、荷車、自轉車等にて米、ふとん、衣物、材木、食器、炊事器具等、いやしくも日用生活の必要品すべてを毎日〳〵遠近の町村の個人、又は團体等から運ぶこと〳〵二週間余りに及んだ。學校の方へも書籍、手帳、鉛筆、かばん、帽子等生徒の一切入用品をもらつた。

この世間の同情によつて極度に悲觀した罹災民の當座の生活を支ふる事が出來た。又之によつて勢を恢復して力を得た。

あゝ有難いかな世の同情、この災禍の永久に忘れる事の出來ないと共に、世の同情も夢寐にも忘れる事の出來ない事だ。

(7)、同情品の配給

役場は臨時事務所を燒け殘りの野口高之助さんの家に置いて山と來る同情者を受けた。燒けない方の名譽職員は全部出動して其物品を順序正しく、且つ公平に分けた。學校の生徒は先生の指揮のもとにこの品物を各戸の配給に盡力した。

其奉仕たるや眞劍で誠意で献身的で同情的で、何と形容してよいか其詞に苦しむ。引きも切らない同情品は山と積んで一週間は休む暇もなく配給した。あとの一週間は午后丈配給につとめた。

(8)、眞嶋婦人會員の奉仕

ねいさんかぶりの赤い襷の眞嶋婦人會員は勞力奉仕に來て呉れた。かい〴〵しく一日働いてかへつた。其他各村消防手は勿論何々村青年會何々村何々團体又農學校の生徒も勞働奉仕に來て呉れた。之等も奇特の至りとして印象の際い事だ。

(9)、馬場林治さんの大喝一聲

丁度同情品の配給につとめている頃篠ノ井町に愛國婦人會の總會があつた。其序に知事夫人は其和村の幹事を見舞ふべく自動車で來た。豫め其通知があつたので村會議員の馬場林治さんと青年會長の藤川隆算さんは案内役を仰せつかつて老体を革鞋に乘せて、はしよりをし杖をもつて今や遲しと村の入口火元の家近かくに待つてゐた。やがて走り來つた自動車は、この重任を帶びて小半日も待たせられた案内役に一べつを與へたのみで黑燒ケ原へ景氣よく失せた。

虫の納らないのは案内役だ「この未曾有の大災厄に遇ひ、罹災民は極度の悲觀に陷つて見るも無慘な燒野ケ原に、何等の同情を拂はず然かも其中を自動車で乘りたる儘走るとは、何事だ非常識も甚しい今日は一体何に來たのだあれは幹事の家へ來たのか」と憤慨して事務所へ來れば、今しも知事夫人は事務所の役人に挨拶せんとしてゐるではないか。

あゝこの時かんしやく玉の破裂した馬場林治さんは大喝一聲！「こゝは幹事の宅ではありません如何なる高貴の夫人かは知らねどこのあはれな燒野が原を自動車で乘り廻すやうな非常識なものには用事はない」と困つたのは、同乘の案内役小林郡長と光林寺の西澤夫人だつた。

まあ〳〵で其場はすんで後は恙なく案内も終つた。後日時の村長大澤さんは縣廳へ知事公の御機嫌奉伺に行つたとか云ふ話だ。

(10)、火　元　の　陳　謝

火元は松本和市さんとて材木屋だ、聞けば上水内でも火元をして本村に引越して來たのだ、と云ふ話だが再度の火元で百五十何戸と云ふ人々に大損害を與へ剩つさへ世間へ多大の厄界をかけた事とて恐縮は一通でない。何と申譯してよいやら更にわからなくて、思案の末目分の餘財全部を罹災民に提供して村の寺院の住職を依頼して一軒〳〵に陳謝して歩いた。其時の顏や態度のあはれさは何と記述してよいか屠所の羊もかくやと思はれた。

全く村民から言へばくびつて叩いてもあき足りない位だ、然し又火元になつた者とて態々火を出したものでもなく全くの子供の過ちだ。風さへなければ自分の家一軒ですんだものを風の爲めこんなに多くの家を燒いてしまつた。罪は一体何れにあるのだ只神様のみが知つてるばかりだ。

(11)、何ぞ夫れ復興心の旺盛なる

災禍のどん底に落ちた罹災民は一時非常に悲觀のあまり、呆然自失何も手につかなかつたが、一日たち二日を過ごす内に心の奥の大勇猛心は奮然と湧いた、何だこれしきの事に氣を挫いてたまるものか、數年にして又もとの通りに復活して見せる」との聲はちまたに滿ちて其元氣はものすごかつた。

それにしても目前にせまる春蠶を飼はねばならぬ、と或はバラックに或は本建にと企圖してのみの音勇ましくかんなの音急がしく復興のオーゲストラは奏された。僅々一ケ月に大多數の家では養蠶の出來るやうになつた。天はこの大勇猛心に組してかこの小松原のみは春蠶も秋蠶も上當りだつた。

かくて一二年の間に以前にも勝る立派な家は建てられ平和な樂しい花の村はよみがへつた。

(12)、自然か人力か

あゝ自然の風は遂に百五十何戸を灰燼に歸した。其昔ベスビアスの火山はポンペイ市街を數十尺の地下に埋沒した、と傳へ岩倉山は滔々たる激流を二十一日間止めたといふ。

あゝこの自然力は偉大なものである然も頭底人力の及ばないところだらうか。宇宙の廣大に比べての人間の寡小、自然の前の人間あゝ大海の一粟よりも小なる人は結局自然力によつて征服せらるゝであらう！否々人間の歷史は遂に自然を征服することを吾等に物語つてゐる。

見よ人間は思ひもよらぬ大洋の上には船を浮べて走つているではないか、大なる山を穿つてトンネルを作りては汽車を通し、大地を堀りては地下鐵を走らし空中には飛行機飛行船がとんでいる。あゝ人間の靈は地をくゞり水をくゞり空中をくゞりて遂に大自然を征服せんとしているではないか。

人々よ一度の災難に驚くな二度の災禍におじけるな三度の災變に氣を挫くな本体を有する人間は遂に地上に天國を造り。空中に樂園を開くに至る。往けよ人々、勉めよ同胞、神は遂に我等の内にありて我等を助ける。

御神体搬出の眞相

昭和小學校　若林武男

憶へば四年の昔となりました、あの凄慘な阿修羅場が眼に浮く時、何時も戰慄を覺えないでは居られません。私達の生涯に空前であり、絶後であらう處の阿鼻叫喚といふか、形容の出來ない悲慘な有様が色々の會合の時や、兒童に接する場合の話の材料に何十回となく出されたものです、之はあの日のあの光景を目擊した人達の誰しもが同じだつたと思ひます。

此頃吉岡氏が來られて「今度火災の記念史が出來るから何か感想を投書して呉れ」との申込み、色々雜務に追はれてゐますので、どうかと思ひましたが、感じを多く持つた私としては矢張り應諾する事になりました。

最初私はあの時の感想を簡單に書くだけに止める考へでしたが、感じ全部を表現するには、あの大火が私の眼に映じた最初の瞬間からの事を、つまり私の行動を叙述する事が最もよい法と思ひまして大膽に筆をとることに致しました。然し年月が過ぎましたので記憶も不安です、又稍々遠方に住む私、色々な點に於て正鵠を失して居る事もあらうと思ひます。以上をお含み下さつて「違つてゐる所がある」と輕くお見流しを願ひます。

大正十五年四月二十日でした。當日は朝から強い風でした、然し午後程の事はありませんでした、それは當日篠の井町の春祭で私は朝青年會員として國旗を揭揚したので記憶して居ります。正午頃からは猛烈な風で「こんな時は誰もかも火に注意しなくてはいけない」などゝ生徒に話したのでした。丁度五時間の授業が終つて職員室に來ますと、今、校門迄歸りかけた兒童が駈込んで來て「先生、小松原が火事です」と知らせました。私達は急いで門迄出て見ました。然し家のかげで煙だけしか見えません、早速本校舍の二階へ上りました。あゝ之が此地方未曾有の小松原大火の目にはいつた最初でした。

火はほんとうに恐しい程の紅さと、猛烈な風に薙倒されて何物をも甜め盡さん物凄さです、しかも稍々離れた北のも う一軒の家が矢張り同じ狀態で燒けてゐるのです。「之は困つた事をしたなー」と刹那の或豫感。之がよもや不幸適中してあの大慘事にならうとは……私はあの瞬間の印象はあの刹那眼にうつつた火の色と形は終生消し去ることは出來ないでせう。折々見た事のある江戸の大火などの繪にある通りのものでしたから。私は飛ぶやうにして職員室に戻り、同僚の瀧澤君（昭和學校の現在の主席訓導）に話しました。「兎に角、今歸りかけてゐる兒童が駈けて行くに違ひないから、とても危險だし、消防の邪魔にもなる、直ぐ出かけよう」と二人は相談して自轉車を乘出しました。途中駈けて行く兒童に大聲で注意したり、小さい兒童には行く事を止めたりして三ツ澤に出ました。消防隊は非常な勢で駈けて行きます、半鐘もいよ〳〵耳に入ります。火は家のかげで見えませんが煙が段々擴がつて行くやうです。憎い風は愈々猛威を逞しうして居ます。二人は相談しました「之から向ふは現場に近くなるし、兒童の注意上も、又色々の都合上、更に人々の邪魔にもなるし」と、そこの嶋田氏宅に自轉車を置いて貰つて走り出しました。田圃から今里の村の中を夢中で駈けました。最後の家のかげから小松原全体を目にする田圃に出た時は實に驚きました。南の端の燒けて居た最初の共恐しい火が、今はあの南北に長い小松原の殆んど八分位を包んで居るではありませんか。此時の強い刺戟も私は後に折々物語つたものでした。それは大風の時の火の速い事と、乾いてゐる時には何町も離れてゐる家にも所謂飛火といふ危險のあること、それからピチ〳〵ゴウ〳〵と音を立てゝ這つてゐる火の眞に形容の出來ない物凄さとです。二人は「あゝあー之は〳〵」を口にして、しばし佇ずみました。猛烈な息切れを感じました。惻隱の情と天の惡戯を憎む心で胸が一杯になりました「何とかならないものかなー」と切齒しました。そして「どうしよう、何所へ行かう」と興奮した聲を放ちました。餘程あわてゝ居ます、聲が震へて居たやうに覺えてゐます。

一分二分稍々冷靜になりかけました。見ると二人とも帽子もかぶらず、ずんべらぼうの詰襟洋服です。

兎に角今火の移つたばかりの近所へ行く事にして走りました。そこに共和學校の三四年位、のカバンを掛けた三人の兒童が火の方を向いて泣いて居ました。ほんとうに悲しい聲でした、そして恐しさも加つたもののやうでもありました。私は直ぐ共和小學校を想ひました、兒童は皆どうしたでせう、授業が終へて樂しい家に歸る時刻です、慈愛に溢れた父母の膝に懷かれに嘻々として戯れながら歩を運ぶ頃です。今此兒童は全く突然な、しかも初めての大事件の爲めに

懷しい樂みがすつかり裏切られ破壞されてしまづたのです、そして自分が元氣よく「行つて參じす」と言つて出かけた朝のあの家が今眼の前で燒けてゐるんです、眞赤に音を立てゝ燃えて居るんです、「お父さんはどうされたか、お母さんはどこへ行かれたか」早く安否を知りたい所のこみ上げて來る可憐な情と、紅蓮の恐しさと、今夜からどうなるのだといふ危惧の念とで一杯なのでせう。私は自分の教へてゐる兒童から自分の家の子供へと非常な勢で想ひが動きました。「君達の家はどの邊だい、氣の毒だな、あぶないから火の方へ行くなよ」と、慰める言葉もなく、わけのわからない變な事を言つて復走りつゞけました。私達の初めて火のそばに着いたのは天照寺の通りに當るあたりだつたと思ひます、もう餘程北に寄つて居ました。それから暫くの事は記憶が薄くなりました。唯、方々の消防隊が勇敢に働いて居たこと、あれよ〳〵と罹災の人達が家具類を持つて右往左往して居たこと、私達も夢中でそこらの家の何かを纏つた考もなく運んだり、愚にもつかぬ事を言つて、かういふ時に多くの人が持つえらさうな心持になつて妙な命令じみた世話をやいたりした事を覺えて居ます。阿修羅界といふ梵語の現實を眼にしたのです。二人は火に追はれて北に進みました、そしてお宮の森の眼に入る所に出ました、いつも遠足の時、兒童を休ませて貰ふあの鬱蒼たる松林ですが今は何の感じも湧きません。見るとお宮の眞東に當る田圃の一軒は全く火らしいものが見えません。それは瓦屋根の建物でした離れても居るし、多分大丈夫だらうと思ひましたが、何だか人々が物を運んで居る樣子、「おいあそこを手傳はう」と、畑を横通しに駈けつけました、此所でも夢中で疊其他建具を出しました。あとで色々話の時に出た事ですが、人間の力といふものは妙なもので、さあ此時といふ時は實に案外な力の出るものです、平時は力仕事に意氣地ない私達にも平氣で、かなり重い物まで運ぶ事が出來ました。さて此所は大丈夫と思つた時に、見ると座敷の長押の所に皇太子殿下の御寫眞が揭げてあるのが殘つて居ました。外へ投出すのは恐多いし、家の中におけば燒けてしまふ惧れがある、困つた揚句、其家の主人らしい人に「私達がお預りしませう」私達は――學校の教員です、後でお渡し致します」と言つて「それでは之も一所にお願ひします」と渡された大神宮樣の軸物（と覺えてゐます）との二品を手にして外に出ました。（後に聞きますと此家は染物屋さんで、幸に助かつたといふことでした。）二人はそれから稍々東南の方へ出ました、そしてほつと一息つきました。見れば猛火は愈々氣味の惡い音を立てゝ燃え進み、今やお宮の大松林に火がついた所でした。「あゝ困る、お宮が燃えてしまふ」とは近所に居た人達の一齊に洩らした聲でした。私達は更に緊張しました。丁度そこの三十間の北

に川中嶋驛からの廣い路があつて、かなり遠い所からの消防隊がワッショイ〳〵とやつて來ました。「頼むからお宮の方へ向つて吳れや」と大聲に叫びました。消防隊は西に進みました。然しもうあんなに大木が燃えてゐるんだから駄目だらうと輕く觀念をして見ました。「何とかならないかな、少くも御神体だけでも」と更に强い心も起して見ましたが、どうともすることが出來ません。と其時でした、私達の居る西の方へ逞しい二人の人が、すばらしく大きなものを苦勞さうに擔いで來ました。そこには大きな堰が東へ流れてゐます、橋は二尺位の幅です。私達は思はずそこへ行きました。其人達は「おぶつなさんです、手を貸して下さい」と言ひます。どうでせう今の今まで心配して居た御神体ですよ直ぐ樣手を出して橋を渡りました。其人達は一人は若い警官で（今も其警官の顏を覺えてゐるやうに思はれます）帽子の皮紐を頤にかけた甲斐々々しい裝束、一人は三十恰好の潑溂たる若者でした。（此人は小市邊の人とか聞きました）私達はほんとうに安心しました、そして此二人の人達に感謝せざるを得ませんでした。此人達は實にえらいと思ひました、猛火の中を進んで御神体をお助けした勇氣、之こそほんとうの勇者といふのでせう、そして其溫い動機を嬉しく感じました。二人は「私共は此所に何時迄も居られないから適當な所へお移し申して下さい」と言ひます、私達二人は「大丈夫引受けませう」と强く言ひました、二人の人達は安心して向ふへ駈けて行きました。さて引取りましたが、御神体が御輿もてらなんです、先程の二人が重さうに見えたのは無理もありません、全く持餘しました、兎に角先の御寫眞と軸物とを御輿の中に入れて擔出しました、そして三十間程東に進みました。そこへは燃灰もとんで來ませんし、とても重いので一先づ下さうと勿体ない話ですが御輿を桑の間に置きました。忽ち多勢の人がそこへ走り寄つて吾も〳〵と御神体を拜しました、何しろ御神体を直接に拜する有りがたさに皆眞劍に合掌しました。私も神社の御神体を拜見したのは初めてです、此御身体が木製で二尺に近い黑いお姿であつた事を覺えてゐます。

暫く休んで居ますと此安全地帶も不安になつて來ました、それは直ぐ北方大道の北側の家が燒け始めたのです。人々は唯騷ぐのみです、私達は「之はいけない、此所も危い、どうしよう」と迷ひました。然し幸に、實に幸に、此時私の頭にピーンと鋭い勢で出て來たのは一田圃向ふ四ツ屋の池田氏の家でした。池田氏は私の親類先きで私も前に行つたことのある家です、此所ならば大丈夫だ、あそこへ安置しようと考付たのです。相談一決して愈々出かけようとしましたが、とても吾々二人ではあそこ迄は行かれさうもありません、そこで近所に居た十六七の若い人二人を頼んで四人で擔

ぎ出しました、それでも中々重くて困りました、しかも路のない所を行くのです、桑畑をよぢけ〳〵無茶苦茶に進みました。漸く庭にはいつて大聲で叫びますとすぐ大太郎氏（と覺えてゐます）が出て來ました。同氏は今火事場から何かの用で歸られた所らしかつたのでした。事情を話すと同氏は飛立つ程の驚きと喜びを現して私達を座敷へ招じ入れました、そして「此大事件の最中ありがたいおぶつなさんを私の家へお移し下さるとは實に有り難い事です」と言ふやうな意味を述べられ尙色々と私達を慰めて下さいました。然し私達は何時迄もかうしては居られません、火事場の色々な音が、聲が、悲しみを加へて聞えて來ます、「暫くの間お願ひします」と堅く依頼して同氏宅を辭し、二人の若者と別れて急いで西の田圃に出ました。遠方から見ると先程の小松原とは、もう全く面目が變つて居ります、燒始めの南の方は大体に於て煙です、北の方は、今盛に燃えて居ます、其間に類燒を免れた家や土藏が危ふく煙に捲かれ火に圍まれて立つて居ます。何といふ天の惡戯でせう、四時間前には、かうした悲慘があらうとは誰が豫知し得られましたらう、私達はそれを語り、無量の感慨に打たれながら火事場に急ぎました。風は多少凪いで居ました、日はもうはいつた頃です。お宮の近くに來て見ますと、大きな松は、燃えて倒れたのに、未だ上の方が燃えて居るのにあります。之から暗くなる迄何かと應援しようではないか、そして二人は別々の行動をとる事にしようとそこで瀧澤君と別れました。私は知人の行衞を探さうと思つて先づ庄田茂雄氏の避難所を見つけて歩きますと直き向ふに見當りました、そこで少し何かお手傳ひしました、がその頃ボツ〳〵雨が降つて來たやうに記憶して居ります、火事は之で終息するやうに見えましたが、こゝへ大雨でも來たらそれこそ困つたものだと心配したのですが、幸に大事もなかつたやうに覺えて居ます。庄田氏の家族の人達が蒼白なお顏で燒殘りの品物を始末して居られるのを見た時は、斷腸の思ひに堪えられませんでした。お暇を告げて福井邦友氏宅の避難所に來ました、大体に於て整理がついてゐるやうに見受けましたので直ちに南に向ひ大田嘉內氏宅の避難所を發見し、慰問の辭に苦しみぬいて、いよ〳〵歸路につきました。家人も心配してゐませうし、此の大事の善後處置（私としての）について歸る必要を急に感じたからです。三ツ澤に入る前に、最後として小松原全區を振返つて見ました、もう薄暗くなつて居る中に、區全体から煙が立ち、あちらこちらで未だ紅い焰を立てて居ます、消防隊の人々の疲れ切つた聲らしいのが微かに聞えました。「アアア——えらい事をしてしまつたものだ」と最後の愚痴を洩らして

暫く佇ずみました。何だか別れ難いものと別れるやうな心殘りがしたのを今更思ひ出します。思切つて三ッ澤に入り自轉車を受取つて急いで家に歸りました。町でも宅でも大騷ぎをして居ました。家人と色々話し、相談をして床に入りましたが、今日の初めからの事が浮んで來ますし、小松原區の記憶に在る前の家並や知人に就ての聯想が當分眠られんませんでした。

以上は當日の私の覺えを極大略書いたのであります、之以上あの日の事を筆にする事は止めます。唯あの大事に就て言はざるを得ない程強く感じた事がありますので序でに一口述べたいと思ひます。

兎に角此地方稀有の大火災でありましたので世の同情は翕然として起り、又我も人も暫くの間は小松原の大火で色々の方面から持切りの狀態でありました。隨つて耳にし目にした種々の社會相は數ふる遑のない程澤山ありましたが、私は世の中の美しい人情味を最も嬉しく尊く思ひました。新聞紙は聲を大にして縣下の同情に訴へ、郡內は勿論縣下各市町村、中小學校、青年團、婦人會其他各種團体が、物質的に精神的に競つて救護事業に向ひました。私は二十二日と思ひましたが、青年會員として灰片附けに出かけました。罹災者の慘憺たる有樣が、實に見るに忍びざるものであつた事は勿論でしたが消防隊、青年團等各方面からの人達が獻身的に活動して居る樣子を見た時は、賴母しさ、嬉しさに、こみ上げて來る涙を止める事が出來ませんでした。三四日後、見舞がてら復出かけました、此時は小學校の高等科男生が甲斐々々しい仕度で物品の配附をして居ました、先生方の共の時の溫顏も忘れません、又長野市在住のノルマンといふ外人が自動車に物品を滿載して運んで來たのに會ひました。此の何れもが何といふ、人の情の美しい現れでせう。

火災當夜、塩崎村の消防隊の一人が汽車に觸れてなくなられたと聞きました、此人も同情心、犧牲的精神の逝しりからかうなつた事と思ひます、實にお氣の毒であり、一面立派なそして有りがたい精神の持主で、私達が最も感謝すべき尊き犧牲者であると思ひました。

次に物質の損害の莫大なるに反して人命死傷のなかつたことが實に不幸中の幸で、あれが若し夜の出來事であつたらと身の毛のよだつを覺えたのでした。其他此恐るべき火に就ての注意（殊に子供の弄火）、私達は平常大事に遭遇しても狼狽せぬやう訓練しておく必要のある事、家の構造等々教へられたる數々があるのでありますが之で筆を擱きます。

あゝ速くも四年の星霜を經ました。一歩足を小松原に入れて全區民の不屈の精神、不撓の精神の努力を以て復興した

現在の同區を見るもの誰か當時を追想して隔世の感を懷かないで居られませう。

大火災回顧

篠ノ井青年會長　大日方祐三郎

晝夜の働きに、消防手はすつかり疲勞した、明日は青年會の番であると言ふ通知を受けたのは二十一日午後八時であつた。

翌朝鍬、筿等を携帶して百九十名程集つた。

段之原附近は自働車やら見舞人やらで通行が出來兼ぬる樣であつた、村南の坂上より見れば社の森迄何物も殘さない。梅と言はず杏と言はず只燒土の中に眞黑となつて點々として立つて居る。淺太夫氏や文聽氏の附近から濛々として立上る煤煙は一面を覆つて今も尙慘鼻の極みである、噫郡內美望の美村は魔風一陣一瞬の間に全く燒土と化了したのである。

假事務所を尋ねて仕事の指揮を受けた。一隊は別れて山手に行き、一隊は村中程に働いた。搔き入るゝもの運ぶもの丁度戰場の樣である。思へば此片付くる一塊半灰皆一昨日迄は貴き財寶であつたのだ、慘亦慘、到底筆絕の盡す限りではない、終つて一巡すれば神木は中段から燒け落ちて時々紅焰を上げ、庫の跡には尙米穀が燃へて居る、食ふに食なく寢るに家なき子等は目ばかりの樣な顏をして立つて居る。憐なる少年よ此の復興は一朝一夕ではない、然し總ては奮勵努力にある君等は此の慘狀を體驗して眞に精神を練つて努力せらるゝ時、卽ち君等は壯年時代こそ眞の復興も出來やうと瞑目祈りを捧げて歸路についた。

火災追憶の二三

渡邊　眞

感謝の第一歩

さしもの大火災も、遠く三里、五里と駈け付けて消防に盡力されし、消防組員青年團員有志者の努力と、燃ゆるものは燃えつくしての跡の火の鎭まると共に、夜の殊夏に濃き暗の帳りに包まれし頃、第一に來るものは疲勞と空腹なり、忙然惡夢にうなされし如き罹災者も、獅子奮迅の勇を以て働ける應援者消防組員も漸く人間の本能に責めらるゝ時、迅速にも配付されし握り飯は、二三の近親者よりと、共に篠ノ井二葉組合及び段之原組有志よりの、寄贈のもの、

これ現場にて聞きし感謝の第一聲

感謝すべき篤志者

村役場の日誌を見るに、二十三日頃より救恤品の配給に着手せる如くなるも、二十一日、二十二日に寄贈されたる物品にして、直接罹災者の受領せるもの、有志の救護班にて受領して配付せるもの、また少しとせず、而して此際の寄贈品こそ、罹災者に取りて嬉しく有難きものはなかりしと喜ばれぬるに、反つて事務所の帳簿に記入洩れのあり勝なるは、寄贈者に對して申譯なきこと共ならんか

救恤事務に直面せる人々も亦、この二三日中は記錄に洩れたるも多々あらん。

消火の爲めに

今年度の消防協會の表彰者たる、共和消防組岡田部の小笠原信廣氏の如きは、消火に盡力し引續き燒跡片付に努めし處、火災の際の燒灰の眼を侵したることの、治療其効なくして、竟に一眼を失ひたる事や、塩崎消防組員を滿載せる自動車の篠ノ井踏切に於て、運惡しく汽車に衝突して多數の死傷者を出せる、悲慘事何ぞ多しと云はざるべけんや、加ふるに川中嶋消防組員の、燒跡片付の際火藥の爲め負傷せる如き、數ふれば骨肉もたゞならざる慈愛の發露にして、感謝の念ひたすら胸に逼るを覺ゆるのみなり。

救恤美談

さなきだに春風砂塵を捲いて、天爲めに暗きを覺ゆる頃なるに、火災後の僅かの風にも灰神樂を見る時とて、罹災者は文字通りの逢頭垢面、老えたるは勿論、花恥しき乙女心にも如何ともし難き此際に、隣村中津村北原の理髮師、三宅輝氏は、小松原區民に余り御得意を持たぬにもかかはらず、同職を一人伴ひて來村され、理髮に顏剃りに、一日を勤められて、爲めにバリカンは用をなさぬ迄の努力は、有難き話ならずや。

亦同村南原の青年有志が風呂桶數本を、車に積んで薪持參で、心付もやさしく鹽湯の接待につとめられ漸く人心地つきし事風呂上りの味ひ、これも忘れぬ思ひ出の感謝の一つ。

眞嶋婦人會の諸姉が何か御手傳ひと來られて、女心の密なる處にて、衣類の配給の方に加はれ、綻びを縫ひ又は適當なる配分に盡されしことや。

村內野口榮雄氏が麥柄茸の住家を持ちて、四圍皆な燒失の憂目を見る中に、何等の幸ひか、獨り燒失を免れたる恩報じに、土藏に在りたる籾の半額五十俵を、卽時村に提供して罹災者に配分を乞ひ、其半額にて分家と共に食料となせる如き、これ皆、平素豫期せざる良心の、非常時に於ける顯れに外ならずや。

玆に大災害を見て、玆にまた世道人心の美しき發露を見たり、又更に努力復興の小松原區民を見る、悲しみは悲しみとして、一面心の裡を喜びを憶ふ。

○

野本貞男

刊行會の或る親友が自分に小松原大火五周年の感想をかけと云はれるが私は心中大に躊躇した例の筆分精思ふやうに書けないからである。然し親友の希望なので朧げな記憶を辿りつゝ筆を叮することゝする。

時は大正十二年四月廿日、午前は靜かな天氣であつたが正午頃から激しい南風が吹き出し午後二時頃からは最も猛烈な勢となつた、私共は炬燵でこんな時に火事でもあれば大變なことになるなどと話し合つて居た、折も折り一と吹き煽る突風に未だ曾て倒れたことのない表障子二本は次の間まで吹きとばされた。

不得止南側の雨戸を締め元通りに障子を立てたが以て如何に激風であつたか想像し得らるゝ。夫れから自分は火元の用心を命じ所用の爲め驛附近迄來ると西南方に當り警鐘が聞えた、私は此瞬間これは普通の火事では濟むまいと考へた、折柄丁度上野發一番が到着して下車の最中であつたから時間は確かに二時十分頃に相違ない。行人に尋ると今里の神社附近とのことであつたので見舞に

行くべく一と先づ歸宅し直ちに再び出かけた、村の西端まで行くと小松原であることが判つた。

私の村の喞叩が道路側に捨てゝあつて消防手丈け行つたらしい、此風では一臺たりとも多數の消防具の必要を直感したのみで丁度駈けつけて來られた上氷鉋梅之湯主人に依頼して引き出した、すると小市の塚田と云ふトラックが疾走して來たので夫れに牽引を依頼した。

快諾したので私等二人はトラックに乘り喞叩を押へて梶をとりつゝ進んだがスピートを出すので喞叩は一尺以上も跳ね上り顚覆せんとするので幾度か膽を冷した。

私は四ッ屋の西に到つて初めて延燒しつゝある大火を見た。

其恐ろしくとも凄ましとも形容の出來ぬ天魔の如き祝融氏の赤き舌は山ノ手は野口文廳氏裏神社迄平地は堀廻り附近迄各戸の屋根を嘗め烟は疾く低く激流の如く狂奔し火勢は海嘯のやうな有樣に何物をも烏有に皈せしめねば止まぬと云ふ勢を以て延燒して居た。

私は鳥居迄喞叩をもつて行つたが既に消火の時期で無いことを覺り一品たりとも多く財產を持ち出すが良策と考へたので喞叩を安全な位置まで送り玄岡君の內へ駈けつけた。其時はまだ同君の邸宅は延燒の厄は免れて居たが隣家の福井氏瀧澤氏の主屋の棟附近へ僅かに火がついた處であつた、家內へとび込むと數人の人が盛に戸障子疊等を東側の田へ運搬中で私も茶簞笥一個を負ひ出したが可成りの重量であつたやうに思ふ、東裏十數間の畑中へ持ち出すとそこには同君の母上が僅かばかりの家財を護つて居られた、強い風に老いの鬢髮を靡びかせて猛烈な火勢と軈て免れんとするも得ずして天命を待つが如き吾家を見守つて居られた、自分は此時咄嗟に思出したるは同君の老父と親戚の步行不自由なる伯父の身の上であつた、親戚は既に猛火の中にありて家財は到抵救ふべからざるを覺つたが故に火の未だ及ばざる家屋の家財搬出を決心したのであつたが吉岡君の父上の安全なるを知るや直ちに親類の屋敷附近に駈けつけた、見ると災前は可成り頑丈なる建築とも思はれた本屋は既に棟落ち蠶室土藏よりは窓瓦の間等の凡る隙のある場所からは盛に眞紅の火焰を吹き出して居たが間もなく大音響と共に棟は落ちた、想へば吾れ幼少の頃には伯父叔母には小供なく屢長く滯在して寵を蒙り小供心に殆んど吾家の如くに考へ皈る心を忘れた追憶多き家屋も斯くして灰燼に歸したのである、私は呆然として大息せざるを得なかつた。

幸にして老人は必死の努力で裏迄這ひ出すと幸にして日新小學校の生徒の脊により無事に避難するを得たが其生徒は卽ち我同族野本瀧治氏の息であつたと云ふ事は偶

然の暗合とは云ひ乍ら不思議な奇遇と因緣に今でも啻ならぬ感を起さしめるのである。

其後の經過につきては寔に云ふに忍びない、財政の裕福と建築の美を以て近村に美稱せられたる小松原も日浚を待たずして信仰の中心たる村社と共に灰燼に致し巨万の富を亡失せると共に調和最も宜ろしきを得たる區民の胸底に重大なる傷疾を與へたのである。

大震火災に對する帝都復興は滿七ケ年の星霜を閲みして陽春三月完成を告げ聖上陛下の臨幸を仰ぎて盛なる復興祭を擧げらるゝ由に拜承するのであるが同じ機會にお互ひに感想を述ぶると云ふ事は頗る深い意義を感ずる。

若し夫れ區域及損害の計算に於ては比較にならぬ程の大差はあらうけれども各個人に對する損害の程度については決して彼等に劣らぬのである、而かも其半ばの時間に於て完成したるは如何に罹災者各位の奮發心の盛なると努力の旺盛なると實力の强きかを證明するものであつて只管感佩し敬意を表するものである。

私は此大災に於て斯くの如く巨万の富を亡失せるを深く惜むものであるが更に生き乍ら火中に現實の犧牲となり長恨を殘して昇天した人々に對し無量の同情を捧げざるを得ぬ。

之れが夜中なりせば力よはき老幼婦女の身体生命に關する被害は更に如何はかりなりしぞ思ひ及べば脊水戰慄を禁じ得ぬのである、擱筆するに及んで小松原區の隆昌と罹災者各位の精康多祥を神かけて禱るものである。

五年一月七日稿

不圖した粗忽が大火の因で
昨日に變る燒野原

小松原大火災救護班の思ひ出

篠ノ井町產科婦人科
內科小兒科醫院　瀧澤朝治郎

時は大正十五年四月二十日春風しきりに黃塵を吹ひて市人の來往一時杜絕せん許りなりし午後二時長野最上醫院の醫務室に某患者の手術に從事せんとする刹那ヂャン〳〵〳〵――――警鐘の亂打蹴たたまし。

すは火事？市中か市外かあらず遙か彼方安茂里村小市の方山麓に黃烟横はる。或は鄉地小松原にはあらぬかと案じつつ患者の治療に餘念なかりしが長野消防のガスリンポンプ飛び出し警察電話は俄然小松原の大火を報ず。すは鄉地の火事！治療終るや取るものも取り敢へず急遽鄉地目げけて駈け付けたり。天の惡戲風伯益々盛に荒れ

狂えば山嶽南北に長蛇せる郷地小松原は南風に南端に發火し見る〳〵〳〵うちに北に飛んで二時間百五十の人家をなめつくして正に火の海なり。

家や如何に醫療器や如何に藥品や何處勿論卒業當初一寸備へ付けたる五百有餘圓の自己の小財産は本宅の灰滅と共に烏有に歸して。

チエ……悶々悵恨の情禁すべからざるものありしと雖も覆水盆にかへらざるを思ふてやみき。

先年京濱地大震火災當時恰かも京にありて母校は灰燼に歸したりしが職掌がら救護事務に狂奔せるを聯想し寧ろ自己の天職を發揮し幾分たりとも罹災者のため郷土の爲めに貢献せんものとここに救護班の出張を要望せり。如才なき長野赤十字病院よりは忽ち是を急派せり小醫又此班に和して徹宵傷病者の手當診療に從事せしが此大火の晝間なりし爲餘り多數の傷病者を出さず死者僅かに二名位なりしは幸なりし從つて救護班は翌二十一日引上げたり但し餘後の傷病者餘後發生狀態斯る場合又忽諸に付すべからざるものあるを以つて予は其後事を擔任し爾來一週間郷家に止まり是が慰撫診療に任じ大くもあらぬ貯金を利して以つて警察用サイドカー付オートバイに繃帶用綿布醫療藥品を山積し來り火災區域を歴訪し傷病人の方はおありになりませんか。傷病人の方はおありになりませんか。お藥はいくらでもおあげします。傷の部はいくらでも手當してあげます。お家の御燒失は本當に本當に殘念なことでおありでせうけれども身体さへ達者であればいくらでも燒失後のお家の復興は出來ます。先づ身体の健康恢復を專一にそして其上一層の元氣を得て復興に御盡し下さいと慰撫以つて救護につとめたり。其就任中大病にして死亡せる方に松坂某の妻君あり誠に同情にたへず。

徑來りて既に五星霜家成り産業復し民心又元の如くなるものありと見られると雖も果して其眞の復興なれる哉。思ふに茲に至れば當時の大小松原彷彿として眼前に咫尺し悄然慓然憤然轉々感慨無量なり。

因に自分は其後幾分たりとも郷土の復興に資すべく最上醫院を辭して川中嶋に醫院を開業し更に轉じて今や篠の井旭町にあり。郷土罹災者各位に對する念慮今猶舊の如し。

當時更級郡醫師會は決議して火災後滿一ヶ年間半減診療を發表せるは自分も諸君と共に記して以つて同會に謝意を表する者なり。

（川　柳）　火を見たら火事と西行うまく言ひ

（二六詩）　火事はお江戸の華とはむかし　今は出さぬが村の華

小松原大火災に就ての回顧

當時農會産業技手　大澤安通

顧るだに身の戰慄を感ずる彼の小松原區の大火？　時は大正も終りの拾五年四月二十日の午後二時過ぎでした。殊に其の日は古今稀れに見る暴風の有りました何んたる不幸の魔の日でありましたろう。其の日私しは岡田山新田の農家組合で自家用醬油共同製麹の日割で朝早くより出張する筈でありましたが、先に初生雛の購入を本村内農家組合に希望者を募り斡旋致す樣手續して置きました處購入方を申込で置きました名古屋の成田養雞場より折惡く初生雛を突然當日早朝送付して來ましたので急遽其れを申込者に通達し午前中に分配致したのでありましたが後に成つて顧れば罹災者の方に差上たものは全部燒死せしめたり其の他災害の無い方面に差上た雛も隨分注意を致しました樣ですが保護の行屆かなかつた爲めですか殆ど死んでしまつたりして不成績に終つたのでありましたが實に感慨無量なるものでありました。

其れから雛を分配した後直ちに山新田に行き醬油麹の入室を致して居りましたが其際突如耳を擘く如き劇しき警鐘乱打に素破村内の火災なりと知り早速製麹上種々の注意を致しまして急をもつて現場に駈けつけましたのですが魔風暴風の煽り立てに小松原は殆ど一面火の海と化し如何とも成す事能はず。僅か數軒の家財を搬出して居りましたのみにて瞬く間に大部分が灰燼と歸しました。故。悲憤の恨を呑んで善後策を取る可く役場に引上幹部委員の方々と協力し焚出、運搬、配給等の手配を致しまして夕方より農家組合長の方々並びに其他委員の方と共に罹災者方の居所調べ或は握飯の分配等に努めたのでありましたが。殊に握飯分配や其の他に就て同夜夕方より更級農學校職員を初め生徒諸君の熱情有る活動は涙ぐましきまでの應援でありました。

翌二十一日は早朝役場内に農會は役員並に農家組合長會を開き災害善後策に就て協議を遂げ。第一燒失家屋の跡片附に全力を拂ひ後ち罹災者救護の方法並に此れが實施上幾多の犧牲的努力の願ふ事等を御依頼し尙其の救助方法の具体案に資する爲め罹災者各位當面の農蠶業に對する被害調査等を協議御依頼して會を閉じ直ちに午前十時より郡農會の技術員會に出席致しまして大火の實況を報告し罹災者農家の大部分が差し當り稻の種子及農具の全部を燒失して困憊致して居る故同情の上寄贈ありたき

旨を具陳致しました處直ちに其席上にて各町村農會より剩餘分の稻種子貳拾五俵に鍬鎌等の寄贈報告を受けましたので厚く禮を述べまして退席し蠶業取締支所並更級郡是蠶種會社等に赴き燒失せる春蠶種の補給方法及飼育方法の研究並蠶具の準備等に付き種々打合を成し一層の援助を依賴し尙郡是蠶種會社よりは春蠶種の補給及保護催青。稚蠶の飼育等無償提供の多大なる援助を得て歸り種々災害者の方々と打合を成し農家組合長方の應援を得て燒跡の整理、救護、農蠶業の計劃準備等に努めましたが、亦一且罹災家の宅地を見渡せば果樹のごときも全く燒失して、更に無きを思ひ長野市長ケ原種苗店に行き。杏。桃。櫻。柿苗等を合せて五百本以上に野澤菜種子壹千の寄贈を得て歸り罹災者の方々に早速分與致しました。尙亦先に郡農會の援助に依りまして寄贈を得ました稻種子も貳拾五俵では不足致しましたので猶埴科郡西條村河崎基次氏の同情に浴して不足せる種子の補給援助を得可く寺澤農會長の命を得て出張し糯の種子及關取種子等合て參俵を持參して分配を致しましたのでありました。亦種々の被害調査を致しまして幾多農蠶具の購入斡旋を計劃し極力廉價に得られまする樣東奔西走して產業組合と連絡を取り多量の斡旋を致しました等隨分記憶に深刻なるものがありますが其の間村農會に奉職して居ります微弱な一員として取りました私の記憶の二三を。此の永代の恨事を記念とする本火災史を刊行せらるゝに當り貴重な紙面の御割愛を得まして此處に書述致しまする事の心理無量を禁ぜざるものがあります。

異境の地で火災の報に接して

朝鮮咸鏡北道茂山郡茂山邑
日支國境茂山守備隊　福　井　吟　治

茂山郡茂山邑は人口內地人百八十三名鮮人千九百八十五人支那人十九名を以て成る郡內キッテの發展地である。

守備隊、憲兵分隊、郡役所、郵便局、警察署の所在地大正十四年兵として國境守備隊に選拔せられ同年十二月十四日名譽ある茂山守備隊に入營す三寒四溫の大陸氣候地として寒氣夥しく極寒零下參拾七八度夏は水湧く百有餘度山間避地として交通の便惡く古茂山驛より茂山守備隊まで約十六里行軍誤樂機關更に無し。

茂山守備隊は戰時編成の一ヶ中隊將校以下約百八十名を以て編成す。

國境の警備、守備區域內の警備、人命財產の保護、交

通機關の保護、地理情況の調査等を以て任務とす朝な夕なに支那間嶋の山をながめ國境第一線に立ち警備に任ずる我が兵士一度事ある場合は生命を投出して國の爲に任務を遂行する勇しさよ。

飲む酒に心許すな川一ッ
離つる山は外國の山

馬賊及不逞鮮人等至る所に出沒すかゝる不穩な地域も嚴寒地に於て我々初年兵は互に第一期の敎育も終つて愈々明日四月二十九日こそ待ちに待つたる第一期の檢閱を執行せられる我々初年兵にとつては最も有意義な一日なのであるその前日とて檢閱の豫行被服の手入及檢査檢閱に使用する物品の使役などで食事も喰うや食はずの大多忙を極た小生使役終つて班に歸つた時は點呼準備も全くなり各々點呼の位置に着て居たやがて點呼ラッパが鳴る班長の號令で人員の檢査週番士官の立合で事故報告點呼終つて班長より明日の檢閱に關し種々の注意及學科があり間も無く消燈ラッパが鳴る同時に武裝した不寢番兵舍直接の警戒並に火災盜難を豫防し兼て衞生に注意するを以て任務とするが二名服務するそこで我々初年兵は二年兵の許可を得てベットに着く。

初年兵にとつては寢る程樂しみは無いのである綿の樣に疲れた身體平常日ならベットに着くが早いか前後不覺に眠るのであるが流石に明日の檢閱に關し細部に亘る神經の働き過去を追憶し將來を聯想する時血湧き肉躍る勇壯の氣が全身に漲るやがて一時間も過たりと見え不寢番の交代の聲が聞えて來るおやもう十時かと一人さゝやき寢に入り前後不覺に眠つてしまつたうと〳〵とした頃であつた誰やら私の姓名を呼んで居る者がある。

綿の樣に疲れた全身を横に長らえ唯今眠込だばかりの私は意識あらう筈は無のであるが無意識乍ら夢か現で聞て居たのである、誰であらうそれは不寢番であつた私の枕邊に來て、不寢番「福井……福井……福井」と三度呼起された。福井「ハイ」と返事をするが早いか直立不動の姿勢を取つた。

不寢番「故郷に何か事變があつた樣だ此のはがきを見よ」とはがきを手渡して行過ぎたそこで感謝の意を表して早速と文面を見た。

四月二十日小松原大火災のため家全燒すどおか援助をたのむと言う報であつた。

あの懷しの故郷、愛する故郷異國の地にある我れ一日一時として忘れたことの無い故郷が灰燼と化し燒野の原と化した……なんと云ふ無念悲慘な便りであろう餘りにも突飛な出來事なので不知不識ず心臟は高鳴る一時は唯ボオゼンとせざるを得なかつた早速と軍衣袴を着し下

士室に班長を訪れたそして出來事を報告して、はがきを班長に渡した一通り讀終つて椅子に腰を掛け、班長「そおか明日特務曹長殿が御出掛に成つたら班長から申出る心配するな餘り心配をして健康を害し明日晴の檢閲を受けられぬ樣では困るから必ず心配せずに今夜は休む樣に」

と注意を受け班に歸つてベットに着たが異狀に神經が興奮してどおしても眠られない在し日の故鄕を追懷して感慨無量だ衣食住から追放せられし避難民ましてや老人小供等は現在如何に定めし泣き狂はんばかりであらう。

私も內地の聯隊に勤務して居たなれば早速く請願休暇を戴て駈付け村のため避難民のために大に働いたのであるが何が扨て幾百里と海山離つる北鮮の地如何とも仕樣が無く只だ徒らに悶えるのみであつた。

入營以來四ケ月間の郵便貯金拾日々々に支給せられる薄給の內から僅かばかりの貯金ではあつたが積り〳〵て拾參圓五拾錢程蓄へて居た早速一通の書面を認め內金拾圓を故鄕の父親に送り若干なり共悲痛な心持ちを慰めるべく起床ラッパが鳴ると直に下士室を訪れ手紙に貯金通帳を添え班長に願出たので班長も心良く承知して送金の手續を取つて呉れた第一期の檢閲も無事に終つた。

並に在營二ケ年間國境守備の重任を大過なく終つて昭和貳年拾壹月無事歸鄕した。

現社會が望む青年は學歷にあらず風彩にあらず不屈不撓の精神の所有者だ飽くまで精神誠意勇往邁進家業に勉勵しより以上に美くしき故鄕を建設せん事を誓ふ。

（完）

（一九三〇・二・一九）

鄕里兄上樣（山田行太郎）

朝鮮咸鏡北道淸津府廳內　山田朝之進

謹啓

空前の大慘事御見舞申上候

段之原の兄樣よりの御知らせにて小松原全村の火災　吾が生家も類燒と有り　實に驚き唯々あきれ果て言語も出ず心配いたし文面の末尾に御家族全部無事渡邊樣方へ御避難とあり稍々安心仕り候

御老休の父上樣始め兄姉樣には又新築家屋事業の爲め一方ならぬ御苦勞いやしくも一家の新築は共人一生の一大事業考いて見れば　御貴家は先代の新築にかゝり兄上樣の代に至り漸くに經濟狀態も順調と相成り資產の增富これからと　私等も心密かに喜び居り候處今回の火災の類燒にて又兄上樣一代の苦勞實に御推察申上候就ては小生も御承知の通り裸一貫にて旅立ち來りて一家を作り居り貯蓄等無之身には候へ共小生の心の底より御兄上樣の災難を見て小生のあらん限りの御見舞金額は少額にて恥しき事には候が何卒御受取下され度尙拾圓は先日宮本義廣君の皈省見舞の際申送り候通り小生の勸めて居る役所の友人有志が御見舞下され小生は實に有難感泣致し候何卒御手數では候へ共一々手紙か又はハガキにて御禮狀御差出し下され度く御多忙中禮狀など〳〵申上兼ね候へ共他人有志の御厚志なれば段之原の兄さんにても賴んで書いて貰つて被下度小生も旅にこそ居れ國を思はぬ日とて一日もなく故鄕の有樣は目の前に散ら附きつ有之候生れて二十有余年生活した家がなくなつたとは實に殘念に御座候願くは御身大切にいたされ前に倍す立派な家の新築致されたく願上候

先日宮本義廣君が皈國の際は丁度會計檢査の爲め縣廳より檢査員來られて檢査を受けつゝありし爲め御手紙も差上げる事出來ず失禮致候尙義廣君には軍隊に皈る時は小生方へ立寄りユックリして下さる樣にと兄上樣から義廣君によろしく云ふて被下度候

先は御見舞まで　早々

斷片二三四

藤川隆算

今般小松原火災誌刊行會に依つて火災誌が上梓され、アノ本村未曾有の悲慘事が永久に語り傳へらるゝことは誠に嘉行の至りと存じます。私にも何か記せとの仰せなので片々たるものを……

◎私の宅には四人の記念兒が居ます、長男は私共一家が共和村へ轉住いたした記念、次男は關東大震災の記念三男は小松原大火災の記念、四番は女で御大典記念であります、次男と三男の年を數へるとアノ戰慄すべき慘事が追懷されるのです、殊に當面した小松原火災は永遠に忘却することの出來ない大事件であります。

◎丁度學校では、春季遠足につき職員會を開いてゐる最中でした、俄然、警鐘亂打するので東階上の窓から見れば光林寺大門の松並木の間から紅蓮の焰猛々、吃驚一言葉も出ません、坂口校長神速敏活「スハ一大事、會議を中止します、諸氏これより兒童の保護及び消防に盡力せられたし。」

◎此の年、千代色かへぬ小松原の南にあつた壽樹一本松

が枯死したので、有志の方が其の跡に青松を植えられたばかりに此大火でした。

◎學校の兒童で幼學年は午前授業で歸宅しましたが後學年は歸途に辿りつゝあるもの學校に居るもの「火事だ小松原だ」で飛出して一本松まで來たことは來たが、目前に惡魔の舌の如く煽煽たる火炎が村中をなめ廻るを見ては進むことも退くことも出來ず。唯小さき胸を落膽と憂愁と悲哀に埋められ悵然として涕泣嗚咽するのみでした。

◎此の日の狂風と云つたら、路邊の礫は塵の如く吹き散らされ、屋根の瓦は木葉のやうに逐拂はるゝ南風「ソレ火事だ南だ」と飛出して後を顧れば吾家の火事。點々として僅か二時ならずして小松原一圓の大火となり。犀の大河原を越して小市山に延燒したとは。丹波嶋橋を渡る人々噎びて苦しめるとか。庄田氏の古き書翰强風に煽られて柏原に至るとか。滲天凄地の景象實に人をして悚然たらしめました。

◎小出貞幸氏が川柳學校から、かけつけられた時は一面の火で街道から西へは寄付くこと出來ない有樣でしたが氏の云はれるには「家内が病氣でゐるので」と聞えて烟霧の中を押して近よれば住宅は猛火に包まれて救助の術がありませんでした。幸哉後でお聞きすれば火事と聞き寢着のまゝ病床から裏山へ避難されたとの事でした。

◎青年會副會長であられた、野口文廳氏は偶病を湘南の地に養はれて不在であられたからお案じて鳥居の所まで行つて見たばかりでどうすることも出來ません。裏手の欅の老木は焰々として炎えてゐるのを見ては他鄕に病める氏の胸中を思ひ悲痛の情に堪へませんでした。

◎當時青年會の理事であられた小山利君を東田圃の麥田で、お見舞すれば家具二三點出されあるのみ、兄消防姿で擧止端正「南へ飛んで防いでゐる間に自分の家が此の始末、それでも家人が無事でしたから幸です」

◎黑烟天に漲り寸間塵灰に掩はれ、定かに分かねば集いる人々天照寺へ燒移つたなどと云はるゝを案じつゝ麥田の中に避難せらるゝ吉岡雅契を訪いば「ヤア有難たう、物質の燒失は仕方ありません、家人に異狀ないので殊に病氣の父が無事で幸です、之れが晝間の火事でしたから」。全く契の言葉の如く此の火事が夜だつたら數多い尊き人命を。

◎急遽二十日夜役員會を開いて應急方法を決議いたしました。

(1)罹災者へ會員據出の太繩全部(八十七束)を提供すること。

(2)手拭百七十筋を提供すること。

(3)當分の間本會としては毎日午前七時より辨當持參各種の方面へ村當事者の指揮の下に活動すること。

(4)各員犧牲的に東馳西奔して復興に努力斡旋すること。

(5)本會基本金募集の件中止。

(6)會報發刊の件中止。　以上

◎二十一日、二十二、二十三、二十四、二十五日、五月十日青年會として出動各般に活動いたしました。會員にして分會又は消防に在籍者は各其所屬團体員として努力せられました。

本會として

出動會員。丸山松英、宮下茂、村澤幸貞、小林壽雄、岡澤熊雄、小笠原正廣、嶋田胸太、石井朝吉、久保田英通、柳澤泰作、岡澤響太郎、朝日安治、山口享、山口徹男、小田切鏶、山口勇、平林勝男、小林新次郎、德永幸治、寺澤久彌、竪谷春之進、瀧澤一郎、丸山安男、嶋田安得、關安衞、大澤幸二、山口義男、內山猪太郎、瀧澤喜代忠、小河原茂平、瀧澤周一郎、町田袈裟雄、北澤茂助、丸野一雄、吉岡菊榮、小笠原信廣、增田一郎、小林優、丸山長治、柳澤正治、嶋田三郎、唐木田辰之助、村澤淺男、平林勇、宮下長雄、山口庄太郎、山口巴、下平榮一、久保田袈裟太郎、小林要人、盧ノ入由雄、西澤義勝、久保田袈裟師、岡澤竹雄、小河原延衞、久保田九一郎、越川福衞、岡澤實治、若林孫治、岡澤友喜、淸水長之助、平林信衞、小林基樹、嶋田準一、平林利治、平林進、平林帝、小林貞、兩角一榮、北澤直衞、山口茂喜　以上

◎學校職員及び罹災以外の兒童全部は毎日配給方に出動いたしました。私は青年會長として假事務所の方にと村長校長のお話で毎日詰めて各方面からの同情ある御見舞をお受けいたしました。惻隱の芳志感激胸にせまるのみでした。衆生の恩を痛感いたしました。

◎憐れな家畜、鐵蹄音高く砂塵を蹴立て進む駿馬も、世のうきふしもつゆ知らずともなげに眠れる子羊も、朝日かゞやく軒ばにねぶるむく犬も、鼠捕へて功名顏に戲ける小猫も、曉を告ぐる鷄も此の焦熱地獄に廻り逢いての四苦八苦到る所に目擊して目も當てられない慘狀、物言はねば一層憫憐の情、泣かせられました。

◎梅谷知事夫人偶愛國婦人會更級郡總會に臨席の序に、共和村火災地慰問の報に接し村當局より罹災地實地案內役として、村會議員馬場林治殿と青年會の私に午後正一時には一本松御通りなれば待受けるやう申傳へら

れたので、衷心縣母の慈愛に感激しつゝ希くは禮を失ふことなく芳恩に報ぜんと、午餉そこそこに一本松にお迎申して居りましたが、一時過ぎ三時過ぎ待てど暮せどお出がない、其間無爲にして而も責任を感じ放佚を許さゞる身、假事務所へ歸ることも役場へ行くこともならず。自動車の爆音を耳にして威儀を正して路傍に屹立すること十數回、時間は既に四時二十分。御氣の毒なのは馬場林治氏で病後尙ほ健康勝れざる容子なれど火急事に逢ひ威氣軒昂。事に當らんと努力さるゝことであつた。

余り遲れたので或は御都合上お取止めかも知れない、それでは役場まで樣子を伺ひに行くことにしやうと途中も仲々の緊張振りで役場に來て見れば、今か今かと御待受ける次第だから諸君も今暫くとの事で急いで本城一本松へ引返し鶴首待受けること半時、漸く御乘りの自動車をお迎へすることが出來ました。

然るに自動車は二人の儼然とお迎へする前を傍目もふらず過ぎんとしますから、お呼び申してお迎への理由を申上げたのです。すると「本日は時間がないからこれから婦人會の幹事の宅のみ訪問する」との仰せ「それでは此場所は展望がきゝますから暫くこれにお下り願つて、罹災地の樣子を御覽下さるやうに」と申上げたら「其時間もなし」「然らば御車を御除行下され、少しく御說明申上げつゝ參ります」と云ふに運轉手の仕藝か或は上意か二人を此邪魔物奴がと云ふ態度で走り出したので二人は呆然として異心を感じた。悲愴の感にも打たれた。（後扁は略す）

吾人は權貴に請托せんと欲して、其の閨門に媚びるに非ず親しく災地に慰問せらるゝ尊き芳恩に報ぜんとする赤一念存するのみ。虛禮！皮相の觀察お役目！萬感交々至り後を綴るに忍びず

◎獻身の心、たゞそれのみが

家庭を救ひ、村を救ひ、國家を救ひ而して人類を永遠に救うであらう。

思出の記

埴科郡寺尾村　宮林忠二

忘れはしない、時は大正十五年の四月二十日の正后二時過ぎ、大なる出來事！それは共和村小松原の、村落として前代未聞の、大火災の出現であつた。

一朝にして巨万の富を失ふと云ふ言葉はあるが、共和村の大火災は、一瞬にして數十萬の財貨を烏有に歸して

仕舞つたのである。思へば一少年が、燐寸一本の遊びからあれ程の大事に至らしめた事を世間の、父、兄、母姉は忘れてはならないのである。

私は其の當時、牧小消防組に加盟したばかりであつたが、消防であると云ふ觀念は、毫も忘れて居はしなかつた。と云ふのは丁度丹波嶋の兄の宅へ、祝儀よばれに行つて居たが、『火事だッ』と云ふ聲を聞くや否や、大火災の現場へ走せに走せたからだ。

今にして思ひ出しても、あの日の、大火災は何時何十分に始まつたか知らないが、其の火廻りの早かつた事は實に矢を射る樣と云ふか、想像以上だつた。私は特に玆で山鯨の走る早さであつたと形容して置かう。

私は貰つた妻の親分であり仲人である、丹波嶋の義兄の家へ招かれて行つて、晝の御馳走を頂いて、偖茶を一杯と、汲んで貰つた茶を持ち上げた時だつた。

「火事だッ」と

云ふ聲が連續的に外で叫喚した。私は呑まふとした茶を抛つやうに下に置いて外へ出て見た。その時其處へ集つた人達や走せ乍らの人人達は

「今里だッ行け！」と云ふ騷ぎであつた。

消防に努める爲めに、私があの丹波嶋の橋の袂から、寺尾村の釜屋まで歸つて、消防夫としての仕度を整へた事なんぞの覺えもなく、自轉車で走つた。走つた無我夢中で西へ西へと走つた。そして中氷飽を通り越すと、先刻誰かの叫んだ「今里だッ」と云ふ事は裏切られて、共和村の小松原である事が判然となつた、と同時に困つたと、直感した、それは私の祖母も、又母も兩人とも小松原から嫁して來られた關係上、自然と同村には、七軒八軒もの親戚があつたからだ。

加ふに火風が非ず、大暴風の叫喚は殆んど絕え間なく煽つて居た、一里余もあると思はれる村の家をなめて行く火焰は間斷なく煽られ續けて行く、物凄さまじい有樣は、唯人人の心に驚怖の心を惹起させるだけだつた。

去る年の關東の大震は、新聞や活動寫眞で見たけれど事實の前に、此の一村を包んだ火焰の方がより以上に私を驚かした。

四月二十日の杏の花の眞盛りと云ふに、共和村小松原は火焰の巷に化して、風の叫喚の度に、火の龍卷が至る處に捲き上つて居るのであつた。

何處の家にしろ一家として惜しまざるはないけれど、中でも氏神の御社の建物だけは、實に惜しみても余り有るものがあつた、あの幹長の赤松の森林さへ半ば以上も火の海の怒濤を浴びて居るではないか。

共和村小松原の、南組が燒けた、中組も北組も燒て仕

舞つた。私は鎭火に近い、日の暮れ方の氏神樣の、芝生に疲れ切つた腰を据えて「嗚呼」太い嘆息をしたものだ。

私は其の夜の遲く迄に、三度も握り飯を運び歩いた、二里半の道程だ、そして思つた、人間の最後の哀れは、食ふに食の無い苦しさであると。哀れ共和の小松原百四十有余の家族達は實に一夜乞食と同然になつたのである。或る者は、よし籬も屋根にし、障子を塀にして其の夜を明し或る者は土塀へ障子の屋根を張り、近くの親戚へ泣き乍ら行く人達、或る者は勇敢に、拋り出してあつた、家具を集めたりして居た、私がいくら夜を徹して歩いても黑い闇張の中に、天をまで燒した大火災の跡の火は一握りもなくとは消え盡さなかつた。鎭守の御神木と謳はれた大杉の穴洞の中の火、偖は豪農家の籾や白米の燒ける匂ひ、太い丸太木が折重なつて、耿々と燃ゆる有樣、近在のポンプが殘つて水を吐く音、何一つとして眼に觸るゝものの痛ましからざるは無い、形狀なのであつた。

あの烈風に世に云ふ惡火かは知らないが一番運の惡い南端からの出火とは――――然し眞ッ晝間の御陰に人畜の生命に余り異常のなかつた事だけを神に感謝して然るべしである。

× × ×

私は其の翌日の朝、一夜の恐ろしい夢の燒け跡を一巡した。

川中島村

石井清三

私の附近の村落として小松原や小市は近村幾十里に稀れに見る富裕の村落であつた爲め火災の創痍も極めて甚大であつたるにも不拘其復活も早かつたと思ふ、今にして其當時を追想するのは或る意味に於て其慘禍をマザマザと見る樣な心持ちにもなり又復活の小松原自身をして更に小松原の隣接地をして火災の損害を痛切に切實に思量せしめる一端となつて欲しいと思ふ。

時は四月二十日午後私共の住ふ川中嶋驛附近は勿論川中嶋平野一圓は凄間敷しい狂風に襲はれて道ばたの小石さへ飛ぶと云ふ恐ろしさをした時に火事でもあつたならと心中ひそかに恐れて居た、四月二十日は川中嶋平の多くの村々は春祭りの當日で私の鄕里丹波嶋も其當日であつた爲め、私を除く外家族一同は招かれて行つた留守であつた、突如近所の警鐘は鳴る、西の方にウズ卷く煙りそ

して煙りの低く早く北へ走る早やさ、續いて各部落のランウチ警鐘の物スゴイ音、人はさけぶ、自轉車は飛ぶ、ポンプは走る、一時間半乃至二時間にして百五十四戸の全燒眞に其慘害の程度と時間の早やさを筆にも口にも盡す事の出來ない只單に「驚く」の一語につきる、感想と云へばアトから考へ出し思ひ出す事であるが實際其刹那には何の考も出るものでない只「忙然」と云ふ方が恐らく眞實であると思ふ。

火災よ汝は二時間にして百万圓以上の富を國土より空しく消滅せしめた古人は謂ふ汝の名をしてシクユウと果して眞乎、今にして私をして云はしむれば只ボーゼン自失と云はんより外感想がないと云ふ方が本當であると思ふ、知己吉岡氏は勿論小松原の人々の火災に對する今后の深い注意と御自重と而してより多大の勤勉とを切に希ふものである。

――――◎――――

二六詩

朝な夕なに大事なものは粗末にやならない火と財布どんなポンプも通れる樣にしつかり直しな道や橋

小松原大火と私の感想

當時 篠ノ井高等女學校教諭 山野敏三

大正十五年四月廿日（火）晴、午後烈風、夕方降雨

午後から烈風となる。爲めに空間が、歪みはしないかと思はれる程吹き荒ぶ。

ところが、午後三時頃半鐘の音がし出した。何しろ硝子戸に打ちつける風の中であるから皆非常に驚いて屋上に出て見た。而して、吹き飛ばされ相な風の中に目を見開いて見ると、茶臼山連岡の東北麓にあたる一村落が今や熾んに黑烟を上げつゝ苦悶して居る。誰れ云ふと無く共和村の小松原だ！と悲しい確定が與へられる。

見る〳〵煙の量は、多くなつて行き毒蛇の如き火焰、惡魔の頤使のまゝに歡喜して亂舞するかの如く、瞬く間に天に沖する大煙團が卷き起る。妖雲怪雲、あらゆる呪はしい形象を具へた黝暗の色相は、山頂をも隱して了ふ。

其の中を、時には眞紅に、時には暗赤に、時には一閃又一閃黃く輝く焰！ 烈風にあぼられた火は、何んの容赦も無く北へ〳〵と延びて行く。各所の半鐘は、しきり

に鳴り渡り、人は、蟻の如くに走つて行く。大路を小路を畑中の路を。驛を發した下り列車は、警笛を鳴らしつゝ烟燒の村を外に一路長野へと進んで行く。ガソリン・ポンプが大勢の人々に擁されて走つて行く。

けれども、猛り狂ふ風の前には、どうにもならぬ。斯うなると人力は、慘劇を助演すべき果敢ない役廻りに過ぎぬ。飛び火、又飛び火　恐らく二町位のところを一飛びにして行くのだらう。

思はぬ前方から、黑烟の流れが一筋二筋上るよと見る間に、其の暗黑の中に血管の樣な火焰の幾條が見える。すると瞬く間に、後から押し寄せて行く大黑烟の奔流の中に合流して行く。鳴り疲れた樣な半鐘は、今や全く挽歌を奏する如く、大悲曲を傳へて居る樣だ。はては小松原一圓は、全く烟の中に隱れて見えなくなる。オ、何んと云ふ大自然の暴逆だらう。オ、何んと吾等人類は、微力だらう。而して、其の微力な人類が何んと泣かされる事だらう。一時はさう心の中で眩きながら、此の地獄的の大壯觀を見て居るより外無かつた。

風は、未だ止まぬ。午後四時過ぎになる。未だ止まぬ。此の狂亂者は、魔女の長髪の樣な黑煙を尙ほも面白さうに吹き靡かせて居る。焰は、肉のあらん限り骨迄舐らねば止まぬ飢えた狼の樣に、實に執拗に燃燒破壞をつづけて行く。けれども呪はれた此の日が、たそがれ樣とする五時近く、流石の煙も灰色を帶びて來て、やがて終熄の徵を示した。これは連續して破壞さる可き何物も無く、焰の據る可き材料が盡きた事を示すに外なら無い。此の時刻が小松原の全滅を報ずるものだと思つた。

學校では、早くも現場へ急行した山崎氏の歸校を迎へて緊急職員會議を開いた。「どうも煙に咽んで近寄れなかつた。」斯う云ふ氏の言葉は直ちに自分の想像を物凄い現場の眞唯中に驅り入れる。會議の結果、取り敢へず校長、瓜生、工藤、靑木の四先生、それから歸つたばかりの山崎氏も又加はつて、此等の方々が、現場に急行される事になつた。—夜風を衝いて。

宿に歸れば、下では、近所の人々大勢集つて、炊き出しに大多忙を極めて居た。終夜家の內は、火事の話で持ち切りだつた。屋外は、引き上げる消防、往く貨物自動車で荒れ狂ふ嵐に、恐ろしく緊張した光景が續く。

二階に上つて、一人靜かに座すると、戶外の風聲、戶のきしめき、其の他一切の騷音が、一層自分の心を混亂させる。而して、此の混亂を平靜に導かんが爲めに、じつと目を据えて電球の光心を見つめて居ると、數時間打つゞいた慘劇の有樣が、屋上から見て居た時とは、別種の色彩を帶びて展開する。展開は更に過去の方に向いて

行き、過ぎ去つた大正十二年の大震火災の時の火の色が、又も心像として再現され、之れが自分を恐迫するに至つた。

あの九月一日の夜、避難所だつた一つの橋の桔梗門內の高所から見下した時の光景！一大熔鑛爐の內部に在て眺め入つた彼の限り無く輝く黃と赤との世界。あの當時の追憶は、平生自分の不快として避けて居るところであるけれど、兎に角、不思議な魅力を以て、折に觸れて、心に迫り勝ちである。

だが、結局如何なる呪詛も極まれば、何時かの形式に於て希望の衣裝を着ける。斯く呪はしい火災が、もし此の人類の間に於て、極めて稀れな現象となつたならば、如何に可いであらうと想像する事は、やがて科學の力を呼ぶ事であり科學の力が、其の方向に働き出す時、希望を認める事が出來やう。苦痛は、實に人類進步の源泉である。苦痛あり、呪詛あつて後、來つた希望が、眞に進步に臨む炬火ではあるまいか。——斯う自分は、思ふが故に、過去の呪はしい火による人類の災害を氣のつくまゝに取り出して羅列し、怨謗して以て科學の力が、之を救ふべき曉を待たう。

日外、自分が讀んだカトリックの書籍には、例のエヂプトアレクサンドリアの大火によつて、當時既に完備して居た大圖書館が燒け落ち、七十萬卷と稱された藏書は、悉く灰と化し、爲めにキリスト降誕直前の貴重な記錄は、詳細なものを永久に失つたとあつた。此の災厄は紀元前半世紀だつたと云ふから人類のため大きな損失だつたに相異ない。

それから矢張、文獻の燒失で吾等に貴ひ泣きをさせる一つのシーンは、遠く求めずとも實に大正大震火災の時に起つたのである。それは帝大の圖書館があの際四日間も燃えつゞけて五六十萬卷（目錄自身の燒失によつて卷數さへも不確實）の貴重な書籍を灰に化して了つた際であつて、其の時館長和田萬吉博士は、初めは、如何とも手のつけ樣無い此の慘劇を痛ましくも見て居たが、やがて落涙して止まなかつたと云ふ。實に氏の三十年間の苦心が眼前に煙と化して行く大悲哀—いや〳〵それよりも其處に集められて居た澤山の著者達の魂が二度目の死、ほんとうに永遠の死、に臨んで居る寂しい姿を焰の中に見出して歎欷せざるを得なかつたのであらう。

更に火の犧牲になつた貴重な建築物は如何。奈良の大佛殿や善光寺の炎上の如きが、正しく其の例であつた。殊に前者の炎上は華麗な大建築ではあり。尊崇の對象たる大本尊を藏したまゝ火になつたのであるから、どんなに當時の人々の心を暗くした事か。又後者の如きは、「水

内の郡に安置し奉りしより以來、星霜は、五百八十餘歳。されども炎上は是れ始めとぞ承る。王法盡きむとては、佛法、先づ亡ずと云へり。」と平家物語の著者をして長歎せしめたのである。中印度の祇園精舍は、七層の大建築であつたけれど、木造だつた爲め火災によつて跡も無い。—那蘭陀精舍が、今發掘されて、當時の偉觀を示すに反して。誠に祇園精舍の燒失の如きは如何にPanta rei（萬物は、流轉す）とは云へ、一切無常の法則を如實に示すものとは云へ、惜しいものであつた。

兎に角、こなん風にして火災は、多くの紀念物を不用意の間に、吾等人類の間から、永久に消し去つて行つた。

殊に時代精神の結晶たる文獻を持ち去つて貴い連鎖の接續を破つた事、數知れずである。文獻の燒失、尙ほ涙を忍ぶとしても、地球上最貴の物即ち人命を之が爲に失つた事どの位か知れぬのである。唯希望すべきは、科學の力が經濟と結び合つて、吾等をかゝる禍厄から救つて呉れる時期の到來である。實に其の時期の速かなる到來である。

火災に關する暗い聯想の糸を斷ち切つて、筆を擱かんとすれば、窓外の風聲は、尙ほも魔の呪文を囁き、見廻はす吾が室の燈光も、額面も、時計のセカンドの歩みも皆寂然たる中に鬼氣を帶びて居る。

「人間は、大自然の威力の前には、か弱い葦である。けれども、人間は、考へる葦であり、人間の考へる力は、大自然の威力よりも秀れてゐる。」とは、フランスの天才數學者にして哲人のパスカルの言であつた。斯樣な言葉が慰安ともあきらめとも成つて、雜念の間に、又、明滅する。

やがて、夜も更けたので、明日、詳しく聞く可き小松原の慘話に於て、どうぞ老人の悲慘に關する事の少い樣に、ショーペンハウエルの所謂「深淵に臨んで居る」人達の上に禍少かれと祈りつゝ眠る。

罹災所感

罹災者　福井邦友

昔より怖ろしきものゝ譬へとして地震雷火事「おやぢ」の四つを擧げて居るが雷の傲然たる音響は慥かに身の毛もよだつ程怖しいが之れに伴ふ驟雨は五月雨の陰鬱なるに或は時雨の寂莫なるに比し如何にも陽氣であり男性的であり而かして慈雨一度到らば酷熱を去り宇宙を洗滌して森羅萬象郁々として生氣漲る有樣は其音響の物凄きに

反し其惠み霑ひは實に偉大なるものである「おやぢ」も漢字で書けば親父である嚴しき裡にも親しみがある若しそれ地震火事ときては其處に何等の惠みもなければ親しみもない全く破壞であり凄慘の極致であり現在の地獄である。

私は去る大正十二年九月關東大震火災の直後公務を帶びて上京し具さに災害地を跋渉して阿鼻叫喚の跡を偲び其慘愴たる光景を目の邊りに見て震火災に對する新たなる恐怖を感じ罹災者に對する同情の念むら〳〵として胸中を壓し轉た感慨無量而して天災には人力の到底抗する事の出來ない事を泌々と實例を以て深刻に教訓せられたのであるが偶々大正十五年四月二十日小松原部落祝融の災に當り百五十七戸八百數十名の同胞と共に類燒の厄に逢ひ恰も關東大慘害の縮圖の如き大修羅場を彷徨し熟に往年を回想して天災抗し難きを再び痛嘆せざるを得なかつたのである。

爾來關東地方復興につきては官民一致協力孜々として其術に膺り或は家屋の建築に通信交通の改良に衞生施設の完備に產業の開發に全力を擧げて精勵したる結果本春を以て復興事業の完成を見るに至つたのであるが翻て災後の吾鄕を顧るに之又罹災者の眞劍なる努力と環境の甚大なる援助とは相俟つて着々復興の途にあるので最早外面的の体形に於ては約七八割の復興を見るに至り其完成の期も遠からずして到る事を確信するのであるが其內容の恢復に至つては徒らに樂觀する事が出來難いのである今や吾々は一家一鄕の運命を双肩に擔ふて興廢の岐路にあるを思へば自ら背に汗を催さずには居られないのである其遲速は一つに各人の自覺と發奮努力の如何により決せらるべき事である。

吾々は天地の間に生活し曠大なる天地の恩惠を蒙りつゝある以上亦天災地變にも遭遇することを當然として覺悟せねばならぬと思ふ今後の建設は仲々容易の業ではないがよし建設が成つたにしても決してそれに甘んずべきではない更に竿頭一歩を進めて軈て來るべき災害に備ふるの用意が肝要である「雨降らぬ間に屋根を葺け」「盜人を見て繩をなふとも何ぞ及ばん」とは古人の戒めであり極めて陳腐の樣でもあるが現在の難局に直面したる吾々の羅針として以て學ぶべき最も適切なる警句ではないか

嘗て弘化四年大震災の際犀川上流に於て虛空藏山崩壞して河水をせき止むる事二十一日間大湖の如き湛水は一時に海瀟の如く襲來して本部落の平坦部は擧げて耕地宅地の別なく一瞬にして荒野と化し住むに家なく喰ふに食なき實に悲慘なる災禍に遭ひ併かも當時は交通の便備はらず金融の途に乏しく之が復興のために吾々の先考は臥

薪嘗膽如何に多大なる犧牲を拂はれたるかは今に想像して余りあるのである而して其損害並に困苦の程度の如きも到底今次の比ではない事は云ふ迄もない。

以來數十の星霜を閲したる今日村民經濟の實情を洞察するに其當時の罹災者は比隣災害の輕微であつたものに比較し寧ろ經濟狀態優位にあり加ふるに其住宅の如きも當時難を免れたるものは極めて倭少粗末なるに比し災害により再建したるものは概ね宏壯なる等全く昔年の禍は轉じて後年の福となりたるの感があつたのである。

之れによりて之を見れば這般の火災の如きも吾々が先人の遺風を遵奉して一大決心を以て復興の完璧の目標として奮勵努力するならば災害は時に精神作興の刺戟となり質實剛健の氣風を培ひ向後理想鄕建設のために資する事多きを思ふものである。

火災のために被る物質的損害は勿論甚大なるべきも是がために物質的精神的に向上改善せられたるもの或はせられんとするもの亦決して些くないのである。

吾々は此意味に於て徒らに悲觀退嬰に陷らず最も强固なる心念のもとに緊褌一番破壞より建設へ建設より備災へと逐次勇敢に邁進すべきではないか。

大火の想出

罹災者　森　慧　典

思ひ出す大正十五年四月廿日午後二時過ぎ、折柄砂塵を卷く烈風と春はしやぎの內に警鐘は乱打された。「火事だ〳〵小松原が火事だ此の大風に」と叫ぶ人々の聲すわ一大事と許り自分は無意識に村役場を飛び出した。風速實に毋米自轉車に乘つて北に向へば、烈風に押されて文字通り追手に帆を上げてゞある。

災源地に來て見れば實に驚愕の他はない。松本小山の兩家は折柄の强風に煽られて火勢猛烈を極め物凄まじき音響を立てゝ、附近一帶を焦熱地獄に早變りさせてゐる。其の慘憺たる光影今尙眼底深く印されて、到底下手な自分によく言ひ表す事が出來ない。

傍には二三の小學生が悄然と立つて、不可思議に見入つてゐる。水便なく、かてゝ加へて此の大風では、手の下し樣がない。縣道は猛火に見舞はれて人馬の交通が遮斷されてゐる。

餘儀なく桑畑を東へ廻つて坂を下れば之は又意外火煙と砂塵とに包まれたる麥田の上を、斜に男女數人が今病

者を板に乘せて慌たゞしく安全地帶へと運んでゐる其の緊張した至誠の籠れる動作其の憐れなる風情聞くも語るも涙なしには置けない。

猛火は此の時早くも南組の中央へ延燒して、軒竝に一齊に火を吐いてゐる。烈風は益々狂つて順序を踏まず手當り次第飛火して盛んに猛威を逞しうしてゐる。豚舍の屋根が燒け出して豚公周章ふためくも悲しく、かくて寸時ならずして今は最早中北組も遂に猛火の洗禮を受け初めた。

狂乱した人々は之の烈火を脊に負い乍ら尙も之の災禍より遁れん一心より身命を賭して防火に盡瘁してゐる、なかにも次第に近接せる鬼火を見て今は之れ迄と防火を打切り必死となつて神佛家財道具の搬出を餘儀なくせられたる等實に悲慘の極みである。されど神速なる火勢には抗するを得ず遂には悲鳴を擧げて避難するの止むなきに立至つた。

あたりは災火天に冲して燒け落ちる棟異樣なる音響を立てゝ最後を遂げる、家寶家具類住み家を失つて、野地に今は淋しく二三の家財道具を見守る罹災者、さては家內の行衞を案じて右往左往する人群等其の慘狀目もあてられぬ。

遂に猛火は神域へと延燒した。流石近隣に誇る神々しき森も轟然たる音響と共に見るも凄まじき光景を呈して社殿と共に其の一部を殘して燒失したが、之より先き御神体は勇敢なる消防手の手に依つて安全地帶へ御遷し申し得た事は不幸中の幸と言はねばならぬ。

神鎭まりて以來幾年も側近を御守護した御神木も、今は僅に軀幹の一部を殘して形を失つて仕舞つた。

此の頃に至り流石の烈風も治つて出火以來約二時間半百五十餘戸五百棟と實に百餘万圓の莫大なる損害を與へて苦もなく鎭火したのである。

之より先き出火と同時に各地より時を移さず出動した多數の消防隊に依つて殘火の整理は開始された、夜に入つては、消防、郡、村、警察等の關係官公吏協力の上取敢へず多數の罹災者へ食糧品の配給、避難所の設定（第一避難所小學校）救護所の新設等臨機の措置は行なはれた。

あたりは電線が切斷されて暗黑の世界に殘火が至る所に淡い影を殘して消防手と駈け附けた近親の人の手に依つて僅に消火されてゐる。

極度に疲勞した多數の罹災者は四月半とは言へ次第に積る深夜の寒さにも雨露を凌ぐべき何物をも今は失つて一睡もなし得ず僅に給された握飯に空腹を滿し無念にも其の儘夜を明かしたのである。

明けて廿一日全國の新聞紙は一齊に此の一大災禍を報道した。遠近より見舞に駈付ける關係者は引きも切らず、村會は早くも午前に開始されて前後の對策協議。この突嗟の出來事に最善の努力を惜しまなかつた。災地を一巡して餘りにも變り果てた現狀に今更ら驚かざるを得ない。生きの惡い海老色に燒け殘つた自轉車の殘骸、太く細く燒け縮んで突立つてゐる黑い電柱、片足を殘して影を失せた机、家具類、異臭を放つて今尙ほ、もへつゝある籾俵、土まみれになつて野地に投げ出された高價な衣類、さては片手古に變つた鍋釜、水をたゝへられて海の樣になつた屋敷立退先を記された立札等の數々は隨所に見受けられて、宛然過ぐる三年前關東の野に起りし大震災を目のあたり思ひ出される。幸各位の甚大なる御援助と御同情とに依つて二三日を出でずしてバラックの建設を見不撓不屈。一意專心。協力一致、跡形付、再建へと精進し、異常なる一大決意の下に努力する事災後四星霜、今や復興も着々進捗し既に今秋を期して村社の建築も完結を告ぐべく、益々健實なる信念の下に勇往邁進以て各位の御芳志に酬ゆる樣努力して止まぬ次第である。

終りに臨み刊行會の此の意義ある紀念史刊行の壯擧を謝し、併て本村有史上特筆すべき此の一大災禍を永遠に傳ふべく村社境內又は適當の地を卜して火災記念館なる一棟を建設し以て火災に緣深き、使用に堪へざる家具家寶の殘骸、當時の實況、罹災者名、火災寫眞等を一般より蒐集、末世に傳ふるも意義ある企と信じ切に其の實現を望んで止まざる次第である。

火災についての所感

罹災者　小山熊太郎

四月二十日。

それは永久に忘れやうとして忘れる事の出來ない小松原大火災の紀念日である。

今四年前の其の當日を想ひ起して今更ながらに涙さへ浮かび胸湧きかへるのである。

僕は多年の宿望であつた住宅の改築と增築とに全資力と全勢根とをつくしてたゞ其落成の日を樂しみながら凡ての苦しみも種々な犧牲も忘れて勵みつゝあせつたのであつた。そして二十日は吉日として是非渡坐(ワタマシ)すべく十四五人の職人を督勵しながら疊の表屋根の仕上げ壁の仕上げと忙はしく仕事を進めて居た時しも晝食半ば過ぎ南の方から

ジャン〳〵〳〵。警鐘亂打

おや火事だ。……火元は遠いから心配はいらない仕事を早めて呉れと、最初のうちはどうしてこんな方まで延燒して來やうとは夢にも思はれなかつた。それが、其火が、惡火か南の烈風に煽られて鎭火などすればこそ猛火は北へ北へと進行してもう到底災害の不可抗なる事を感じた其時は、其刹那は、どうして今それを想ひ返して筆や口にてあらはしつくす事が出來やう。八十才の老母を控へ臨月の妻は身重に身休の自由さへも思ふまゝにはならず。一時をあやまれば火焰のとりことならねばならぬ。嗚呼。山と積み上げた疊も自分の理想にまかせた湯殿も欣事場もすべて農家として園藝家として好都合に文化的にと築き上げた其新築の家。まだ一日も使用せずに灰燼に歸せねばならぬ其新築の家を後に殘して年寄や子供の身の上をかばひながら無我夢中に林檎園に避難したその當時の記憶を呼び起すさへ身の毛もよだつ思ひがされるのである。

嗚呼何と惠まれざる自己の運命よと天を仰ぎ地に叫けんだは幾度だか、あまりにもむごたらしき悲慘事の極みである。

一日二日は如何にしやうかと前後處置さへも施しかねたる有樣である。

然るに人々は。

如何に雨露を凌ぐべき爲めとは言ひながらトタンのバラックよ木造よとトン〳〵大工の音が仕出して村救護のバラックが彼處にも此處にもと出來上る樣になつた。そこで自分は林檎の經營上、林檎園の中へバラックを建てゝ貰ひ度い事を當局に願ひ出たところ當局はそれはまかりならぬ燒跡ならいざ知らず他へは造る事は許るされず再三再四の願にも許可されず村から配された救護の其バラック材は自分に取つては只無用の長物として永らく燒跡に置かれた爲めつい使用にも堪へられない物として終つてしまつた。

四年の今日となつてなほ不可解な遺恨事として自分の頭に殘されて居る。

復興に〳〵にとあせる人々は先を爭つて家を建る事に努めた、彼處であの位ゐ家を建てたら、自分はそれにも增した家をと言つたやうに、それから〳〵と前代にもました家ばかりと皆建て代へられ見る〳〵迅速に外面的な復興は出來上つたのである。以來それより打續く不況に內面的眞の復興は如何にと考ふる時思ひ半ばに過ぎるのである。

あれ丈けの災害にあつた燒跡には宅地の區劃整理をされた一戸をすら聞かない。

東京大震災後の面目一新した事は誰しも知るところで

ある、近くは木曾福嶋復興の見るべきものの有る事は新聞紙が報導して居るにもかゝはらず小松原の災害後は如何に大小の差こそあれ同じ道程である。然るに災害前と後とに何等の差異が生み出されたかと顧みる大同團結に依つて成つたるは事物をも生み出して居らない。

競つて自分の家を立派に造りなほしたと言ふに過ぎない。當時の當局に於ても災害を機會に小松原全体として以前にも優した改善をしやう等といふ考へも無かつたらしい。

まして災害を記念すべき様な事業も起らない何等計畫もされない一二年もしたら惡記念日である當日をさへ忘れるに至る事であらう。公私經濟緊縮の折から四月二十日を記念日として災害民こぞつて意義ある事業を起こし經濟的復活を計らねばならぬ。

「災害後の復活如何」研究問題として此處十年や二十年是非共臥薪嘗膽の苦しみによつてでなければ、內面的經濟的復活は望まれない、新らしい家がゾロ〳〵と建て並べられた其事をのみ見て復興とはどうしても思ふ事は出來ない復興策として山の開發大によからう。

山道の開發大によからう。多々道はある事と思はれるたゞ一致協力事に當るのみである。

忘るな四月二十日を。

忘るな四月二十日。

四月廿日の筋かき

罹災者　野口渙治郎

駄具な息子は火事より怖い火事じや田地は燒け殘る。私はこう諦めたが何うしても諦められない。忘れもせぬ其時は恰度千束塚のクレ叩きに餘念なかつた空は花曇りのドンヨリ曇つた極めて南風の强い日で如何にも變つた日で有つた未だ碌に仕事もせぬ折柄村の警鐘が亂打されたので村の方を振り向くと松本和市氏の家らしいソレと云ふので駈け付けた和市氏の家は一面に眞紅であつた。

久保田治作氏方に救助に這入うとしたが戸締されて居た困つて居ると久保田力君が來たので共力して裏の戸を破りて先づ佛壇次に箪笥そこへ久保田重男君も來たそれからそれと東裏へ運び出したが熱くて焔の爲に居たゝまらず家は一面の火だ田の畦路を庄田肇君の家へと飛んだ其時はどの家の屋根からも火を吹いて居た福井左市氏が馬を曳き出たのを東の桑畑に繫ぐと間もなく一面の火と化した近寄る事も出來なかつた誰だか記憶して居ぬが早く家へ行け早く〳〵と促された。東に出ると中組は煙

火とで有つた。

東の田圃路を走りながら野口繁治氏の小屋が盛に燃へて居たのを見て驚いた煙の中を自分の家へ飛込んだ佛壇は重くて駄目だ本尊如來及び位碑二三を持ち出した再び箪笥を出すべく二階に登つた頭の上は火だ煙に卷れて北窓を破り命辛々に二三の衣類を蔽うて東の田へ避難した。

何處と當もなく村社迄で走行た其時は庄田茂雄氏の母家は燃えて居た人も澤山同氏方で働て居た自分は村社の貴重品を多くの人々と運び出した受持巡査の阿部氏が寶藏庫を破つて中の物を出そうと云ふので岡田の消防手吉澤波內氏と壁を破りし事も夢の様に記憶して居る。

其の折り想ひ出したのは裏の福井有本氏で責任が在るから銀行を護られて居たので何してよいか誠に困ると云ふので直に銀行へ駈け付けた其時は重要書類は下堰端へ山と積れて居た貴重品は隣村四ッ屋區の白井頭取の家へ送つたが他の積れた重要品を岡田の若林小河原の兩名と共に警護して居た其時森和十郎氏等の萬年河原三四軒燃て居た自分は燃えさかる大火を目擊して居るのが不甲斐なく殘念に思はれ一品でも運び出してやりたいと思つては見てもどうする事もならなかつた。

其中に雨が降り出して來た家內は何處に避難して居るかを調査し其夜は消防組と共に村社。御神木。觀音堂。唐傘松。等の火を消し役場より配給せられし握飯を食して野口近治氏福井睦治郎氏と別れて東の田にて一夜を明し廿一日は村社鳥居の火を消防手と共に消し其翌日は他村消防組員及び手傳の人々と灰を片付け尙村役場配給バラック運搬手傳等に盡力し隣家共に助合ひ五月一日に漸く村より配給のバラックに安眠する事になつたのです實に自分の家の様な氣がしなかつた。

是れは其の日の出來事の道筋に過ぎぬが自分の心に在るだけ書かれないのが遺憾であります。—終—

燒死の父

罹災者　庄田嘉平

南の風は荒れ狂ふて人をも家も吹倒す様な暴風の中に家や物置を繞る桃杏の花の盛りとを見比べて極樂地獄は斯様なものかと思つた。それは若い女子が荒男に追擊される様な、いやな日でした。折も折時も時急散突發ジヤン〳〵〳〵中組北組南組はては隣村はおろか近き善光寺平は警鐘亂打……ドコダ〳〵松本和市宅だ行け行け早く後の火の用心を賴のむ……無我無中で僕は消防服に着か

へ直ちに現場へ飛びつけたそして必死に家具を取り出しに勤たが何分火勢の迅いので身邊危くとても活動する事が出來なかつたそこで自家へ行く事にした物置本家とも一面の火の海と變つた中を彼の處此の處と火炎を避け來ると火に包まれた煙の家の中に老女が何者をかを搜して居たそれとも出られぬので氣を狂わして居たのか實に捨ておけないと見た直に屋内へ飛び込み物をも言はず背負ふて西の山の安全な場所に行き此處なら大丈夫ですからと近くにあつたふとんを掛けてやつたそれは久保田宅意氏の母で年齢八十からの村でも知らぬ者もない體の弱い人でした。それから自宅に辛苦して飛び着いた此の時の我家の有樣は如何でしたらう四方八方一面の火の家となつて居たではありませんか、しかたなく僕は疲れた體を運びつゝ家人を尋ねる事にしました所が高等二年生の弟がカバンを掛たまゝこれも家人を尋ねて居たのと行逢つたので燒けて居る自家の邊を見つめ躰の無事を語り合つたそしてお母樣はドウシタ知らぬかア、知らぬ僕は何處を何處とも無く何をして來たか全く無意識でこゝまで來たので兄さんに行合つたので初めて氣が落付いた樣な感じがしたと云つた。それでは二人で見つけようと順に足を北や東へむけた其の時弟が大聲で呼んだ兄さん兄さんお母さんがあそこに居ると云ので走つて見た母は本尊如來像一体サハリ及び木魚とトランクの四點が母の力に依て守られて居た私共親子三人は物質其の物よりも先以て無事であつた事を語り交して喜んで居たのです薄闇くなりそめた夕方火もおだんで來て煙りも白色になつた頃自分の屋敷の燒跡へ行つて見やうと歩み初めた其の時でした誰の聲ともなく死人だ〳〵誰だらう〳〵との叫び聲があつた其の時何んとなしに尠しも姿の見えない父の事を氣にし初めた僕の西隣の飯田益男氏の西側の入口は人の山であつた誰だらう此の燒け死んだ人は村の人かしら實に氣の毒だなあ。誰れだろう大變な事になつたナア同情の涙の聲の人々を押分けて僕も近寄つて視たが誰れとも判斷がつかなかつた其の死体は西枕に雙足を突張りうつ向きとなつた眞黑の燒死體それを視つめた時の僕言へ知れぬ無量の感に打たれた而かしてその時股引の燒け殘された寸余の布縞を示された時僕は其布縞と燒死体とを視比べたそれでも涙も出なかつた聲も出なかつた布片を持つ腕はワナ〳〵震いた頭がツンツンした……此時の事は書けません……萬事窮すと叫んだかもしれぬ。

僕の父は村人も知り居らるゝ腕力の強い男膽玉の大きい男なか〳〵勝氣である男極めて壯健でそして酒を好む事でした僕と仕事の時によく力の自慢をした三四年前仕事で大負傷をし手術をうけた時注射もせずに治療させた其の元氣の話も父はいつも自慢に語られた北組の福井有本氏などにも君は勝氣でいかんよ今少し……などと云われたが俺にはそれがなか〳〵などとも自慢話に語られた此の樣な父であつたから僕は父の行動には全く安心して居た三四時間前火元で僕に注意してくれた「床下火だ早く逃げろ逃げぬか馬鹿」其の時の父の言葉が最後であつた。事を思ふ時僕の心は！？……泣き乍らぼんの型ばかりに父の告別式をした此の寂しい心は永遠に僕をして苦しめ思ひ出多からしむる。アヽ、小松原百數十戸の燒失者中僕と感想を供にする人は幾人ありますか實に不運な私共一家ではありませんか。

順譽明清信士　　行年五十三才
大正十五年四月二十日　　俗名　庄田清作

朝夕冥想追憶する時燒跡より拾ひ出した午後三時十五分四十四秒で止まつて居る紀念の懷中時計と新しき位牌とを見やつて涙なしでは居られません。

火事の想ひ出

罹災者　町田植太郎

天氣はよかつたけれども花曇りの樣な太陽もはつきりとは見へない日でした。桑苗木の接木のために万年河原の野口政之助氏宅へ仕事に行つて居りました。午前十一時頃から段々に烈しい南風になつて來ました隙間洩ると申しますか納屋に入つて一本々々接木して居ります戸の隙間からは色々な塵が舞込んで電線が宛も早鐘の唸りの樣に鳴つて居ます。何だか心の落つかない日でした風は益々烈しくガタン〳〵と時たま大きな音を立てゝ吹きます。誰れ云ふともなく火事だ〳〵との遠聲が時々します。耳をそばだてゝじつと聞ひて居ました何んだか初めは電線の唸りやないかと思つたのは警鐘の音なんでした……南組が火事だと思はず走り出しました。何處をあてどなく駈け出しました足が重くて氣ばかりあせつてなりません風は強くて体の自由がとれません幾回ともなし小堰に落つて漸く家へ歸りました空は愈々黑い樣ないやな色あいになつて來ました南組としても一番向ふ先の私の家は風の強いためか火の道に通りのよい爲めか火元の隣りの瓦屋の薪の松葉の束が火のついたまゝ又は藁鳥の束のまゝ火がついて張りつく樣に屋根に舞ひ落ちて白い煙をたてゝ何ケ所からも一度に火を吐いて居ります。梯子をかけて屋根の火を消そうか家の内の道具を出すかと惑つきましたけれども、もう裏の庄田肇氏馬場良之助氏の家が一面の火でした。何處からともなく子供の泣く聲、

竹のわれる音で本當にみじめなものでした隣の太市氏が庭先で盛んにひようし木を叩いて應援の人々を呼んで居ります。人も澤山に來ました、さゝやかな家でも永年住みなれた吾家は間もなく潰れ落ちてしまいました火の子がパツト立ちました一品でもと思つて火の中をもぐつて漸くにして出した夜具布團も慾にかられて手近に出したせいか呪火の惡戯に皆灰となつてしまいました氣にかゝるのは子供です氣づかいながらも近所や心當りを探しましたが唯パチン〳〵と竹の割れる音人々のわめく聲もう御宮までも火がついた樣にきゝました人々は何處へともなく走つて唯耳に殘るは轟々と火の音だけです皆東の方の田圃へ避難しました今朝仕事のために家を出る時には何も變らぬ家でしたに夕方になつて今は家はなくなつてしまいました見舞の人々が色々と慰めてくれますけれども血走つた目ばかり光る樣な心持で誰やらの見さかいもつきません幸に子供は連れ立つて何處からともなく戻つて來ました子供を見るなり可愛あまりか家が燒けてのつらさか男泣きに泣きましたそして一層子供に申譯のない樣な執着が起きました燃へ殘りし宅地内を狂人の樣にさまよつて此處が茶の間あすこが毎日食事した勝手だなあと想へ出されて又泣きました呆然としてするでなし又する氣もなく冷めたい燒け殘つた軒場の石へ腰を下して消然とうなだれました燒け殘つた飯田儀左衞門氏の情で一室を借りました。

火災を思ひ出して

罹災者　酒井才治

丁度此日は早朝から　上ノ平夏目果樹園へ萍果の剪定に行つて居りました。朝から風の日でした樹の下になり上へ登つたりして鋏を入れて居りましたが、風の爲めに丁度に思ふ枝が剪れません位でした。午後二時頃だと思ふ頃、半鐘が各方面から鳴り始めました。誰思ふとなしに、春先ではあり風は強いし心ならずも心配して居た矢先とて、取るものも取り敢ずのぞき（俗稱）迄降つて來た時、村の火事だつたことが判つたと共に火は既に町田植太郎氏、瀧澤精米場の屋根一面に擴がつて田圃に働いて居る人も北の方からも皆南へ〳〵と驅出します。これは大したことをしたと自分も轉ぶ樣に家へ歸りました。風は止みずなしに益々烈しくなつて來る。飛びつけた時家では屋根へ梯子をかけて馬欠に水を汲んではかけて居ました今にして思へば馬鹿な話でした籾俵四俵を前の畑へ出して又もと引返しました時には屋根一面が火になつてしまいましたもう駄目だと家族が多少持出した布團や着物を天照寺の萍果畑へ運ぶ。私と悴美春は又も猛火を侵して疊數枚を取り出し得たのでした火はパチ〳〵と處定めずに燃へてゆきます、もう慾も何もなくなつて天照寺へ避難し唯茫然と魂が拔けてしまいました。下を見れば一面火の流れでした。黑かつた村は、赤い村と變りつゝ燃へ續く態を見る時、つら〳〵無情を感じました。

其の日の有樣

罹災者　瀧澤壽作

四月廿日の日記、數日來天氣續き空は薄曇り溫度は何度位だか先づクレでもはたくには單衣でも暑い位で少しおむしあんばい朝より南風吹き次第〳〵に强くなり何となく氣持のよくない日である。自分は腰田に苗間の、クレをこわして居る此日は小布施の玄昌寺の授戒の中回向に當る新屋の叔母が入戒くて居るから是非見舞に行かなければならない「明日お前行て吳れ！では行きます」戒師は本山の大禪師であるから序に長野から尺八の絹を買て持て行て東昌寺の和尙樣でも賴んで禪師樣に揮毫をしてもらふ樣にと云ふのであつた、晝飯をすますと直に銀行へ行て五枚ばかり拂戻して來た、見れば妻は腰田に、クレをはたいて居るから直家の裏口を開けて通帳諸ろ共敷物の下へ突込だまゝ腰田へ行た南風は中々烈しい空は曇りだ五間ばかりの畦を行き、もどり、さくると南の方に煙が見ゆる瓦燒の煙りか、此の風の吹くに見る見る煙は大きくなる、アレ火事だ！消防器具置場に飛で行た消防手二人と自分とポンプを出して南へいて駈け出した、松本和市の家が今燃え揚つた時であつた風は烈しい松坂秋松氏の庭へポンプを挽き込んだ瓦屋根だから此家で消し止めると云ふ計畫だドン〳〵火の子は飛んで來る消防手も寄て來た、水口を家のかげに向けた其内に東の物置の屋根が火で吹き貫いた熱くて何分居られない自分共二三人小さなポンプをかついで北の方へ來た意外だ久保田安之亟氏の家は既に燃て仕舞た驚た此處にポンプを置て渡邊宇一郎君の家で手傳た流口から勝手道具を持ち出しては東の高はばから落した表の障子へ火風が吹き付て物すごき事おびただし大抵出して又北へ行かんとする久保田氏の土藏の東の道何處ともなく黑煙の風に吹きかけられ既に窒息せんばかりに苦しかつた辛じて西の山ぎはへ出て北に向て走つた近所の家々では悲鳴を上て救を求むる。「困る役簞笥」どこにある。「座敷に」直ぐ飛込んだ簞笥の上にいろんな本や碁石が載てあつた箱諸ろ共持ち出し

たから碁石はグワラ〳〵ドツシン後をも見ないで西の畑へどしりぶろくだから曳出はぬけかかつた、あなたは此箱の番をなさいと」、又飛込んだ佛壇をがた〳〵どこから出たか重男君が來て漸く庭まで出した佛壇を上向きにころばしたから六尺四方もある重男君は南側をになつて居る中々重くて大きくて自由にならない、前の家の燃る火が眞紅に成て吹き付るから熱くて堪らない。最う一ト奮發だ。中々熱いに重いにだめだ。もう少しだ、がまんしろだめだトー〳〵重男君は放して逃た自分もにげた北の方へきな臭いいぶり臭い、わき見もならないで地藏堂の下迄來た此付近には火の氣は無い風は烈しくて木の枝も折れたかと思ふ程だつた見るともなく東の方へ向た大道ばたにならんで居る家の屋根はみんな火がついて煙は北へなびへて居つた驚いた火はもうあんな所まで來たのかと躰がザワリとした、東京の火災もこんな風なものだと思ひ出した駈上つて田中の家の裏へ出るなり自分の家を見た時は一層驚た土藏は火の中、家も八分通り燃て眞紅になつて居る覺へず吾家の傍まで來た時腰の手では内山氏の家が燃るのが見えた腰田の中に居た妻に佛壇を出したかと云ふと本尊樣だけ出し申したと言ふそれでまあよかつた心がゆるんで慾にも動けない、大きな火の子がバラ〳〵落て來る妻は蒲團の上に落る火の子を堰の水をもて消して居る時、旋風襲ひ來り、アッと云ふ瞬間、襖一本グル〳〵と空高く卷き上げ椽は外れてグワラ〳〵見る間に坂田氏の水小屋へ打付けて折て燃えた、あゝ偉い事になつたな先刻敷物の下に置た札は燃えたで有らふこんな事を思ひ乍ら家の燒る有樣を見て居た何處からか東福寺表具屋がトタンの柄杓のエビツになつたのへ水を汲んで來てトンダ事でしたな……まあ水でも飲で元氣を出しなさいと、水の器を出した中に燃ほこりの浮んで居るまゝ口を付けて飲んだ渴いて居る時故、味は甘露で皆飲みほした、元氣が出て來た表具屋は言つたあなたは此風の激しいのに風上の火元へとんで行くとは余り考なしじや有りませんか、といやはや何ともかんとも言葉なし、暫してそうでしたな……風は益々激しい見る〳〵内に近所の家は皆眞赤に成る未だに消防手も來ない火の燃る所に人間の見えないは一層心細傍ものだと感じた表具屋も何れへか姿を消した本家の方はドーダかと案じて見たけれど煙が靡いて一向見えない裏の春吉氏の土藏だけ火の中に白く建て居たよく見ると屋根のグシの邊から湯氣の立つ樣に少しづゝ煙が見ゆる其煙がだん〳〵大きくなると忽ち火がドシツと出るなり風にあをられ遂に燃て仕舞た是で近所に建物は一つも見えない空は曇りで何時頃だか分からない此時腰の手の方へ火は移て行た。裏の春吉氏が來

た是から火事の見物をした。自分達の方は燃て仕舞てヤケに成つてだ、先づ山田行太郎氏の家は瓦屋根で何所から火が付たか少し煙が出ると見る間に倒れた土藏へ付た又火は飛で寛治氏のガゲへ付た又大屋根へ火の子が飛で來た忽ち燃て仕舞た行太郎氏の土藏の北の窓からは眞つ赤な火が六尺余りも吹き出て中々物凄き事言はん方なかつた……其内に漸く東の側は燃え盡して火勢は衰へ本家の土藏も見へる樣になつた漸く親戚や知己の人が見舞つて來た各所の消防手が隊を成し來始めた中にも屋代消防組のマトイが人目を引た燒け殘りの土藏を目懸て活動されるのだそうな此の時赤十字の旗を立て救護班の看護婦數人と南原の堀醫師が來られた妻は其時手の負傷を繃帶して頂いた見舞の人は入り替り立替り腰田の中に避難して居る所へ集て下さつた。今お宮が燃て居ると云ふ犀口がもえたと云ふ誰それが見へないと云ふ、中々怖しい噂ばかり既に日は沈んだ、風は止まない休は寒くなる諸方から握り飯や酒の見舞が來る益々寒くなる親戚の情で綿入を惠んで貰ふた「まあ酒でも飲んで元氣をお付け、飲むに器と云ふものは一ツもない箸もない、たそがれて來てもマツチも無い蠟燭もない本家の長屋へ移る事になつた重計りの荷物なれ共、中津の實藥銀行員の方々のお蔭で運んで頂いた不意の事であるから敷物も何も無い所へ本家と自分と二家族が這入た庭には東福寺の消防組が警戒をして居る、あたりは一面泥水でグシヤ〳〵して居る見舞人の出入する門の側には持出された品物が積まれて入口を狹めてあるから中々出入の雜踏な事云はん方もなし中には薄暗き提灯を吊して燈火となして見舞の人の受をして居ると近親の人々も狹い中へ這入る午後十時頃になつても別に空腹とも思わない又喰べる氣にもならない先づ自分は燒け跡を一目見たいと思つて十一時頃密に拔け出して北組の方へ向た道ばたは皆一面黑くなり所々から煙が出て居た、村社の御神木は卅尺も高い所から火を吹き出して居て中々物凄い消防手も手の就け樣もないそうだ、万年河原の森和十郎氏の燒跡迄行た此處で立ち留まつて全部の燒跡をつく〳〵と眺めた時感慨無量で有つた歸りに村の中で玄昌寺と書いた提灯が見えた傍へ寄て見れば最早や小布施の玄昌寺から親戚の叔母を送り乍ら見舞に來られたのであつた叔母も驚いた、家族の者は何所に避難して居るかが判からない、漸く尋ね付けた、田圃の松坂氏の家へ見れば二家族の人達が此家に避難して居られた。叔母さんや和尙さんに分れて自分の避難所に歸つた、此日の事に就てまだ色々の事はあるけれ共何分口で云ふ半分も筆がまはらず惜しくも此れで擱筆します。

大火に際して

罹災者　瀧澤もと

あの廿日の事はどうして忘れられませう激しい南風は吹て居ましたが陽氣が暖かでしたから下着一枚で西の腰田に苗代の手傳をして居ました火事だと云ふので夫は南の方へ飛で行きました、どこのお宅の火事だかあんなに風が吹いて危い事だと思つて先づ戸締をして居りました其時、榮一は學校から歸つて來まして南の方は大變燃て居るし今精米場の家も燃て居て僕は一生懸命で飛んで來たのです、それで僕の家もとても助らないかも知れないと人さんが話して居ましたよ、そうかやそれでは子供は遠くの方へ逃げて行け、まあどうしようと困て居りました所へ三枚橋の表具屋の東福寺敬男さんが駈け付て來て下されまして直ぐ羽織を脱いで繩はどこに有ります梯子はどこに、ネコはどこに、風上から火の子はどん〳〵飛で來ます、家の屋根に梯子をかけて腰繩を付て濕らしたわらを持て屋根へ登て吹き付る火の子を懸命に消して下さいました同時に前の蠶道具の這入て居る物置の屋根に大きな火の子が飛で來て見る間に燃え上りましたから大變ですサアどうしてよいか妾は躰がガタ〳〵慄へて居ました、其時ですす屋口の酒井屋の御主人が駈け付て下さいまして、氣を確に持ちなさい、しつかりしておいでなさい、と勢を付けて下さいました、表具屋さんと共に其火を消す事に御盡力下さりましたが火は益々風に勢を得ましてとう〳〵物置から土藏へ吹き掛ます、酒井屋さんは荷車やら何かと西の田へ挽き出して下さいました妾は土藏の戸を開けて少しでも何か出したいと思いまして、錠の穴へ鍵をさして見ましたがとても怖しくて中へ這入ても火を吹き付けられては出るにもなるまい人樣が這入て下さつても危ない、とこんな事を思て居る内に火は焔々として戸口へ吹き掛ます、もう據處ろ有りませんトウ〳〵鍵を抜て庭に抛げ捨て直ぐ樣家の裏へ廻つて雨戸一本押し開けて座敷へ這入りました時は最う天井がまつ赤に見えてピシ〳〵燃て物凄き事よ本尊樣や財布や懐に入れたり手に持つたりして、裏庭でころんだりして飛び出しました、續て表具屋樣や今一人遂に見知らぬねづ色の洋服のお方も大層お手傳い下されました、此時に川中島の床屋の新貝樣にも大層御盡力を頂きました其他の方はどなたか覺もありません最う一度中へ這入らふとした時です洋服の方が奥さん思ひ切りなさい危いからそう云て下さつたので妾もけがも無くて濟だと思ひます忽ち家はまつ赤になりました此時、隣の家も裏の家も火が付きました妾は西の腰田に避難いたしましたが財布はどこいか落して仕舞、出して頂いた物も筆塚の傍で燃えました其内に人樣も來て下さつて色々お話を聞きますと先刻の洋服姿のお方は長野の刑事の方だと誰かが云はれました成程自轉車には長野と有ましたが番號を忘れましたのは誠に不束でありました最う火がおだんでから自轉車の傍にお見えになりましたから夫と共に先刻の御禮を述べますとあなたにおけがは有ませんか、余り御婦人の一人であわて〻居らる〻のを見て御氣の毒で通り越す事は出來なかつたと。其内に氣もゆるみましたですから手の痛みを感じまして一寸見ると右の手の人指ゆびの根元が一寸位負傷して居りました、どうした時に傷めた物ですか、幸に赤十字救護班の方がお見えになりましたので繃帶をして頂きました夕方本家の長屋に避難いたしましたが莚の上に皆樣と座つたまゝ種々な事を胸に描き出して遂に一夜中眠る事が出來ませんで短き夜は明けました。

其の日の憶ひ出

罹災者　庄田茂雄

大正十五年四月二十日。其の日は私共の終生忘れることの出來ない日である。僅々二三時間であの懐しい小松原、數十年來居住した親しみの深い歴史ある我々の家を灰燼に歸して、舊態を留めぬ燒野ケ原に化した日である。立ちどころに衣、食、住、に窮するといふ物質的にも精神的にも大打撃を被つた日である。如何にして忘れられやう。

當時私は小縣郡鹽尻村にゐた。恰度其の日は村社の祭で午前中兒童を引率して、中嶋部落へ神社參拜に出かけた。風速は何メートルだつたか、可なり強い殆んど暴風に近い樣な風が吹いてゐた。幟の竿が折れさうなので、ずつと引き下ろされてゐた。神社參拜が濟んでから、同僚の家で暫らく遊んで歸つた。午後は下鹽尻のお宮にある角力を見物しようと誘はれた。然し北鹽尻の驛近くまで來ると、何だか頻に家に歸りたくなつたので、午後一時何分かの下り列車に間にあつたから、川中嶋着二時少し過ぎで歸つて來た。全く虫が知らせたとでもいふのであらう。

犀口まで來ると、南の方から煙が棚引くのが見えたが、瓦燒きの煙と!のみ思つて、深く氣にも留めなかつた。家に着いて着物を着換へる間もなく警鐘亂打、素破と思つて出て見ると、南組である。さては先程見た煙は

火事であつたかと、取るもとも取り敢へず火元の方へ走つた。全く無中である。中組瀧澤國治氏の邊まで行くと煙で向ふへ行けさうもない。火の子は風で飛んで來る、瞬く間に同氏の屋根に燃えついた樣な始末、直ぐ同家へ飛び込んで疊を出したり、米俵を出したりした。馴れない事とて、米俵を出すには隨分苦勞をした。其の中に裏の薪物に燃え移つて、風に煽られて凄じい勢で座敷へ吹きこんだ。最う駄目だと思つて引揚げた。次いで野口龜作氏方へ行つて、手傳はうと、確炬燵を始末して出した樣に記憶してゐる。今日から考へれば、滑稽の樣に思はれる、彼れ此れしてゐる間に火は早や飛んで、坂田袈裟治氏の雞小屋に燃えついて盛んに燃えてゐる。腰の手を襲つたら、到底助かる見込みがなからうと思つて、始めて家にかへつた。家內は氣が氣でなく私を迎へに來てゐた。共々歸つて表戸をあけて漸く座敷にあつた物を出し始めたが、子供は居ないし、二人だけでは氣のみあせつて、思ふ樣に運べない。此位なら早く手を廻はせばよかつたと思ふ、が誰しもよもや此邊までは來ないとのみ思つてゐたのである。

今日多少なり殘つた品々の多くは、知人や近村消防の方々の御盡力に依つたものが多い。斯くして出したものも火の手が猛烈で燃え出す始末に、再び三度東の桑畑の方へ移した。

此の間にあつて、先祖の位牌は燒いてはならぬと考へ、裏座敷の雨戸を叩き懷はして家內に持たせて避難させたことゝ、多くの人達が土藏へ這入つてくれたので、出るに困る樣な事があつてはと、主屋から土藏に通ずる廊下の壁を打ち破つた事は、深く記憶してゐる。意外の力が出たものと自分ながら驚く。其の後は全く手の出し樣もないから、東の方へ避難して、あの紅蓮の焰になめられて行く我が家を傍觀してゐたのみだつた。村社が燃える物凄さ、右往左往に行きかふ人々、何といふ悲慘な光景であつたか、憶ひ出しても身の毛がよだつ。

生憎又あの晩の雨、運び出したものを更に隣の畑の葡萄小屋へ運び込んで、其の傍にまどろみ自分の體が半分濡れながら一夜を明した事など、もう書く元氣もない。

——○——

大方の御同情と、村當局が獻身的に救濟に從事された事は、感謝に堪えない。星霜四年漸次復興の緒につきつゝあるが、前途は遼遠である。十年を費しても舊態に復することはむづかしいと思ふ。私は嘗て小縣郡神科村小學校が全燒の災に遭ふや、學村一致三年間といふものは非常な節約を勵行し、緊張した意氣を以て復興に努めた結果、舊に倍する樣な校舍を新築したことを實際に見て

大に感動させられた。一校舍の燒失にすら尙且つ、斯の如き努力を要する。況んや全區殆んど家屋、家具、家財を烏有に歸した我々に於てをや。然し喉元過ぐれば熱さを忘るゝとか、時日を經過するに從つて此悲慘事を追憶するの情が薄らぐのも無理もないことであるが、我れ人共に戒むべきは荒怠の心である。非常な勇猛心を以て此難關を突破して行かねばならぬ。要は唯勤勉と努力にあり、此の心を以て心としたなら、禍を轉じて福とすることも强ち無理でもあるまい。猶具体的方法に至つては傳統的惰性的な我々の生活を改善して行くことも必要であらう。これ等は既に村當局によつて規定された事でもあるから言ふを要しない。這回の火災史編纂の如き、永久に此災厄を記念すると同時に一面此の心を常住忘れぬ樣にと、暗に警告された樣にも思はれて、感謝の外はないことを一言して筆を擱く。

南信視察旅行先で火災をきいて

坂田袈裟治
山口新太郎

大正十五年二月本村歲入歲出の豫算中に村役場新築の提案あり全員贊成可決確定した、そして其前提として南信地方の優良町村視察を協議會に於て確定。

當時收入役岡澤素一郎　村會議員野口藤伊　野口權內　平林竹二郎　瀧澤主計　仁科周平　坂田袈裟治　小田切良作　馬場林治　小林松助　小河原欽治　山口新太郎の十二名は（內岡澤宇吾治氏は大正十四年九月死亡）一團となつて愈々大正十五年四月十七日午後十二時發で篠ノ井驛より車中の人となり、列車の進行につれて眠氣醒しに、左を傾ける者、得意な談話に鹽尻驛に着いた、二時間の停車時間を途中下車驛前の藤金茶亭で休憩の上、小野、辰野と伊那電に乘り換へて伊那町役場に至る淸水町長より懇ろな待遇と數多の資料を戴いて、赤穗町役場を視察し福澤町長より有益な話を拜聽して下伊那郡に入る座光寺村で元善光寺へ參詣續いで、天龍の奇景を探り其夜は飯田町へ引返して常盤館に宿泊す。

四月十九日

一行は諏訪の盆地に向つて出發、川岸村、平野村と視察して上諏訪の官幣大社諏訪明神に參拜、途中湖上に寫る富士の靈峰靜な波に浮くの美しさは格別であつた。參拜人名簿に記名などして早い者、應揚な者で自然統制は欠き旅情も從つて不愉快なこともあつた、無事上諏訪に宿泊。

四月二十日

早朝旅館を出發、舟で下諏訪に向ふ、船中偶々相馬節を唄ひ出す者、左を傾ける者など出でゝオールの音に劣らぬ騷ぎであつた、秋の宮に參拜し、春の宮に參拜せんとする時一陣の烈風に荒れ出して來た。或は此風が我村の大火の兆ではないかと思はれる時刻も同じだ諏訪明神の神知らせなのだかつた。長地村役場へ行つた風は愈々猛烈になつて諏訪の空にも黑雲が大入道の樣に現れ、龍卷は起り、其物凄さは筆舌に盡せない。長地役場を辭して一行は午後六時十四分で皈村すべく四日の視察も無事に終り、下諏訪驛に至る途中小河原欽治君は途中で土產を買ふべく、外套と帽子を持つて行つて呉れと賴まれた儘、何氣なく驛に急いだ、小河原君は未だ見へない、列車はもう構內へと辷り込んで來た、小河原君を殘す一行は皆乘車したが、氣になるのは小河原欽治君だ、汽車は遠慮なく發車したトウ〳〵乘り遲れたなーそれにしても帽子と外套は癪にも障るが又不自由だろう、それにしても今度の發車は九時十四分だ、三時間もある譯だ、汽車は岡谷へ着いた、一方小河原君は列車と一行に遂遲れて終つた思案の結果、鐵道電話を以て自分の近所から篠ノ井驛に二三名勤務して居る者に今から出た序だから東京へ廻る豫定である依つて只今六時十四分で下諏訪を出た列車に我村の視察團一行が居る筈篠ノ井驛に下車するから其人々の中に拙者の帽子と外套を賴んでおいて乘遲れてしまつたのだから、すぐ帽子と外套は東京の何處々々まで御送附を願ひたいと電話した。返電に曰く、帽子や外套處の騷ぎぢやない小松原は大火にて七八戸を殘す外全滅である早く皈つて貰ひたいとの意外な飛報に呆れ果て、時を移さず先には出たが、夢にも知らぬ先發一行に此由知らせたい、ついては攝尻驛へ電話して驛員に賴んだら間に合ふだろうと早速攝尻驛へ電話した、一行を乘せた列車がホームへ着くや驛手が各車毎に更級郡の共和村の村會議員さんは居りませんかと呼びながら尋ねて呉れました。ハイ此處に居りますが何か御用ですかと濟したものであつた。唯今小河原と云ふ御仲間の方から電話がありまして共和村の小松原部落は大火で全滅だそうですから何處へも寄らず又私を待ずに直ぐ皈る樣に申しました。夢にも思はなかつた此悲報に一同は顏見合せて、信じられもしなかつた（實を云ふと松本で途中下車して今夜は淺間溫泉で一泊の豫定であつたのだ）詳細は不明だか此風だから南より火が出たに相違ない樂しい四日の旅行も、薄氷の上を步むが如く戰々胸々卵を抱いて盤石に向ふに似て思ひはあれへと走馬燈の如く落付かない。松本驛へ着くや否や、瀧澤主計氏は早速電話を以て、篠

ノ井警察署へ照會した處、案に違はず、小松原七八戸を殘す外全滅の返電であつた、未だ信じられない誰云ふとなく七八戸燃へたと云ふのゝ誤聞ではないか如何に烈風でも全滅なんて事があるものかと種々に考へ出された。再び汽車は進行し出したがズルイ〳〵全く此時の心中は夜は愈々更けて筑北の嶺間部は山徒らに迫り邊りは愈々暗く列車は益々のろい、車中諏訪明神の御籤など取出して卽呪法をして一体何處から發見して事實何戸燃へたなどゝ、尙も信じ難く中程より發火して中組以北は全滅だなどゝ云ふひいき目に何れも考へられた。それだけ氣が揉めて飛べる者なら飛んで見たくなつた、すべては愚痴に終つた、長い冠着の隧道も惱みの內に通過して稻荷山驛へと着いた消防手數名は荷物を背負つて乘り込んだ、何かあつたんですか、ハア小松原に大火災があつて只今私共は現場より組員の食糧を取りに來たのです部落の南端より出火して七八戸を殘すの外は全滅ですと、では愈々眞實であつたかと又も意外な事とて涙も出なく一揃に顏色は靑ざめて狐にでも騙された樣に氣が遠く頭が輕くなつて行く時には樂しみの得意を以て乘つた篠の井驛も今日は失意に悲しみを以て降りねばならぬと明日の變化の豫知出來ないことを悟りながら午後十時十一分下車致しましたそして驛前の飯嶋自動車を同情されて一路高張高く揭げられた臨時役場出張所へと駈つけたのでした。山紫水明にして信仰心高く平和な村は一瞬にして燒けた。出發に先立ち數多の希望と理想とを畫いて住み馴れた黑い姿の麥稈葺屋根を後にして皈れば一望燒野ケ原だ憶へば殘念なことをした。

（註）御兩人の寄稿同一のものに付二名列記せることを御承知を乞ひたい。

火事の想ひ出

罹災者　瀧澤すゝみ

嗚呼思ひ起す、大正十五年四月廿日午後二時、私の一生忘れる事の出來ない日であります、いや小松原の人々全体がそうだろうと思ひます此の日こそ小松原の大火災の日です。

當日の十一時頃母は生れた里へよばれて行かれ、私と父と二人に成りました。其時父は靑物市場に居りました。私は家に留守居をしながら着物を縫つて居りました其日には南風が大そう吹きトタンの屋根は今にもはげるかと思ふ位でした。こんな日火事でも有ればと心配して居りました。それから晝餉をすましてしばらく立つとガ

ン〳〵〳〵と警鐘が亂打されました。私の胸はぞつとしました、出て見るとひようしも惡く一番南の端の家から煙が出て居りました、其時父は一寸火元まで行つて來るから市場の方へ行つて居れと言はれましたから私は家の戸締をよくして市場の方へ行つて居りました。そうして見て居りますと、南の方の家の屋根から又も三四ヶ所より煙が出て居りました、折柄のつむじ風にて、里組部落から又も四五軒の屋根より煙が出て居りました、風は益々はげしく吹き、警鐘の音は益々強く打たれます。消防隊は加はりました、その内に早くも中組の三四ヶ所の屋根から煙が出てゐます。私はもう氣が氣でありませんから庭の神樣を一心に家が燒けない樣にと祈つて居りました。すると父が歸つて來て裏の戸をはずして家に入り佛樣に共れと神樣の小さな宮を持つて來ました早くこれを持つて上の畑に行けといはれて初めて私はそれを持つて行きました。後から父は書類の箱を持つてこられました。其時にはもう火は裏の家の所まで燃へて來て居ました。私は何か出しに行くと言ひますと、父はもう危ないから行つてはいけない、もしけがでもすればと私を留めましたから私は行きませんでした。それでも家が氣になるので見て居りますと、裏の物置の屋根の所々より煙が出て居ります、私は一心に神樣を祈りました、何うか土藏なりとも殘る樣にと一心をこめて祈りました。其の内に物置はどん〳〵燃へ揚り主家につきました。見る〳〵内に又も燃へ上り、風はます〳〵はげしく人間には何うする事も出來ませんでした。暫らく立つ内に物置の屋根が落ちました。それから土藏のがげに燃へうつりました、それから鷄舍が燃へ出しました、其時は近所の家は皆屋根が落ちて居りました、炎々と燃る焔は天を焦し、うなりを生じて居ります、それから間もなく屋代の消防隊が來て下され、そして土藏の火を消して下されました。其時母は中途で歸つて來たとみへて私を呼びました、私は母に何も出しませんが佛と神だけは出しましたと言ひました、母はもう仕方がない、お前達が達者で居た事は不幸中の幸であつたと言ひました。それからお寺へ行つて母に色々と火事の話しをしました。お寺には近所の人が澤山行つて居りました、それから皆の家の人々には親類の人や近村の人が澤山のむすびを持つて來て下さつて、それを皆で夕飯に喰べました。それから私はお寺の門の所まで見に行くと、實に焦熱地獄、唯火の跡が一ぱいぽか〳〵として居るきりでした誠に夢の樣でした。火事。其時間は四時間位、實に大正十二年九月一日東京の大震災と同じ位と思ひます。そしてお寺へ歸つてみますと大がいの人は泣いて居りました。

當時の想ひ出

罹災者　立浪秀光

去る四月廿日本村の大火災は今を去る八拾餘年の昔弘化四年の大震災以來の椿事にして山麓南北に縱走せる貳百の村落は最南端の松本和市方の小屋より出火し當家の叔母さんは兩手にばけつを携へア、困る〳〵と助の聲を上げつゝ水をくんで走る有樣は恰も狂へる者の姿でありました見る〳〵内に其れ火事よと數多の人々集り盡力せしも其の甲斐もなく折柄の吹き狂ひたる南風にて五百の家屋は見る〳〵猛火に包まれ僅か貳時間にして北端村社の社林にて止めぬ。さしも永年の間に築き上げられたる村落は一點其の跡を止めず只殘燒の樹木瓦あるのみ見るも凄慘の有樣でありました地藏堂觀音堂一つは南に一つは北部にありしも遂に此の火災に類燒して私共は一物も取り出し得ず只佛像を脊負ふて避難したる樣は實に哀れでした夜に到り高い所にて下を見下せば丁度火の海の樣にて尙晝の燃え殘りがボカ〳〵と燃えて居ました此の時は困ると思ふのみ驚いて涙も出ませんでした嗚呼思へば廿日の朝もこんな事になるとは思はず。いそ〳〵しく他家へ行きました本當に浮世とは此の事でせう。

◎火事は消えても　恨みは消えぬ
　火元火元と　孫子まで

當時を追想して

罹災者　宮本義廣

私は大正十四年十二月十日に朝鮮會寧歩兵第七十五聯隊に入營致し日々豆滿江を隔て支那間嶋の山野を眺めつゝ永營庭や練兵場で習れぬ練兵にて多忙に暮らし其年も暮十五年の初春を向へ一名ホネモチを頂き一月二月三月も早過ぎて四月二十二日となりました其朝に限つて鄕里の友達の事や家の事を思ひ出し心淋しく感じてたまりませんでした家の事等今迄一寸も思ひ出した事は無く軍人會長殿や村の人々が皆良くやつて下さると云ふ手紙を見て居りますから心配する事も無いのに不思議でなりませんでした心に安じながら演習に出て居りました午後四時頃の事でした丁度演習地迄二年兵殿が二人私を向ひに來て下さいました其の時私の胸はぞつとしてすぐ聞きました二年兵も本當の事は話してくれませんでした何んだら

うと安じながら中隊に歸つて見ると中隊長殿が私の所に村長樣から電報が來た之れを見給へと私に見せて下さいました私は取る手遲しと讀み下しましたすると村丸燒け私を歸してくれと云ふ文面でした、私は只夢の樣な心持で一言も出ませんでしたすると中隊長殿は心配するな萬事は私が心配してやると云つて下さいました私は其の言葉は何より力を得た心持ちで何町とちかつて家の離れた村の火事丸燒と云ふても瓦の建物は皆殘つて居る事と思つて居りましたが心に懸るのは祖母の事でした數日中隊長等が種々と心配して下され其の上御見舞まで頂いて漸く四月二十八日の出發でありましたそうして海上の道中無事に篠の井驛着五月二日午後三時二十分其れから急いで村の入口迄來て見ると思ひの外の村は全部燒野ケ原で去年出發の時の思出とては何一つ有りません只目に入る物は柿の燒けたのや炭の山やきら〳〵と光る家根のバラックばかりでしたので驚かずに居られませんでした其から家に來て見ると祖母は私を見て大そう喜こんで火事の事や皆樣に良くやつて頂いた事や色々話して下さいました只私は嬉しいやら悲しいやら口には申す事は出來ない心持が致しました何んとなく涙が出るばかりでした其れから日を經て歸隊して中隊長殿の內に御禮に行きますと私を慰さめて下さいました當時の中隊長殿は山口縣豊浦郡清末村の出身で山澤大尉殿で有りました。

犀南の新生

罹災者　吉岡　隆

天譴か我知らず神意か我知らず驚人燒地とはかゝる事を言ひたるかと思はるゝ計の四月二十日暴風吹荒び恐れ怖く午後然も二時火事だと叫べば最早大災害の惡魔に襲つて時餘を出ずして先祖傳來の財寶と倶に百五十餘戸は灰燼の大修羅場と變じ豊で平和な村は未曾有の燒野が原と化し跡形も無く失て了つた其慘狀は見る者をして涙は滲み出で罹災者は唯悲嘆に暮るのみであつたが焦土に立て心と心を叱咤せば小松原は其慘たる下より新しき希望の芽は崩へ染てゐる中に元氣の溢れてゐるのは燒跡に聞ゆる斧の音計ではない裸一貫より叩き興そうと云ふ意氣旺溢した眞の叫が如實に表現されてゐるさしもの此大火災も小松原區民の魂までは燒切れず火災後に受けし我等の精神は一層涵養され其意氣待つ可き物がある罹災者は意義ある復興の第一歩を踏み出せば他村民諸氏は驚異の眼を以つて見張りし程の振興振は之偏に罹災者一同が此の大禍に處して堅忍不拔の精神を持し鄕所强固であつたからであるからより一層奮勵して不斷の努力を惜まず天の與へる此大試練に合格すべく勇往邁進せば軈て其精華疑なし見よや〳〵質實なる我が區民の雄々しき新生への躍動を見よや。

鄕土の大火を顧みて

罹災者　野口孝夫

回顧すれば、大正十五年四月二十日午後二時、我が終生を通じ忘れんとして、忘るゝ能はざる大厄日なり、當區は如何なる因果により、斯る災禍を蒙りしや、其の慘憺たる現狀は全く其の想像に餘りあり、然れども幸なるかな、此の大厄に際して、近接各町村消防組、竝びに各種團体の必死の御盡力を始めとし、縣下及び遠き各方面よりの御同情を得て、今日の如く、着々復興の緒に著きつゝあるは、各位の御援助の賜と、深く感謝に堪えざる次第なり。

當日は朝より稍々風ありて、午後一時頃より其の風力を增進し、心乍らも斯る日には「火の用心」肝要なりと思ひつゝ、田の耕作にと急げり、程なくして南方に煙見ゆ、之れ多分瓦屋の焚火ならんと思ふと、同時に警鐘の音がせり、嗚呼、亂打！、其の儘直ちに火元にと急行せり、火は風に乘じ、火元は勿論、附近一帶は火の海と化し、消防組と協力し、防火に從事せるも、如何にせん火は烈風と共に、點々として飛散し、各所より火は一時に燃え上り、全區は瞬く間に猛火に包まれたるが如し、其の刹那我が家は如何と思ひつゝ、煙の中を苦しき思ひにて、自宅へと馳け付け見れば、既に其の時機遲くして、家は猛火に煽られ、如何とも爲し能はず、自然の力に對しては、到底人力の及ぶ所にあらず、眞に夢か幻ろしかの如く、遂に類燒の厄に遭遇せり。

就中類燒中最も勿體なきは村社にして、幾年月の間氏子の信仰を集めたる御本殿、拜殿を始めとし、御神門、玉垣等全部烏有に歸し、風吹く度に、千代の音を立てたる御神木竝に、松の森木の大半は燒き盡されたり、幸にして御遷殿、御寶庫は其の厄を免れ、御鳳輦は御遷殿に御安置し奉り得たるは、不幸中の最も幸とする所なり。

本火災の燒跡は宛ら、焦熱地獄の如くにして、翌日に至るも、尙火煙に包まれ居れり、其の間各消防組の目覺しき活動により、漸くにして鎭火するを得たり。

其の後、一般各自の必死の努力によりて、各々住宅、其の他附屬家屋の建築を急ぎ事業に差支なき程度に、進渉しつゝあるは、嬉々として止まざる所なり。今後共に

共に最善の「ベスト」を注ぎ、産業の進展を計り、共存共榮を「モツトー」として新生の鄕土を、建設せん事を期待する所なり。

一、大火災に遭遇して

罹災者　久保田庄司

火災！其れは何んと云ふ恐怖な且傷はしい言葉なんだらう若し我等の生活上に此悲慘なる禍ひさへ無かつたら何れだけか安逸の夢を結ぶ事が出來るであらふに、玆に我等は不慮の大火災に遭遇して併して心身共に其苦痛を知り初めて眞に火事と云ふもの丶恐ろしさを一層强く感じさせられたのであつた。

四月廿日！其日こそ我等罹災者の終生忘れる事の出來ない呪ふべき大惡日である。

長閑な平和な春を送りつ丶他村から羨望の的とされた我鄕土に突如として起つた一火塊からよもやあれ程の大火災が生じ樣とは思わなかつた一瞬にしてあの美しかつた鄕土は灰燼と歸しそして我々の希望も理想も全部を破壞したのである昨日までの安らかな夢路、昨日までの爛漫たる櫻花もこの窮りなき變遷に皆過去の樂しみでありの印像となつたのである。かく晝は唯驚怖の憂目を見夜は唯一夜を宿る蔭さへも無く燒き盡されて路頭に迷ふ老若男女彼方此方燒け跡を彷徨し果は田圃から見つけ出した鳩傘一つを頭から冠つて未だ冷え切ら無い燒け石に寄掛つて一夜を忍ぼうとする罹災者宵暗迫り雨は雷と共に降り頻る、寒さと疲れとに如何とも忍び得ず漸く燒け殘つた家の軒に淋しく一夜を震へ明かしたと云ふ等自分が後で耳にした悲慘事の中の一つのエピソードであるが之等多くの罹災者に比べて矢張り同じ罹災者である自分の當夜を想ひ起した時、半燒けの憂目には遭たけれども降りしきる雷雨も知らぬほどに隣家の同情に依つて寒さも左程に感ぜず一夜を明かした事は不幸中の幸だつた。

慘虐な自然の與へた大火災それは余りに大きな余りに無情なる戒しめだつたのである然し唯是は我等罹災者のみに與へられた戒めではない世人の總てに見せしめた一大敎訓なのである總ては自然の仕業である我々は自然の前に如何とも成し能はなかつたのである、金圓で求める事の出來ない幾多の財寶も唯灰燼と歸してしまつた。

此上は一層の努力と節約とをもつて心身共に復興に急がなければ無らない。

火事は恐ろしい火は恐ろしい、それは罹災者のはじめて深く痛感したことである。

此戰慄すべき大凶變に遭遇した罹災者の自分等に絕えず其當時が思ひ出されるのである。

二、其の日

大火災！時は大正拾五年四月廿日午後二時突然に起つた大變事である。

長閑な平和な春を毎日多忙に送つて來た、今日も朝から蠶室の排水工事に親子三人で働いて居た、之も濕氣の爲に惱やまされて今年は明の方だとの易學的觀念から數日前より仕事に取掛り最早八分通りも出來て最後にコンクリートで固めて居たので有つた。晝前は昨日に變らない平和な春だつた、泥に汚れるを厭ひ部屋の隅から見付け出して着た在學當時のぼろ服も脫ぎたい程の暖かさだつた。中食も勞働の御陰か滿腹に貪ぼり、形式ばかりの炬燵に疲れた足を投げ出して一休みした、そして午後の仕事の計畫をし乍ら澁茶を飲んで居た時だつた。突然警鐘は亂打された。やあ火事だ！村だ！人が飛んで行くぞ！持つて居た茶碗を投げ出して戶外に飛び出たけれどこの家だか一寸も判らない、唯々人は南へ〳〵と飛んで行くのみだつた草履のまゝ飛び出した、自分はゴム足袋に穿きかへる暇もなく、消防に急ぐ多くの人々と共に走つた。

『やあ材木屋だ』午前に變つた此の暴風で目深く冠つて居た帽子さへも幾度か吹き飛ばされた帽子をヅボンのポケットに捻り込んで火元へ飛び付けた時は最早火は母屋に移つて居た、紅蓮の焰とでも云ふか其荒れ狂ふ樣叫ぶ人何んと云ふ悲慘事でせう、弱き女性が重い簞笥を擔ひ出さんとする時「そんな重荷するより抽斗だけ出して持つて行け」と云つた時の罵聲がまだ强く印象として殘つて居る、火の爲旋風が生じる、最早火元には居られ無い、辛ふじて西側に出た時分飛火したばかりの松板幸氏の物置、それつと消火に共力した、其時飛んで來た小出君に『おい其馬欠で水を』と叫びながら北を振り返つて見た時早くも久保田安之亟氏の家が猛火に包まれて居た一言も云はずに其處を飛び出して馳付けたけれど、もう手の付け樣も無かつた是れぢや自分の家もと懸念した、上道に出て見ると我が家の屋根からも黑煙濛々と吹いて居る「噫自分の家も」其時足は何處を駈けて居るのやら全く無意識だつた、座敷へ飛び込んだ時、もう天井から火の子がヒウ〳〵と吹き出して居た噫もう駄目だ然し一品でもとの欲望から唐紙等無理にはずし、掛けて有つた着物等を前の土藏の軒下に持出したが返つて土藏を半燒けにした導火線となつてしまつた。奥から飛び出して來

た父も裏庭に少し放り出した樣だつたが今は詮方もなく「さあもう皆んな逃ろ早く前の田へ」此言葉に唯何物も持たず全く着の身着のまゝで飛び出して仕舞つた。噫あの逃げた時何故一品なりとも手にして逃げ出さなかつたものだらう、今になつて度々斯んな事が想ひ出されてならない。

過去十九年間我が家と呼んだ懷かしい家がビチ〳〵と猛火の爲に嘗め盡されて行く、そして火の子が大旋風と共に冲天に渦まき揚る何んと云ふ恐しい悲慘事であらう、今にあの離れた籾藏も燒かれて仕舞ふのだ窓から今に煙が出るかも知れない總ては破滅だ駈付けてくれた親戚知友の人々の慰問の言葉に勵まされて、唯猛火の恐しさと戸別的に落ちゆく棟數を見せつけられて一時に燃え一響に倒れし其機械的な暴火の動作に唯戰慄せざるを得無かつた風は益其早さを增すばかり旋風は起る、ヒューゴーつと其のすごき音生きながらの地獄だ荒れ狂つた暴風は火の子を飛ばして來る、家は眞先きに棟が落ちたけれど籾藏はまだ何うやら突立つて居る、まだ煙も出て居ないか、それでもと懸念しながら土藏のそばまで行つた時今里の二三の方が馬欠で水を掛けながら「君此の家の者か此土藏助かるぞ」と云ひ乍ら眞劍に消火に務めて居た、勇氣百倍した、此時の嬉しさこそ實に云ひ表はせない。小さな馬欠で數間離れた池から運ぶ水は微々たるものだつた、けれども火の中に穩れて居た垂木も炭木の樣ふになつて現れた。丁度其時消火の爲に猛進して來た塩崎村平久保の消防組の援助を得て辛うじて全滅を免かれた然し戸が開かつて居る、中に積んである俵がむき出しに見える誰が開けて中を見てくれたのかと思ひながら這入つた時に戸は燒壞されてゐた、慌てゝ少しばかり出した物も後形もなく燃えて終つた。

不思義？それは土藏と簑である。と云ふのは土藏の垂木は桁まで燃えてしまつた、其の桁の處へ昔使つたと云ふ毛簑と自分等が子供の時視つて貰つた處の節句に飾つた鯉とが、吊して有つた此簑と燃えた垂木とは一尺と離れて居なかつた簑は毛だから最も引火し易いのだ若しも簑に火がついたなら此土藏も當然灰燼したのであるのに簑に火がつかなかつた爲土藏もこのまゝ類燒を免かれて之が唯一の記念物となつた、實に神が與へて下さつた助であつた。僅か二時間余りで此美しかつた鄉土を烏有灰燼と歸してしまつて漸く鎭火した時悲痛な空氣に閉された此村へ集ひし消防隊、青年團、救護班或は見物人で廣ひ中央道路も立錐の余地も無い程だつた。昨日までは春に相應しい大厦高樓の鄉土も今日は燒ケ野原として荒凉たる悲慘な鄉土と化してしまつたのだ、余りに極度の變

遷に驚愕せざるを得ないのだ。唯自分は前後を忘却して燒け殘つた土藏を守り乍ら見舞の人々に謝辭を述べて居た。

陽は西山に落ちて親戚の御同情に依つて戴いた夕食も口に頰張つてみたけれども腹へ送るだけの勇氣も無かつた愈々寒くがたゞ〳〵と震ひて來たけれど着たいに着物が無かつた。親類の人の溫き同情に依つて惠まれた其着物こそ今考へれば笑可しくもあり又慘めな風采でもあつた。それは小さい乙女子の着た赤い八ツ口の取つた着物だつた、寒さに苦るしめられて居る自分に取つては色や模樣を云々する時ではなかつた、小さくはあるが溫き着物で身を包み親戚の人と燒け跡を一巡した。時に唯驚きの他無かつた諦めの爲に一廻り巡つた罹災者が歎き語る事は皆同じだつた親戚の人には一先歸つて戴いた其後は唯淋しい沈默が續ひた夜は漸々更けて隣家の同情に依つて冷たい燻れ臭い土藏の中で夜具にくるまつたが何うしても眠れなかつた、降りしきる雨と電光ばかりを氣にして苦るしい一夜を明かした。

思ひ出の一つ

罹災者　野口敬一郎

四月廿日　追想すれば皆痛恨事のみであるが其中に唯一つ僅かに滿足と思わるゝ事がある。それは吾等消防手が職務上最重要とするポンプを猛火の內より安全地帶に搬出し幸に燒失を免れた事である。然しタトエ職務上とは申せ自分の家の類燒するのを近村の親戚や友達等が防火に御盡力下さつたも知らずに自己滿足等と言つては誠に申譯もないのだが家は燒けても責任は果した其の事が今でも當時を回顧する時又は消防事務に關係する度何時も其時の有樣が思ひ出さるゝのである。

場所は松坂幸君の庭、座敷の前である。元來此處の家邊で食ひ止めねば村全体が危險になるとの見地のもとに消防組の主力を松坂君の家に集め必死に防いで居たが人の集りが非常に惡ひ是れ程の火事にどうした事かと不審に思つて居るうちに一人減り二人減り、スグ前の福井莊さんの家が倒れた頃は殆どポンプの操作も出來ぬ程小人數となつて了つた。

時も時南側に積まれてあつた藁鳥がバツト燃え上つた

誰れも彼れも一時に池に逃げ込み水中に身を伏せて熱火を避けた、ト此時當時の小頭瀧澤茂君、確か茂さんの聲だ『なんだ消防手がポンプを置いて逃げるとは』ト叫びつゝポンプの方。煙の中に飛び込んだ福井共一郎氏も續いて駈け出した。大きな松坂君の家が紅蓮の焔となつて近づくも危險だ、誰れかゞモウ駄目だ〳〵と言つて居る。法被がズブ濡れだから燒ける心配はない泥池から上つて數歩、後を振り向けば瀧澤忠義。瀧澤與喜惠。瀧澤芳介君等が續いて來られたので、勇氣百倍火の子を浴び煙にむせびつゝ無遮苦遮にポンプを池中に引摺り込んだ。何ンセ百貫近くもあるのだから僅か四、五人でアノ泥深ひ池中を起きつ轉びつ、ソレコソ眞に死物狂ひで漸く西の山裾まで搬出した。ホツト息する所え飯田益男瀧澤幸治吉岡隆君等がホースや吸水管を引張つて來た。皆ヘト〳〵になつて居るので兎に角一休して又働かうと一同上の松林え上つて行つた。見るとはなしに見れば是は又何んたる事だ。腰の手里組から北組まで一面に眞赤だ。

それから何處を何う歩いたか夢中だが山田常左衞門氏の前に來た時同家の屋上から『早く行け、家が駄目だゾ今頃まで何處に居た』つと呼び掛けられた、山田富治郎氏だつた。

自分の家から赤い火柱が立つて居るのを見て又一飛び……

最後まで火元に居た僕達數名（奇蹟的に類燒を免れた瀧澤芳介君は別）は數多い罹災者の內でも其の被害殊に甚大なりしは蓋止むを得ない譯だが、然し池を隔てゝ山の裾迄擔ぎ出されたポンプは果して無事であつたそして翌日より其處彼處と昨日と變らぬ姿で余燼を消す可く活動して居た。

（附記）突嗟の場合の事に付き盡力諸君の氏名記憶漏れ又は誤記あるかも計り難し御海容願ひ度し）

其の日の追憶

罹災者　福井本昭

僕の家には火事前よりの黑檀のテーブルが一個ある。一休これは誰が出したんだろう？誰の手柄なんだろう？と火事の話が出る時、テーブルに相對した時、每度口癖の樣に何時も斯うした話題の主となるのである。只に一個のテーブル……何等高價な品では無いが誠に意義ある記念品である。

時は大正拾五年四月廿日午後貳時、實に驚天動地の大火災であつた。其の當時の悲慘な狀況が此のテーブルの

爲に、より以上に懷舊と追想と愚痴との材料と成るのである。當時父は銀行を護つて居、母と姉は夢中で家內を翅け廻つて居た。僕は火元へ走り、弟二人は學校に居たので、僕の家には何一物をも持出された品とては無い。只に此のテーブルが貴いものである、そうして未だに此の記念すべきテーブルを救ひ出した主、神の名前の知れぬ事は甚だ以て遺憾な事である。

記せよ、四月廿日を……村の最南端から出た呪ふべき魔の火！　魔の風！は、風速實に貳拾六米といふ恐ろしい迅雷的狂暴な勢を以て、恰も青年の强齒を拔くが如く、貳軒五軒と火箭は點々と飛散するので、全區忽ち魔の火の海と化せしめた。

丁度其の日は農會から初生雛の配給される日であり、僕も役場から廿羽程持ち來つて仮母器の手入れをして居た時だつた。折も折警鐘は亂打された！　素破火事！　叫ばれる時、見れば南組だ。瓦燒か？　何處だ！　此の風に、取るものを取り敢へず火元の方へ走つた。殆んど夢中である。警鐘は四隣等しく亂打されて居る、驚ろいた、其の火の脚の早さ……久保田氏の邊まで行くとオーイ〳〵賴む〳〵と應援を求むる叫びが此の亂打の鐘と物凄く聞へた。實に火元から十數軒も離れた親友久保田庄司君の家から黑煙蒙々揚つたのである、今の內ならと思つたんだろう、兎に角夢中だ、久保田君の家へ飛びつけた、そして自分も他の人達と共力防火に活動してみたが然し風伯益々强く、身体燒くが如き火災には如何とも堪へ得られなかつた。何等目星い品の搬出も出來ず、唯防火〳〵で火災に攻められて了つたのは實に殘念な事であつた。コノ風、コノ燒け方、コノ擴がり方に到低バケツや手桶の水位では駄目と見極めた。そこでポンプを！　ポンプを！　と大聲で絕叫した。表にポンプ物色に出た、ふと其時である、自家を案じた、自家へ……自家へ、時、恰も雨戸を閉る人、屋根にネコ張る人、ハゲリに水を汲む人、盥に水を汲む人、——南へ走る人、北へ走る人、老母の手を曳く人、少量の風呂敷包を抱へた人、小供の泣聲、警鐘、耳は鳴り、眼は血走る、火に包まれた屋根、火を吐へて居る土藏、此處にも彼處にも毒蛇の焔にメリ〳〵、ゴー〳〵たる、其音の凄きことすさまじき事實に慘憺たる修羅の巷であつた、何處が早い何處が遲い、そんな區別は殆んど無く總て一勢式大火だつた。僕が火のトンネル焔の海を越へて家へ歸つた時は、既に屋根はメラ〳〵と火の絨布を敷いた屋根であるのに應援の人は居ず家人も見當らなかつた。庭先にハゲリやバケツや、梯子等が持ち出されてあつた。僕は狂氣して母を呼んだ、其時母は文庫藏に入り家什を持ち出すべく

居たらしかつた。突如、貝澤の戸澤頼造氏が來てくれた。君、品物よりも命が大切であるぞと注意してくれた。僕、そして姉と互に西に北に避難すべく思ひ浮べた。矢張り火威が頭の上足の下となく迫ひ迫まつた。僕の家は四方塀で圍んだ家だつた爲、親類の松橋勇氏や同姓の明三郎氏など二三の人が駈付けて見たが最早這入れなかつた、と後で話された。僕の家敷に飛び込むと自己の生命の危ぶない事を恐れて、誰も取出しに盡力されなかつたらしい、が然し……と思つた。僕と姉は決然山へ〳〵北へ〳〵と火災を避けて、專身辛ふじて逃逸した。火災の來ない場所を選んだ。罹災者が逃げ集まつた。それは村社の西の山だつた。そして母の事を心配し出したが如何とする事が出來なかつた。

今迄は村社として嚴然犯す事の出來なかつた、布施御厨神宮へも呪ふべき魔の火焔は懼ひ初めた。老松、老杉御社は、大音響と共に一面の火の世界と變つた。人も集まつた黑山の如く、そして御社を護るべく警官、消防手其他の人々右往左往に飛び交ひ走り交ひ、戰鬪的死守された、其現況は戰場だ、丸で戰場だ、僕は何する氣力もなく只々啞然として傍觀してゐたのみだつた。

母は父の勤めて居た小松原銀行へ裸足で、手に算筒の鍵を握つたまゝ親類の人に連れられて避難したとの知らせで、僕も姉も非常に安心した。尋ね集まつた親戚の人々と多人數で、火の中を苦心して自家の燒跡に行き、まだ四方の壁が燒殘された文庫藏の壁に

一同無事左記へ避難す

川中島村　松橋勇方　福井有本

と燒炭で認めて、兎に角松橋方に避難した。

翌朝父が燒跡へ初めて行つて見た時は、其壁も亦倒れてゐた。

松代消防組消止。東寺尾消防組消止。の文字が、さんざ猛火に煽られて大きく小さく、ひゞの無數に入つた灰色になつた屋根の半分燒落ちた籾藏の白壁に太く大きく書かれて、土藏は孤立して居た。庭の針の樣な黑い林や東に黑く燒殘つた木々の樣と見比らべて、層一層松代消防組が、如何に死守して頂いたかゞ歴然雙眸に現はれて、唯々僕は涙と共に感謝するの外なかつた。僕の此藏は松代消防組と共に、永久に寸時も忘れる事の出來ない最大記念物となつたのである。

三里の永い行路をあへぎ〳〵馳付けた松代消防組は、火焔と黑煙濛々たる中に突立つた藏の棟より、白煙を吐き出したのを見出した刹那、鬼と言はるゝ第三部長增澤義郎氏は彼の藏を救へ、彼の藏を守れ、我が消防隊の平素の魂をあらはせ、と大聲に激勵した、けれども此決死的行動を誰一人として爲し得るの雄者もなかつた。惜しむべし唯烏有の期の迫るを視過すの止むを得なかつた。今は鬼の部長も斷念したらしかつた。其時である、ヨオシ俺が一番消止めやう護つてやらうと一人の丈夫が、黑煙に取卷かれてゐる土藏に突進した。やあ！誰だ〳〵、危ない！　命知らずだと異口同音、何れも彼を氣づかつた、殆んど狂亂せるが如き彼は、忽ち藏の傍の大きな柿の木に攀ぢ登ると見るまに屋根を打破つて藏の内に飛び込んだ。其時、田町の親方だぞ！頑張りやの親方が愈々亦例の決死的行動を斷行したのだ、危ない！それ親方を殺すな、皆行けそれ續けと忽ち第三部の猛者連は、猿の如く柿の木を梯子に藏内に飛び込んだ。ポンプは水勢一段と物凄く、辛じて玆に全く消止むるを得た、そして熱血の充たされた手と手を握り合つた、汗と血とにのばせた顏と顏とをあはせた時は皆無言であつた。其時の親方の顏は血走つて居た。其時の部長の顏はかたかつた。そして我が三部員の眼と眼には又言ひ知れぬ感じと誇りが現はれて居た。直ちに燒炭で藏の壁に松代消防組と大書して退きあげた。其際まだ此家の人らしい方が一人も見へなかつた。親方……？それは松代田町の人、工兵上等兵で使屬部下を多數有する土木請負業者溝口利助と云ふ

剛者である。長野市日詰の宮原義衞氏宅で其時の一員だつた松代芝町の竹腰信太郎氏より詳細に聞かされた。それは五年過ぎた二月十九日である。

翌日から川中嶋村の消防組頭酒井讓助氏や、各區長氏の指揮で百數十名の方々と、岡田南組有志の方々と共力されて、灰や瓦や燒土の取除けに盡力された、それが何れも各位が殊の外の親切をモットーとして片付けて頂いた事が寔に心嬉しく感じた、それは皆樣の實際化した眞の御同情の賜だつたからである。

次の日から親類は何れも一團となつて、各自十數名の緣者を引具され、連日跡仕末に粉骨碎身せられたので漸く復興其緒に入つた樣な氣がした。そして暗い藏の内で永い間暮した。父の心も暗かつた。母の心も暗かつた。僕は僕の心は矢張り暗い樣な感じがしてならなかつた。それは燒殘つた此の藏の内で、燒殘つた此のテーブルに對座した僕一家族の心赤裸々である。

復興こゝに四週年罹災者の一人とする

僕當時の述懷

朝まだき眠れる夜の靜けさの、まだ夢破られぬ朝、萬物寂として人なきの時、試みに汝の家をみよ、然かして汝が村をみよ、今汝が村は何處にかある、而して汝が家は何處に在るかを……思ひ半ばにして實に追想禁せざ

るものあり。

『此頃毎朝の様に霜の夏服にゴム底足袋、女縞の袴天に頬冠りして、其上に赤色の毛糸の頸卷をぐる〳〵卷にして通る若い男、變な男だ〳〵と思つたらあれは小松原の人で家が焼けて無いから親類に厄介に成つて居て焼跡仕末に行くのだそうだ、誠に氣の毒だ、小松原の人は皆アヽした人許り、彼の服の上へ着て居る着物をご覽、叔母様のか何かのを頂いて着て居るのだ、それで知れる、と家の母さんが話したよ』と十二三位の女の子が話して居た。

今朝も「伯母様行つて來ます」……元氣に言つた心算だが、何處かに力がなく聲が半分咽喉の底に殘つた様な感がする、明日も又行くだが、今度は元氣な聲を出そう、とは思つても何時も聲は低くしか出なかつた。

幾分氣が緩んだか、それとも連日の勞れにか、此頃は時々眠り過ぎ、あまつ起き忘れる事さへもある。斯して今朝も出掛ける時は七時半で、今日は休んだら、と伯母から注意される程であつた。

幾星霜住馴れた最も親しみ深い我々の家、僅か二時間殆んど一瞬にして烏有灰燼に歸した。罹災者の精神的物質的に被つたる打撃や幾何だつたろう。第三者は我々罹災者を何う解釋してくれたであろう。全く追想禁ぜざる所である。

火災後の僕一家族。父は銀行を休んで、母や姉と半焼の土藏を仮住宅にし、唯々焼跡整理に不馴れ乍らも余念ない。弟は力石郵便局である親類に厄介になり屋代中學校に通つてゐるが、それでも土曜日といへば何時も歸つて親や兄弟の心をいたはつてくれる、矢張り鄉土は戀しらしい。僕は當分川中嶋の親戚から跡片付けに通ふ、と云ふ様にきめられたのである。

今朝も何時も通り親類の家を出たが、路々の村は今眞盛りの花の村であるのに、小松原の方は唯眞黑な色をした木が針の様に立つてゐる。四ツ屋や今里や、安茂里村などと比べて、我鄉土の餘りに變つた村となつた、而も表面でさへ斯の如きに裏面の各人に想ひ及ぼした時、退いて自分の家の事を考へて見た時、僕の心……。

凹んだ眼、眞黑の顏を鏡に寫した時。手や足の荒れて小爪の痛を覺へた時の僕の心……。

……まして小鳥が花に轉るを聞いたとて、又如何に香りの高い美しい花に對したとて、何等心からの此の天與の春の氣持も春らしく感じられない。去年の春、今頃、學友と花の下で愉快に談笑した時の事など思ひ出して顧たが、矢張り現在此途上の僕は專念焼跡整理にそれが今の急務だとしか思へなかつた。趣味にも色々ある、けれど

自然が僕の境遇を斯うせしめたのである、そして一日も早く整理しろ一日も早く復興したい、と斯な事を思ひ續けて毎日〳〵親類から通つて居るのであつた。

或時は思つた、之が平和の家庭に暖い生活を續けた吾が村の人々に、神は涙と共に此大災害を與へ、而して向上贅に流れざる様一大斧越と大鐵針とを差込んだのであろう、とけれ共隣村の人々や學友との思ひを比べて、而して果は又愚痴を出す事が度々なのであつた。あの時の事、顏に蒼白味を帶び口唇を締て血のにじんだ光りある雙眸で見舞はれた、刹那の僕、何物をも視得る事が出來なかつた、無性に落ちる涙さへ自制するの力も無く、唯無言のまゝ膝の上に流れくる涙滂沱として禁ずる事能はなかつた「福井君……」頭にツンとひゞいた其聲、矢田校長先生の聲である、そして先生も在學當時の如き流暢のお言葉でなく、熱と情でかためられた聲で、極めて短かく「飛んだ事でした。卒業生校友會を代表して見舞に來た」と言はれた時、僕は……亦更に涙が新らしく湧いて、唯々返禮の言葉さへも出なかつた、其時荒井先生も同行で先生からも元氣附けて頂いた。此時の事……僕は現在目の邊りにまざ〳〵と記憶に存してゐる。それ過ぎて僕の小學校から更農時代まで緣深く別して可愛がつて下さつた前澤校長先生にも見舞はれてコン〳〵活素を與へられた。有難い事には各恩師を初め學友知己一人として慰撫に鞭韃に、何れも同情の血をそゝがれた事が強く〳〵頭腦裡に深刻されて居る。

こゝに四星霜漸次復興の緒につきつゝあるも、けだし大方の御同情と罹災者の協力復興に、碎身せられたる結果と思ふ。要は唯々節約と勤勉、努力の他なかろう事を痛切に感ずる者である。

○僕の一詞

汝よ、何が故に泣くか
徒らに泣くを止めよ
而かして汝の眼はたゞるのみ
汝よ、生きよ自己の爲に
强かれよ健康と共に
而かして一日も早く復興せよ
汝よ、謀れ、永遠に
汝よ、築け、永遠に
而かして待てよ花咲く春を

小松の原に

大火災追想

罹災者　宮内憙知治

忘れるな四月二十日午後二時を！

此の日は私共の一生涯、否子々孫々迄で忘れる事の出來ない、恐怖と悲慘とを物語る大災害の日であつた。

春霞に遮ぎられた太陽は弱い光を地上に擲げて、烈しい南風が朝から物凄い程吹いて居た。家族の多くは、田甫が遠いので辨當持ちで麥草を取りに行つて居た。

私は桑畑へ草取りに行き、そして晝飯に家へ歸る時に、野口延治郎氏と岡村牧治氏とに逢い三人で同じい樣に「強い風だなあ！」と、話し乍ら家へ歸つた。そして自分は晝飯を食べて後晝寢をして居ると、突然ヂャン〳〵〳〵と警鐘の亂打が聞えたので私の心臟は激しく躍つた。急に起きて目の前に掛けてあつた時計を見た、丁度午後二時十分だつた、家を飛び出て大日如來堂の脇迄で登つて見ると、小松原の南の端から煙りが朦々と勢よいよく立上つて居た。私はそれ近火だ然し餘り大事には成るまいと思ひ乍ら直ぐ降つて、警鐘の亂打に取り掛つた。縣道を北から南へと人々は何れもマラソン競爭の如く走つた。自分は力の續く限り叩いた、鐘木が割れた他かの鐘木で尙も勢一ぱい叩いた。諸方で叩く鐘の音が丁度蜂の巣を壞した時の樣に聞えた。酒井好惠君の持つて來た鐘木も又割れてしまつた、縣道を小出正幸君が走つて來たので代つて叩いて貰らをうと思つて呼び止めた、其の時、庵主さんは息も絶え〳〵に飛んで來た、自分は鐘木を見つけやうと家の庭まで來ると家は未だに留守だつた。前の岡村今朝茂君は屋根峰に登つて、火はもう鈴ノ宮迄來て盛んに燃えて居ると騷いで、居たので若しや自分の屋根にも火の子が落ちはしないかと思つて、偶然上を見ると最早屋根からは煙りが出て居た。「やあ燃えついたなあ」と云ひ乍ら、是れは困つたと梯子を掛けバケツに水を汲んで持ち上げて數回かけたが、烈しい風の爲に恨めしい火は愈々煽られ屋根一面に燃え擴がつてしまつた。田甫から火元や其近所へ應援に直行した家族は、もしや此の邊までは火がくるとは思はなかつたらしく息も絶々になつて歸つて來た。母は咽喉が乾いて水を飲まなければと云つて、池に水を飲みに行つた。私は如來樣と折鞄と吊してあつた懷中時計が目についたので掴み取つて慌てゝ天井に這う火に身の危險を氣づかない乍ら飛び出た。祖父さんは昨日表具して來て、掛けて置いた掛物二幅をはづして逃げ出した。

母は簞笥の抽斗を一箇々運んだ、けれども出し場の不便と遠いので意の如くならなかつた。其の後勇敢にも奥の座敷へ又もはいつて、品物を庭へほをり出した、けれども惜しい事に邊り一面は火の池となつて、誰も取りに行く事も出來ず皆燃えて終つた。母は屋根から燃え屑が落るので恐ろしくなつて逃げ出た。父は白米一俵、小麥二俵東へ轉ばし出した、けれどそれも憐れ灰化した、今里の山崎久右衞門氏が駈け着けて白米一俵出して呉れたが何れへか紛れ込んでしまつた。折角出して貰つて燒なかつた筈の白米一俵が行方不明になつたので、家内一同は落膽してしまつた。

もう、物置は何時の間にか燒けて了まつた、母家、蠶室等は盛りを過ぎて燃えて居た。

弟の智は長野工業學校で授業中、小松原が大火事だと聞いたので直ぐ友達と一所に駈けて來たと云つて、私共の避難して居た場所へ來た時には、既に家は跡形も無く只、大きな梁がトコン〳〵と眞紅になつて居たのみだつた。此の狂暴な猛火には消防手も、手の付け樣もない、消防手等は火を遠卷に卷いて傍觀の已むなき狀態であつた。

私共はもう、住宅も、食糧も無い只、着のみ、着のまゝだ、雨はぽつ〳〵と降るし昨日までは寢るに不足なかつた、私共は河原乞食に等しい慘めさになつた。

もうお宮も燒けて終まつたと誰かゞ云つた私は其れを聞いて驚いた、噫神樣も私共と同じく居所に迷ひお在しますのか勿体ない、まして人間の居所に迷ふのも當然の事だらうと泌々と感じた。冷汗は躰中を流れて寒くなつて來た、足も跣足だつたので冷さを覺えて來た燒ける前にはやかましい程あつた履物も今は藁草履一足さいも無い。先程迄で一生懸命に叩いて居たあの警鐘は、お堂の燒け落ると共に石垣の下へ赤味色になつて轉げ落てゐるのも見えた。

親類の人々が駈け着けて呉れたけれど、あまりに變り果た此の小松原の慘狀を見て一時は無言だつた。それにつけても家内一同は此の猛火の中を揃つて無事に避難の出來たのは、不幸中の幸と喜んだ。

先づ私共は天照寺の和尙さんに賴んで寺の一室を二軒で借りる事にした、寺には住み馴れた家を失つた私共と同じ境遇の人達が澤山避難して居た。そして猛火と戰ひ危險を冒して持ち出した少しばかり品物を抱いたり、擔いだりして居る人もあつた、又私共の留守中家が燒て了つた、何一つ出した物は無いと云つて只、茫然と途方に暮れて、見るも悲慘な人々もあつた、位牌を懷中に入れ蒼ざめた顏をして家族を探して彷徨ふて居るおばあさん

もあり實に氣の毒だつた。

折角親類や知人の人達が見舞に來ても、訪ぬる人が何處に避難して居るのか見つけるに容易でない混雜さであつた。

もう外は全く暗くなつてしまつた。部屋の中には灯りの氣も無くて困つて居ると、和尙さんが蠟燭を持つて來て呉れたので、少しは明るくなつたので嬉しかつた。

親類から握り飯を持つて來て貰つたり、農學校の生徒が胡麻鹽のつけた握り飯を配つて呉れた。私はその時に關東地方の大震災を想ひ出した、そしてあの時の罹災者の心中が思ひ出されてならなかつた。

空腹だつたので貰つた握り飯を口には入れたけれど胸につかへてさがらない、湯の一杯も有つたならと思つて湯を沸したくも藥鑵や薪さいも無いので何うする事も出來なかつた。

寺の大門で燒跡を腑瞰すると、晝間の燃え殘りの火から眞紅な焰がたつて宛ら火の海の樣だつた。ガソリンポンプの廻轉の響、水の放射される音は全くの戰場だ。一瞬時にして先祖代々よりの貴重なる寶、私共の生活に是非必要なる衣食住のすべてを失つて了つたのである。私の頭の中には今迄での住馴れた家が燒けないで在る樣に思はれてならなかつた。全く僅かの間の出來事なので恐ろしい夢でも見て居た樣に思はれた。

火災の跡の寂寞な夜は次第に更けて、寺には人聲も餘り聞えなくなつた。私共一家も今日の疲勞でうと〳〵と眠りについた。

風荒ぶ凶變の朝

罹災者　久保田重男

花の名所久保寺の杏の花も今を盛りと競ひ咲き小松原の杏の花へと點暖して爛漫たる有樣實に繪を見るよりも美しく風隱やかにして日麗かな庭には鶯の明日の樂園を失ふも知らで戲れ雲井の空に雲雀は囀り樂しむいと物靜かな日の事であつた。

日　中

十一時頃より狂い來りし魔風は砂煙の渦き天高く或ひは煽風となり北へ東へと吹き荒ぶのであつた。

木々の梢の唸り聲物凄く枝は折れ、家々の戸障子は倒れ、道行く人の足をも浚ふの凄ましきに激風は遠慮會釋もなく吹きまくつて砂塵は高く連山を包圍し天をかすめて日光を遮り日の顏さへ見えぬ有樣で有つた。

川中嶋平坦部は概ね春の禮祭とて幟は風に飜り太鼓の

音も近く聞へて來るのであつた。

火　事

茶をすすりながら四方山の話より話を轉じ此んな日火事でもしたならば等と語らひ乍ら午後の仕事に取りかかつた『火事だ〳〵』午後二時十分　嗚呼火事！近火！南風！激風！亂打の鐘其の電光の如き震動は私の腦裡に深く我が家も類燒かと思ひ乍らも火元へと走つた。

最南端の材木商裏手より發火し火は忽ち燒え擴がり四方は手の付け樣もなく二三のポンプは必死と防げど火は頻りに南風に煽られ猛熱を逞しふするのみで有つた。しかのみならず火塊は數町離れし家屋に飛火して燒えてゐる火元へ〳〵と走つた人々は一人へり二人へる近所近邊の家では必死と家財道具を運び出すのであつた私も我が家の方へと視線の矢先は閃めいた、家家家向ふ處我が家あるのみ。

空中を舞ふが如く否疲れ足を引づるかの如きか夢我夢中となり走つた。

我家の類置

一點の火塊飛び來るかと思や表屋根より春の芝生に野火をつけたが如くに燒ひ擴かりたれど誰一人消防に來る人とては無かつた。瞬く間に家中へ吹き下し逃げ口さへ失ふのであつた北へ〳〵と逃げ行く人々は相前後して飛び行く子供等は鳴き叫ぶのと家々の倒れるのと蠶具の破裂の音のみ、全く焦熱地獄か修羅場かの如くにも思われた。

母は一人慌てふためいて本尊樣をと叫んで居れど子供等は誰れ一人居らず着類の樣な物二三を運び出す位に過なかつた。

私も二三點の重要書類や自分の書物を出した母は私に哀願する樣に命じたアノ簞笥アノ抽斗等と頻りに殘念がるが然し東京の弟の話に東京の大震災の事などの事を考へると飛び込んで行く氣にはなれなかつた。

猛火は宛ら火の海の如く音は實に萬雷の一時に落ちるが如く煙は濛々と天をおゝひ蠶の棚竹の破裂の音瓦の落ちる音將棋倒しに倒れる音耳も破れん許り之れ自然の力神佛の仕業か天地は此處に破壞するのであるか、堅牢無比の白壁の土藏も瞬間に全身火を吐く倶利伽羅龍となつてまつしぐらに天に向つて上る其の物音轟々として倒れ行く樣。

しかのみならず湧き立ち登る黑煙は一天を掠めて充滿し施風全村をおびやかし燒けて立ち狂ふ黑煙は又其れを迎るに似て宇宙に黑幕を閉じて高く擴がり行くのである其の時既に太陽の光は焦けた錆鉄の丸玉の如く彼の光輝と威嚴とを失つてゐるので有つた亂打の警鐘も何が何だ

か近所近邊の消防隊は四方より集ひ來れど南方の門口を閉され西は山東より交通はとぼしく一方北は犀川を隔て安茂里村小市の山に飛火し彼の方面の消防隊は全く此處に留り東北より集ふ犀口道のみ。

母等が二三點出した着類には火が付きポツポともえるし着てゐる着物にさへ火が付いてゐるのであつたまるで虚無の如くである。

頰に吹き當る風が熱い火は北へ〳〵ともえて今頃何處でもえてゐるのでてらう父や子供は我家のもえてゐるのを知らないであらうか否今我家を指して走つてゐるのであらうか、十有余代住みなれし此家幾百年の此家、弘化の地震に殘されし此家も今が最後かとまたもや施風は起り一種異樣の響と共に家は東北に向つて倒れた。

焰は高く〳〵空間に躍り渦卷く黑煙は越路の彼方へと吹きまくられた。

噫何たる無情ぞや我家は今無し悲痛堪へて形容す可くも無し村落の東西兩端に避難民はうろたい唯茫然として我家の倒れ行く樣を眺め居るのみであつた。

二三の風呂敷包の中には何かあるのであらうか私は我が家の燒えるを見て北の方へ視察に行つた。

火勢は發火源地に到底尋常のものを以つて比較すべきにや炎の軒炎の技炎の長蛇は延々として忽ち數町離れた

る大厦高樓を熔し工場の氣關に紙を投ずる如くまたたくまに變じて火勢を逞ふする許り慌てゝ跣足のまゝ右往左往にうろたへる者。何處かへ避難するもの實に修羅場か焦熱地獄の夢か現か何と云ふ悲慘事かや近村にほこれる此村の最後此の悲慘事嗚呼嘆けど今は詮方なし時々思ひ出さるゝは大正十二年九月一日關東をオビヤかしたあの大震火災さすが東京故これに幾百倍値する悲慘事で有らふ、死者負傷者は十數萬を數へ數十億萬圓の富財を烏有灰燼に歸せしめたのであらうか。

私は其時青年會の一役員として篠の井驛頭に於て九月三日より十日頃迄當時の悲慘氏罹災者の爲救護班として或時は大釜で味噌汁を一日に八釜も煮て與へた事も有り又或時は學校に於て茄子の漬物をして荷車十二台で運んで東京へ送りし事もありし、又或時は東京へ送る寄附金を村内募集して歩いた事もありしが他人の事の樣な氣がした、或時は東京の弟の行衞を心配せし處計らずも運良く其功認られ本鄕區役所より表彰さえされし事も有つたが過去の夢であつた。今盛にもへてゐる伊勢社殿や犀口方面は發火源地より二十町も離れてゐる、尙ほ犀川を越えて安茂里村小市の山に飛火してもへてゐる小市村落の人々は戰々恟々としたであらう。

地勢

元來本村は北南に長く縣道を狹んで町の如くに家込み加ふるに麥柄屋根多く薪と木材は本村の物産中忽にすべからざる物なれば、各自家の前後に塀の如く廻らし養蠶村として知られし程に蠶具及藁類を庭前に貯へたるは最も危險にして非常の場合考ふべきなるにと罹災者の人々は今更の如く思ひ出して嘆くのであつた。

風は東北に變換し次第に鎭火に赴きし時は四時過ぎ

本村の名譽職村會議員等は役場を新築するべく伊那及諏訪方面を視察す可く皆留守中なのであつた、諸氏等は諏訪にて此の報を聞き直ちに引返したと聞く村役場は類燒をまぬがれし野口高之助氏宅を臨時役場出張所として見舞客の應答及救護又は善後策に余念はなかつたそして各地へ「罹災者の方は小學校へ避難して下さい」と宣傳をした。

私は此時すでに學校へと足を走らせた。

學校には罹災者二十人位しか居らなかつた、新聞記者は我等の事をしきりに聞きたがつた、村内婦人會役員は握飯をこさへるべく、我等の爲に働いて居てくれた、そして私の顏を見るより見舞の言葉を替してくれた。

私は握飯を食し乍ら又我家の燒跡をさして急いだ、道すがら各地の消防隊は夕食をする人もあれば自動車やオートバイ自轉車等で見舞品を澤山運んでくれる人もあつた。

曲松

元來曲松は文字通りの老松で今年一月五日些々たる小雪の爲に例れた、夏は日蔭を保ちて納凉に適し通行人の休む事日に數人に下らない又其曲成が美くしかりしが何故倒れしや不思議でならないのであつた、そして西組青年同志會よりの願ひ出に依り小松を再植したのであつた。曲松より南へ向へば墨を流した樣な空に風は絶え靜かなるに比し北へ向へば唯焦熱地獄にガソリンの音ラツパの音人の泣きさけぶ音車の軋犬の吠る音さながら關東の震災の被服敝の跡を想像するが如くであつた。

日はとつぷり暮て四邊は暗黑の世界となり事務所の前には早く電燈會社は外燈線を張り灯を點々とつけてゆくのであつた。

我等避難せる家は坂田茂一郎氏宅で六十有余人十一家族は老も若きも男女入り亂れ入替り立替り來る見舞客にて前後を忘却する位であつた、夜は益々更けて行つた。

乞食の一夜

實に口に言ひ得べき物に譬ひ難き程の暴風に燒きつくされし村も今は全く微風さへなく毎夜の如く輝く無數の星の影だにも見えず唯燒ゆるがまゝに家財の總てが誰一人消してくれる者とてはなく夜はまゝ〳〵更けて行くの

であつた。

我一家の避難を收容して呉れる坂田茂一郎氏宅は他に十一家族で罹災民六十有余人其の中には八十余才の老人を始めとして小兒に至るまで老若男女裏座敷茶の間台所サテハ土藏物置の隅に至るまで罹災者の爲めに總てを開放して呉れた。

入替り立替りの見舞の人は前後に雜踏刻一刻と更けて行く夜も靜まる時なく私は思ふまゝに縣道上にと出たが道路さえ破損して歩むことさい叶はず先づ第一の練炭工場えと急いだ、工場は今年の養蠶組合で養蠶に使用するのであつて組合員の委托により毎日製造したものが此の火事によつて工場は灰燼に歸して折角の努力の數多い練炭は物凄い青色の火と亞硫酸瓦斯の臭が丁度淺間山の噴火口を覗く時に似て鼻をつくのと庭先の竈が平然として奇蹟的に立つて居るが噫昨日に變る今日の空と其の變化を思ひ出さずに居れなかつた。

さて神社の前に來ると思わず一掬の涙が滲むのであつた彼の社の大殿堂も跡型もなく烏有に歸し老松老杉は枝を交へて高く天を突き綠樹鬱蒼として晝尙暗いとさへ云はれた彼の大きな森も哀れ昔と憶はるゝ程の燒え盡し就中老杉は此の社の御神木としての靈木なりしが中途より折れ今なほ盛んに燒えつゝある誰れ一人消す者とてなく

棄火を弄ぶがまゝとなつて居た。

中央を貫通する縣道上は兩側よりの瓦や燒殘り燒材等で通行も不如意で堰に湛へられた漲水は宅地と云はず道路上と云はずあたり一面に氾濫して全く必要の時に乏しく鎭火後に至つてこの仕末唯まゝならぬことの愚痴をこぼしながら家なき家へと急いだ集合ラツパの下に集ふ消防隊は忙しそうに走るもあれば高き石垣の側に疲勞のあまりに眠るも者あつた。我家えと足を急がしたれど家なき者は乞食に等しと一人考へずに居られなかつた。

火事雨が急に降り出したれど笠もなければ仕方なく幸に類燒を免かれた一軒家は村役場が出張し村長を始め村吏員各種團体長や警察官に至るまで見舞客の應對や應援隊の秩序に忙殺されてゐる。

電燈會社は電工の總出動の下に先づ外燈の復舊を急ぎ自動車オートバイは時を移さず入亂るゝまで戰場かの如く寫眞師や新聞記者は戸別に餘談を訪れるのであつた。

收容所に歸りたれば大勢して眠られず一話と繰返し繰返し悲聲とのみ談る折柄降り來る火事雨は益々强く眠らんとして眠られずサテハと小高い所に登りて見れば丸で虛無であらふか焦熱地獄か村中火の海と化し天を焦して晝の樣に秋の夕燒雲の如くであるこの時こそ關東大震災を思ひ出さずに居られなかつた戀しき友や弟の話には此

有樣を折々語る。

眼をとじて冷靜に老へば自然の風に小供の弄火如何なる人間の智力を以つてしても風は防ぐ事が出來ないで有らふか、優秀の智識あらふとも自然を左右する事は不可能か。

火さえ弄なくば此樣な憂目に遭なかつたに、コレ皆災難とあきらめ樣、噫思へば我この多年の想像は全部今日を以て破壞したのである。

否我等の過を幸運に導びいてくれたのか等とそれからそれへと考へれば萬感の悲み胸に迫り思わず涙は頰を傳へて流るゝのであつた。

危く逃げ延た鷄は彼の籔影に八聲を告げる頃夜はすでに明けてしまつた。

燻る白煙は濛々として空中にさまようのみ

時四時半

廿一日

夜は明けたれど何かやとそう〳〵しく各地の消防隊は不眠の活動を續けてくれた。

火こそ昇らぬが煙と蒸氣が臭氣を交へてぶん〳〵として何處にも立つて居られぬ位で有つた人々は皆我家の燒跡にたゝづみ唯うろたへるのみで有つた。

そして燒け殘りの材木に水を掛けたり金物などを堀り出したり着た覺えのある着物の縞柄などを眺めてゐるのみであつた。

臨時役場出張所は役場より電話を架設して救護の連絡を許り吾々罹災者の爲に麥湯等を沸かし呉れた。

北原郵便局は若松屋燒跡に机二三を以て事務所として田嶋局長自ら事務を取り罹災者の爲に便宜を與へて呉れた。

信濃電燈會社は飯田國之助氏燒跡に事務所を設け電燈線の復舊に余念ない。

近村の消防隊は早朝より應援されて灰片づけの爲活動してくれた。又更級農學校生徒は全員を以て活動してくれた。

小學校の生徒は三日間の臨時休業中は罹災者へ贈られた同情品を配給してくれた。

村當局は昨夜上諏訪にて此凶報を聞き急遽歸村直に村會を開いてこの善後策を講じたのである。

村會は各罹災者にバラツクを建築して呉れるとの話により避難民も聊か安堵の色も見へた私は吾校の燒跡にたゝづみ煙る白煙を眺し時午前六時東京の弟より電報が來た。

本日の新聞によれば大火全滅の由定めし類燒のこと返待つとの意味「後日の話によれば其日は丁度向嶋の花見

の豫定日とて仕度せるとの事」なりしに東京新聞と云はず田舍新聞と云わず全國の都々浦々にまで此の報が傳へられた。

當日の新聞には千葉縣野田の大火二百余戸

福井縣で二百余戸岩手縣で百余戸神戸に山火事小倉官林の火事等で火災は各地に於て慘狀を極めた。

信里消防隊は我家の燒跡を片付く可く努力して呉れたそして椿を切り又はヒバの木を切りて擔架を作り終日活動してもつつた。

私は屋數隅の桐の木と柿の木の立木を柱とし二間四方の藁小屋を急造した。

藁屋の壁に藁の床敷く物とても藁莚むしろの障子着のみ着のまゝ食なくさりとて仕事とてもなく其の翌日より家族五人は其中に眠る事が出來た。

其翌日二十四日は未明より降り出した春の淡雪は燒野が原に活動する者を又もさん〴〵に苦しめた雪解けて屋根より落ちる醬油の如き赤黑い水が頭の上に落ちる慘めさであつた。

夜は益々更けて物凄い程の月は皎々として燒野が原を隈なく照しバラツクの隙間より見ゆる電光ときこえる悲聲は絶へず聞えてくる事務所は百燭光電燈を點じて共和村役場出張所と云ふ立札は何處に於ても見ゆ程なれど、晝間は戰場の如く騷しき程なるに夜はまるで荒野に猛虎の眠るに似たる景色である。

何故かゝる憂目に遭ふのであらふかと考へ出されてならない。

噫忘れまいアノ八十余年前弘化の大地震の話は折々年寄は語る地震の決果として岩倉山が崩壞し犀川の水村中におしよせ慘狀目も當られぬ有樣に比し死傷者こそ尠かりしが物質はとうてい比す可くも非らず。

村役場で建築せしトタン葺きバラツクに移轉せるは二十八日の事で有つた。

毎日〳〵大きな建築が焦土に建築されて行く復興の色も着々と進渉して罹災者は不斷の努力を續けて行く。

五月二十五日目出度上棟式が終り露を凌ぐ事が出來るは社會の同情と親戚知已の厚惠により復興の緒に至りしは誠に感激の至りに堪えぬ次第である。

其の日

罹災者　野口幸夫

大正十五年四月二十日午後二時！

此れこそ永遠に私達の腦髓から須臾も切り取る事の不

可能な小松原大火災の日で在る。

其の日は朝より可成强い南風が吹きまくつてゐたが晝頃からは、一層風速を早めて狂暴的な烈風に變じた。私は其の時共和青年會創立十五週年紀念雜誌編輯の殘務整理に晝休の寸暇を窃みて、ペンを走らせて居ると、突然蹴魂しい乱打の警鐘が、耳朶をつんざくばかりに轟ひた。

警鐘の乱打……私は近火を直感した。素破近火だと思はず大聲で口走しると、法被も纒う暇なく仕事着の儘縣道へ飛び出して火元を見定めた。濛々たる黑煙は南組から出て居る。消防組に席を置て間もない私は血潮の躍動する身を風塵に逆らうて火元の方へ駈け出した。往來は消火に馳せる者で雜踏を呈し、煙りは近づくにつれて最南端らしく見える。瓦燒の失敗であらう駈け往く人々の見當は期せずして一致して居るのであつた。

警鐘亂打はどこ組と限らず狂亂的に叩かれ、烈風は狂暴を層一層逞しうして、風速實に二十六米突と翌日の新聞紙が報導したを見ても大体其の激甚の程度が了知される。

飛火は狂風の猛威に乘じ、松坂久吉の東に臨んだ時既に同君の屋根を襲來してゐるではないか。

私と一所に駈け寄つた人々は先づ此の家を助ろと無言に云ひ合せられた如く。我れ先へ飛込んだ。私は涯に上がつて燃擴がらんとするを箒にて夢中で叩き消したが、それは恰も猛虎に抗する虫けらの果敢なさで徒勞に過なかつた。火の子は處嫌はず飛び來り、乾き切つた屑屋は一瞬にして數ケ處から火の手を揚げた。これは駄目だと見極めて下へ飛び降りると駈け付けた時は固く戸締されてゐた屋内からは多くの人々に依つて家財道具を手當り次第東の桑畑に持ち出されて行た私も佛檀疊を運び出してゐると、火勢は忽然として屋内へと闖入した。

烟焔に眩んだ私は何處をどう走つてか次に久保田喜市氏方へ赴ひた、コヽでは火元の消防から我家の急を案じて退き返へした該家内の者は家財道具を西側の安全地帶に運搬最中なので先づ箪笥を擔ひ出して、其の折西側の掛卸に小さくもえ初めてゐた、氣にも留まらない樣な一點の禍根は次に長持を擔ひに飛び込んだ際には座敷の屋根裏に廻り天井は毒蛇の舌の如き火焔にメラ〳〵と嘗めかけられてゐた。其の早さは實に迅雷的だ、辛くも長持だけは出す事が出來た、猛火の追擊で家人に別れるともなく東の道迄で迫げ出した。其の刹那……

私は失神して今にも其處に倒れんばかりの驚愕に襲はれた。呪の火は、久保田岩太郎氏の屋根を包圍し加之火箭は里組地帶に射られてゐるではないか。俵を脊負う

て走る若者、年寄の手を曳ひて逃げる女、風呂敷包を抱へ飛び去る者さながら戰場を髣髴せしめるものがあつた。

この魔の風にこの魔の火はどうなるだらうと憂慮した次の瞬間に私の胸には衝動的に我が家の事どもが幻想されて來た。

父は當時村議として優良町村視察の爲め、南信地方に出張中で老たる母一人りが今頃どの樣に焦心勞思されてをられるであらう？

私は腰の手通りを夢中で走つた。火は猛箭の早さだ、瀧澤製米場が燃初めた、次の瞬間に瀧澤壽作氏の納屋に移つて家人らしい者が、あはてふためいて西の空地へ布團樣の物を放つて素早く引返してゆく、往來は往きには南へ〳〵となだれたが今はまつたくの右往左往だ、半切や四斗樽に水を汲み置く家、ネコを張る家等が馳る眼にもとまつた。

息も切れ〳〵に我家へ飛び込むと、母は戸締をし庭先には半切と手桶に水を汲み、用意おさ〳〵怠りなしの防火準備だ。私の歸るを狂氣して喜こんだ母の二言三言の間にはづむ呼吸をおさいて答ながらまだグヅ屋の防火には今途中で目に留まつたネコ張りが不足なので、直ちに取り掛ると、其處へ北河原の大西の兄(宮本)が駈けつけて吳れた。援の力を得て一層勇氣を鼓してネコを張つた、然し手不足の爲めに一枚張つて次に掛れば、前ののは風に吹まくられて意の儘にならず、此れは駄目だと見限つて今度は馬欠で水を撒き初めた。其の時矢張り北河原の從弟の『北澤委智郎氏兄弟が救援に駈けつけて吳れた。火は餘程近づいたらしい、莚や繩の燃え切れが矢繼ぎ早に飛び落ちる樣に成つて來た、一足遲れに長兄(北澤信雄)が駈けつけられて『何を馬鹿らしい事をしてゐる觀音堂に火が來たではないか』其の聲は如何にも斷末魔の叫聲であつた。

今の今迄で、こうして防火を懸命にしてゐたならば其の中にはどこかのポンプが此の急を救に來て吳れるだらうと思う賴みも幻滅の悲哀だ、五人は屋内え飛込んだ。明るい處より急に薄暗へ屋内に飛び込んで正鵠を失つた目と猛火が近所へ迫つたと云ふ恐怖心とは私の意識を朦朧とせしめずにはおられなかつた。此れも大切な品だ、あれも必要だと彷徨するのみ戸外に出す氣もなく殆ど無意識的に部屋内を彷徨してゐた。他の者も薄暗さに勝手が知れない、寸刻をあらそう時だが一時は閉塞された鼠の樣だ。是れは火災後の物語りだが防火の爲に閉めた戸締が反つて障碍を與へたと云ふは罹災者の通有的な失敗談であつた。

しばらく姿を見せなかつた母は、西の土藏より繭袋を三つ取り出してこられ、これへお部屋の箪笥の物をと。放り出された其の聲は如何にも顫ひて居た。

母の差圖で部屋へ飛込んだ一同は取る手遲しと、手當り次第摑み込んだ。忽にして四ツの箪笥は空になつて裏口から外へ抱き出されたが憐れにも安全な場所に運ばれる遑まなく其の儘灰化したであらう？

二ツの袋は岩雄(委智郎氏弟)氏と大西の兄によつて戸外に運び出された。

今度はこつちひと叫んで私は自分の居間の新座敷に長兄と委智郎氏を誘導した。ヤーと云ふ驚愕の叫びが三人から異口同音に發せられた。私達が其處の唐紙を押開くや否や間髪を入れず東側の窓から猛り立つた魔の火は驀進してきた。

噫々遂に呪はれたか！

三人は隼の勢で袋へ摑み込んだ。決死的態度とはこう云ふ時を指すのだらう？

煙は顏に葬き鼻は咽び目は眩む。炎は手足を襲うて自由を遮ぎる。

今は此れ迄でと抽斗三ツ殘つた一方の箪笥に未練を殘しながら三人は素早くそこを逃げた。

次に私は佛間に飛込んだその時母も一足違ひにどこからか走つてこられた私は本尊樣を母は位碑と繰出を摑んで戸外に持ち逃げた。

新座敷の窓から這入つた火の手は離れから座敷に狂奔して來た。其の頃から一方の火の手は屋根裏から二階を狂舞して茶の間へと迫まつた。一同は再び決死的に烈火に逆襲して手當り放第、或る者は炬燵布團を或る者は柱時計茶箪笥火鉢等を抱き西の山際に避れた烈火は時を移さず物凄まじく擴つて母屋は轟然たる音響と共にまつたく紅蓮の業火に包まれて仕舞つた。

噫々何んたる天の虐げぞ！　世の悲慘事よ！

私は思はず一掬の涙をせずには居られなかつた。あたりは魔の火の海だ、母屋を燒き、藏を燒納屋を燒き拂つても飽くなき業火は、萬難を排して救ひ出した。茶箪笥や九燒に一存を得たる布團や、母のデリケットな機智によつて助け出された。大黑さんの袋のやうに着物でふくらいだ繭袋等に飛箭するの危險さで居る事ならず村社御遷殿の裏手へと避難した。近所の人々も尠しばかり持出した家具や風呂敷包みを中心に、そこ、かしこにグループをつくつて居た見合はす誰もが顏は青褪めて、目ばかり異樣に血走つて居る。

唯々燃るにまかせる我家を茫然と眺めて居ると執拗な火は遂に神域に迫つた。

呵鼻叫喚の喧騒、業火の渦卷それは見る者をして震驚あるのみだつた。御遷殿裏は殆ど狂人に等しき人群によつて平素は嚴然手の下す事さいならぬ。社寶が所ろ嫌はず放られ初めた、何たる恐懼ぞ！

社殿は直ちにして紅蓮に包まれ、老松老杉は唸りを生じて火の海に化して行く。

噫々さしも崇嚴を極め敬虔の情禁じ得なかつた、布施御厨皇太神も、かくして祝融に弄されていつた。御神体はどうなつたであらう？誰かが安全な地にお遷し申したであらうか？そんな物思に沈んで居た時いつの間にか樣子を見にいつたのか大西の兄は聲を限りに私達を呼ばつて居る、それと先を爭うて駈け付けると門は接續建物が類燒したのに此れは又奇蹟的にも平然と佇立して居た土藏は破風やぐけ柱に火が付いて危機に瀕して居るを見て取つた一同は死物狂ひで邊りに救を求めた。だが無念にもポンプらしいものは認められない、救の手は一人り寄り二人寄り黑山の樣に寄つてたかつて殆んど揉み消した。何處からか馬欠を持つて來る人擔を見付けて來て水を打掛ける人等で辛くも一棟だけを惡魔の手から奪取して貰ふ事が出來た。

烈火の狂舞に恣にされて、土藏と門を殘した外、母屋を初め大小七ツの建物は跡形もなく灰燼に歸して仕舞つた。庭の植込と云はず立樹と云はず見るも悲慘な黑焦の殘骸を晒し、あまつさい母が防火準備に水を盛られた半切や手桶の跡形さいなきは、驚異でなくて何であらう？文字通りの焦熱地獄だ？

親戚知人は火の鎭まるをまつて、此の悲慘に遇つた私達を見舞はつて懇に慰撫して下さつた。

私達親子は唯々啞然として返す言葉さいもなかつたが燒け死んだ人傷ついた人、着の身着の儘で逃げさまようた人等見るもの聞くもの何一つとして涙無しに居られない中に、親子無事であり、のみならず救の人人に依つて土藏一棟類燒を免がれた事は不幸中の幸であつて其の後の復興にも甚大な伴奏の役割を務めて呉れた。

噫々忘るな四月二十日！　呪はしき惡火よ！

第二章　學校役場編

共和村役場救助日誌

◎失火原因

四月廿日午後小松原南組松本和市宅西南方にある物置にて味噌煑を爲しつゝありしが孫金治（四才）其附近に遊戯中家人の留守に火を弄び過ちて物置に燃へ移りたるを原因とす時午後二時三十分

◎概況

四月廿日は近來稀なる南風強き日なりき午後二時三十分頃小松原より警鐘亂打を聞く當時役場に在りし書記森慧典兩角茂一郎小河原壇松農業技術員大澤安通臼田廣等は直ちに現場に急行したりし時は火元たる松本和市宅は勿論附近數軒は火の海となり附近に到る事能はずあはやと思ふ間もなく強風に火の子は北部へと飛散し到る所に火災を起し焔々として北組部落も燃え上り小松原一圓は全部火の海と化したり此間村の消防隊及附近川中島中津篠ノ井等の各消防隊出動大いに消火の爲め活動したるも如何とも術なく此間近々三十分前后なり斯くして出火後一時間余にして大部分の延燒家屋百五十四戸は盡く棟木を落し灰燼に歸したり本大火は前記の如く二時間以内の短時間に全燒したるものにして然も當時田

圃に働き居たるもの多く偶々火災を知りたる消防手壯年者等は南部へ消防の爲め馳け付けたり然るに南部に到着したる頃は却つて飛火が北部に燃へ移り爲に自家の家財道具等を搬出する遑なき有様にして罹災者盡くが一物をも持ち出さざるもの多き狀態なりしは恨事中の一層不幸なりと云ふべし

本火災の區域中にして奇蹟的に類燒を免かれたる者左の如し

野口高之助　馬場林治　瀧澤直衛　飯田太市　松坂辨之助　金子甚作　野口榮雄　坂田茂一郎　坂田幾太郎
松坂七藏　瀧澤芳介　內山セキ　町田藤太

壯嚴なる村社伊勢社の本殿拜殿神木をも本災危に類燒したるは恐懼置く能はざる處にして遺憾に堪へざるものなりされども御神體は青木嶋及び眞嶋村消防手、酒井稻里村受持巡査指揮の許に依つて御遷し申したるは些か意を安んずるものなり

◎村の應急處置

失火と同時に役場員は殆んど全員現場に馳け付け唯小河原書記のみなりしも急を知りて寺澤村農會長林部產業組合長岡田區長及び同代理者常設委員等陸續役場へ參集し續いて出張中の村長も歸村し郡役所より原郡書記村松郡書記淸水郡書記等來訪せらる前記の如く旣に小松原部落の大部分に飛火延燒し罹災者救助の方法を講ぜざるべからず郡の應援指揮の下に常設委員農家小組合長を督して災害を免れたる岡田區及び段ノ原組の各戸より米二升宛の焚出をなさしめ猶不足分に就いては役場に於て焚出を行ひ婦人會員に握飯を作らしめ之を罹災者及び應援の爲め來場せる消防隊及び各種團体員等に配布したり

一方其の當時來場せる產業取締所篠ノ井出張所技手中野久之助氏を囑托し篠ノ井町二葉組合をして握飯の配給を依頼したり

之れより曩に村會議員一同小田切消防組頭岡澤收入役は南信に視察旅行中なるを以て各所へ打電の結果午後十時十一分篠ノ井着直ちに現場を視察せしめ引返し役場內に於て前後策に關し村會議員村農會長村產業組合長岡田區長常設委員其の他二三參集の上協議會を開きたり岡田區よりは先づ各戸の寄附を求め二千圓を集め之を小松原罹災者一同へ送くること

とに申合せたり猶夜に到るも燒失家屋多き爲めと水利通水全く吐絕したる等の爲め各戸燒跡より焰々として火を發し危險尙去らず依つて隣接町村よりの來援消防組を依囑し夜警せしめたり伊勢社の御神木の如きは盛んに火を發し燃え揚りつゝありて尙人心平かならず依て用水路浚泄し通水を速かならしめ消火に務めざるべからず此の急務を行ふべく先づ岡田區中組南組大門組築地組より官役として人夫を出動せしむことに常設委員をして傳達せしめたり翌日の出動時間は午前六時と定む協議會を閉ずる時翌廿一日午前三時なり

◎救護應援狀況

救護事務所を臨時南組野口高之助宅及北組村社附近に設け見舞者の應接罹災者の避難斡旋食糧品の配給等を行はしめたり尙負傷者の治療に付き配慮したり郡長の申請により赤十字社長野支部病院より醫師一名看護婦三名來援せらる篠ノ井警察署管內より警察官十數名長野巡査教習所より別科生十名來援せらる郡役所より小林郡長以下各郡書記技術員來援救護に關する指揮をなせり

消防組の來援左の如し

川中嶋消防組　中津消防組　篠ノ井消防組　小嶋田消防組　眞嶋消防組　西寺尾消防組　櫨崎消防組　稻荷山消防組　八幡消防組　桑原小坂消防組　御厨消防組　稻里消防組　東福寺消防組　榮村消防組　信里消防組　川柳消防組　埴科森村消防組　五加　屋代　松代　抗瀨下　雨宮縣　淸野　寺尾消防組　長野市消防組　上水內郡安茂里村消防組、大豆嶋消防組

主なる來訪者芳名

中津小學校長　佐藤唐太
更級教育會　更級校長會　北村甚兵衛
更級村長　丸田芳三
更級小學校長　松山長藏
信濃日日新聞記者　山崎重太郎
埴生分會長　吉澤政重
日新小學校　長尾均
同　吉澤十助
同　宮嶋武四
同　生徒總代
中津村農會長　鎌田久吉
中津村長　小出一男

中津村　小出誠一郎
更級農學校　壇上謙爾
長野市　松葉屋商店
更埴銀行　青木倉治
信濃每日新聞　風見章
信濃電氣株式會社主事　横田文五郎
中津村　丸山尙
池絲自轉車商會店主　池田絲治
更級郡視學　柄澤褒作
長野工區主幹　田中太作
篠ノ井出張所　永田實
牧鄉小學校長　小河原對治
長野縣道路技手　增岡伊一郎
代議士　山本愼平
更級郡土木技師　堀內葛治
埴科郡寺尾村役場　內野長藏
信濃電氣株式會社　久保田印刻店
長野市印章ゴム印事務用品所　玉井覺
更級銀行支配人　酒井讓助
川中嶋村　酒井清
同　石坂政治
愛國婦人會長野支部事務員

信里消防組頭代理　內山輝久
雨宮縣村長代理　岩佐正親
長野市元善町　中村縫三郎
青木嶋村　小林順十郎
青木嶋受持　遠藤邦芳
篠ノ井女學校長　道田間平
信濃每日新聞更埴特派員　中村周一郎
埴科郡書記　平林茂樹
六三銀行篠ノ井支店　小山元作
塩崎村東區長　梅谷光貞
長野縣知事（東京電報）　石原快三
諏訪郡長（電報）　五明砂
東京牛込（電報）　高橋桑造
小嶋田村長　倉崎圓治
同　助役　宮本乙巳
長野縣廳內信濃海外協會內　笠井康
森消防組頭　中條清三
御厨消防組頭　松本義雄
眞嶋村　吉田芳雄
八幡村　和田酒店
川中嶋產婆　西澤かつの

小市稱名寺代理　海野玄英
御厨村　馬場今朝五郎
同　酒井龜之助
御厨村長　寺嶋織之助
同　助役　林權五郎
川中嶋村　野本利二
清野消防組清野部　田口泰藏
上水郡內長　倉石織治
長野市中御所　杵淵唯喜
西寺尾村長　甲州屋本店
長野市　轟宇三郎
長野市石堂町　松本敬三郎
川中嶋村　小林玉峰
信濃消防新聞社主幹　伊藤清治郎
篠ノ井町　柳澤知治
長野稅務所庶務課長稅務署屬　宮下謙多
青木嶋大綱消防組頭　福嶋樂治商店
長野市千歲町二一　市川又右工門
青木嶋消防組頭　長谷部肇
株式會社長野實業銀行坂城支店　矢田鶴之助
小嶋田消防組
更級農學校長

長野市書記　清水周衞
長野市收入役　倉澤與吉郎
日本共立生命保險株式會社信越主任　佐藤仁作
稻里村　神林光顯
長野市問御所　池田元吉
長野縣警察部警部補　戶谷信美
信濃每日新聞記者　西村長次郎
通明小學校長　小林正美
御厨小學校長　中嶋三之助
警察部保安課勤務警部　日向政助
警察部長長野縣書記官　竹下豐治
清野村消防組
寺尾村消防組
小嶋田消防組
新橋消防組
下宮野尾消防組
賴脇消防組
御厨村消防組
信里村十二消防組、犬石防防組、秋古消防組、村山消防組、有旅消防組
小田切村深澤消防組
西寺尾消防組

川中嶋消防組
更級村羽尾建築業　柳澤久治郎
戸倉驛前　中澤鐵衛
電報　山本愼平
長野工區主幹　田中大作
上田市松尾町　曾根喜代次郎
大英寺住職　若林隆道
御厨村會議員　町田忠治
屋代町分會　北澤新太郎
八幡村青年會　萬富次郎
横須賀ホテル　栗林祐治
川中嶋村　田嶋準一郎
地方課社會課縣屬　田中富作
地方課長　竹内莊三郎
更級郡聯合軍人分會長　會澤文吉
稲荷山町　日原村長
埴科郡五加村　萩野貞亮
長野市西町　柳澤三郎
電報見舞　清水筆治
力石村長
桑原村長
鹽崎村長

眞嶋村長　三俣直治
川柳村長　南澤源之助
稲里村長　中嶋弘馬
川中嶋村長　川島和三郎
西寺尾村長　杵淵唯喜
東福寺村長　福島福茂
稲荷山町長　小出五十二
信田村長　西村儀太郎
大岡村長代理　花形嘉明
更級村長　宮崎運之助
御厨村農會長　馬場信知
同　技手　渡邊至誠
稲荷山分會長　宮坂精一郎
長野市 } 料藝組合　小宮山幸吉
同 }　長澤兼太郎
同　山崎喜三郎
青木鳥婦人會長　小出重基
上田市踏入一一九一番地建築請負材木販賣業　瀧澤賢一郎
信濃裁縫女學校長　土谷寅太郎
埴科實業學校　市川清忠
長野縣立農事試驗場地方農林技師　藤原玉夫
長野縣立農事試驗場　小林唯雄

東京市赤坂區青山高樹町　五明正
篠ノ井町玆光婦人會　池田智雄
八幡村武水別神社々掌　宮澤素一
更級郡八幡村　宮澤軍三郎
篠ノ井町青年會長　大日方祐三郎外百三十人
埴科郡五加村内川消防組
部長瀨在豊雄、部長代理嶋田文五郎
雨宮縣村分會長　平林茂樹
同　村長代理　近藤專治
同　塚本右門
埴生村商工會　柳澤正雄、近藤盛次郎、永坂家藏
信濃日日新聞篠ノ井特派員　岡崎勝治郎
信里村長　風間重義
純水館屋代製糸場　小山精一
稲荷山八日町　泉庄吉
戸倉村農會長　小出勇雄
長野市西町　竹内福太郎
純水館工場　丑丸等一郎
長野市石堂町　甕塲玉吉
榮村農會技術員　大峽早苗
雨宮縣村　安藤晴美
東京市牛込　五明砂

北安曇郡大町ニテ　越川輝亥
東京市淺草區小嶋町ニテ（クシ一箱）　岡澤直生
赤坂近歩三ニテ　S
下伊那郡飯田小學校　掛川良平
須坂町役場内　役場員一同
上高井郡仁禮村婦人會員
信濃勞働組合理事　原山猛雄
土木建築請負業信越勞働組合理事　中瀨幸吉
青木島村　深澤貞雄
長野縣警務課　細田初治
長野縣農會幹事　三木俊夫
篠ノ井在勤大岡巡査部長派出所　伊藤方成
下高井郡夜間瀨村長代理　降旗太一
長野縣廳農林主事補　岡田主事
更級郡醫師會長　堀仁一郎
信聯組合書記　曾根川元衛
長野縣技師　鹽野屋剛哉
篠ノ井町更北菓子組合　岡澤多六
同　東方正二
眞島村前淵大正會長手紙　三井幸康
信里村　小出鶴太郎
埴科郡戸倉村青年會

長野縣愛國婦人會支部長　梅谷さと
稲荷山町長　小出五十二
桑原村青年會長　秋里龍男
埴科郡倉科村長
同　青年會、婦人會、軍人會、村民一同
鹽崎村青年會長　原三郎兵衛
村上村長
上山田村、川柳村
松代町　日蓮講救濟會
同　南御安町
稲荷山町　元町天理教理生會更埴支會
村上村　村農會、消防組、軍人分會、青年會、尙武會支部、衞生組合、信講組合、同窓會、婦人會
桑原村　婦人會
長野市　綠町修養會
同　下岡田區　難波國太郎
稲荷山町　睦友會代表依田棒一郎外拾八名
上伊那郡宮田村　岸本與
上高井綿內村　大橋青年會
長野市綠町　第四ノ組ヨリ第六ノ組マデ
埴科郡埴生村　打澤青年會
稲荷山信用組合
東福寺信用購買組合
上水內郡小田切村信用購買組合
上水內郡外樣村　慈善會
埴科郡　佛教護國團代表者
同　森村　禪秀院
同　坂城町　滿泉寺
信里村農會代表
上水內郡小田切村　西澤魚店
更級郡八幡村長　南澤庫司
同　八幡村婦人會長　中津吉郎治
同　八幡村青年會長　宮川勝
上高井郡豊洲村長
埴科郡中之條村長　塚田順

救護日誌

四月廿一日
午前六時役場內に於て罹災救助善後策の爲村會議員（岡田區選出）寺澤村農會長林部產業組合長常設委員區長等の會同を求め罹災救助方法の打合を爲し區長常設委員等は現場に此際用水路の浚泄罹災民救助バラック建築等の爲出張す

郡役所より淸水郡書記、宮澤郡書記、北村郡書記等應援の爲め來村救護方法の打合を爲す各係分擔事務を別紙の通り定め各依囑す
バラック建築希望者取纏及び避難者狀況調査の爲め村會議員一同及び農家小組合長數名現場へ出張せり午後四時の汽車にて村會議員仁科周平　原田宇吉の兩氏バラック注文の爲め小諸町へ出張せり
救恤品　見舞金　見舞者多く役場及び出張所（野口高之助宅）に於て係員忙殺されつゝあり電燈會社に於て無料電燈線の引込を行ひつゝあり
伊勢社御神木は今尙燃つゝあり尙各戸燒跡にも火の氣多き爲め灰片付を二十二日に延ばし極力消火に努めつゝあり　來援の消防組及び各種團体左の如し

四月二十二日
昨日に引續き救護事務を開始
總務部　大澤村長　寺澤村農會長　林部產業組合長　村會議員小林松助　岡澤收入役　小河原鑪松書記　森書記　寺澤英雄　越川庚　村會議員仁科周平執務　被害高調査　見舞者の應接　救恤品の受領等をなしバラック材料購入の爲め村會議員小河原欽治及原田宇吉を丸子方面へ派遣す
更級農學校生徒貳百五拾六名跡片付の爲め應援として職員十名引卒來訪御手傳を受く
郡內各町村長一同見舞に來訪せらる
光林寺　玄峰院住職來場
林部產業組合長を郡產業主事補と俱に縣產業組合聯合會へ低利資金融通を受くる爲めに派遣す
學校職員一同青年會等救恤品の配給を斡旋せらる

四月二十三日
前日に引續き各分擔事務に應じ午前六時より業務を開始活動す
午前十時小林更級郡長は罹災者各戸に對し見舞の爲め現場に　大澤村長　寺澤村農會長　林部產業組合長と俱に各戸を訪問午後四時漸く一巡
學校に避難せる久保田きせ　久保田宅意家族總計五名は本日引上ぐ
罹災跡に簡單なる小屋掛四五及びバラック五六各所に建設せられたるを見る
午後四時　村會を招集し協議會を開き臨時救護會を設け委員長に　寺澤農會長を推薦し　村會議員其他を委員となす尙別頁救助規程を設け本規程に依り實行することに申合せたり尙小河原　平林の兩委員を佐久方面へ出張を乞ひ材料の購入方を命ず松位材木店にバラック材料參拾口分註文す

衣類食料品其他日用品の配給を小學校職員及び學校生徒を依囑して之れを行ふ
同日バラック材料等は二十四日に分載せり　蒲團不足分購入の爲め前日の委員に托し購入す

四月二十四日

事務所と役場へ電話架設を縣警察部に依頼し取付たり
愛國婦人會更級郡幹事部總會へ出席に就ては此際遠慮すべき樣通知を發す
衞生狀態に就いて更級郡醫師會長堀醫師に總てを囑託したり
事務員として臨時　寺澤善治氏を依頼したり配給主任者として助役福井邦友氏を依頼す
養蠶飼育　種子蒔の方法及び普通農業の將來施設に關して縣農會に依頼を爲し道路網の計畫を作らんとす
農村振興の一方策として住宅は必要限度に止め公會堂の建設を企劃し之れが設計其他に就ては具体案を縣農會三木幹事に依囑す
救恤品給與台帳を作製す
出張所配給主任　福井助役　副馬場林治　事務委員　寺澤善治宿直臼田技手
配給係は各實行組合長の手に於て不足の場合は罹災せざる人等に托すること同日　原田委員松代町戸谷材木店にバラック材料參拾口分註文を了す
同日林部氏に依り稻荷山町杉浦桶店より風呂桶五個購入せり

四月二十五日

昨日夕方小諸よりバラック材料貨車一車到着に付き更級繭糸組合の自動車に中津木工學校に運搬し直に木工學校に作製を依頼し本日中に郵便局出張所　宮本義廣　庄田清作の三戸を建築せり
午後三時長野愛國婦人會長野支會長　梅谷さと子氏罹災者慰問の爲め來村せられたり

四月二十六日

羽黒下よりのバラック材料川中嶋驛に十三噸車一車到着に付き　平林委員は更級繭糸及び高野自動車に依り引取り運搬を了したり
久保田仲治氏に依り岡田區の大工を召集しバラックの建築に對しそれ〳〵準備に取懸りたり更級郡醫師會より眼藥及び興奮劑其他の醫藥の寄贈ありたるにより各罹災者に配付せり

四月二十七日

更級繭糸自動車及び高野自動車を雇入れバラック材及び配給品の運搬をなす
篠之井町職工組合より寄附職工申受く此人夫十九人村より大工七人出勤降雨の爲め篠之井町大工休業せりバラック關係及び物品配給關係係員全部出勤せらる
縣農會より尾崎他二氏農蠶業經營上に對し來訪せらる
郡衙より村松　越川二氏來所せり
段之原　岡田職工七名は終日降雨中にもかゝわらず作業せり

四月二十八日

午前八時三十分迄に左の諸氏事務所に參集す
寺澤種二郎　林部安十郎　原田宇吉　小林松助　仁科周平　山口新太郎　平林竹治郎　小河原欽治氏は罹災義捐金受領廣告の件に付新聞社へ料金交渉の爲め自宅より出張す
九時各自擔任の部所に就き活動を開始す
九時三十分上水内郡小田切村新橋西澤魚店主來訪金拾圓を義捐せらる
十一時三十分八幡村長南澤庫司氏同婦人會長　中津中澤吉郎治氏同青年會長宮川勝氏來訪多數の金品を義捐せらる
本郡農會より左の通り申越ありたり
蠶種は如何になりしか場合に依りては蠶種同業組合に於て五百枚位迄は心配出來得る旨之れに對し寺澤農會長の回答左の如し
目下の處損傷なし必要の場合には改めて御依頼すべし
午後一時松本蠶種株式會社技術員　北村竹雄氏蠶種の件に付き來訪之れに對する寺澤農會長の回答前同斷
一時三十分上高井郡豊洲村々長來訪金五拾圓を義捐せらる
同時新聞記者二名廣告の件に付き來訪協議の上回答することゝす
二時小河原欽治氏事務所に皈る
三時埴科郡清野村字岩野佛恩講總代來訪金拾參圓〇八錢を義捐せらる
左記事項協議會開催通知書を發送す（村會議員宛）
一、借家居住者に對し（バラック建設に關する件）
一、新聞紙掲載に付き
一、産業施設及び住宅建築に關する件
一、罹災者以外の方法に關する件
一、道路施設に付き
（イ）、借家者に對し簡易住宅を提供するは勿論なるも輕卒に提供することは後日係爭の恐あるを以て充分調査の上遺漏なき上に於て決定することゝす
（ロ）、の件は二十九日福井助役　小河原委員に交渉を托すること
（ハ）、産業施設の具体案及び住宅改良等は豫て縣農會に

囑託具体案提出後とす
(ニ)、後日に讓ることゝす
(ホ)、二十九日調査のことに決定す
バラック建築職工岡田段之原の諸氏七名終日作業す同上
請負人　船渡氏の職工三名配給事務所に宿泊當日「バラック」材運搬の爲め運送車三輛午後より小林三郎、西澤竹雄、平林袈裟太の三名内田高野並に繭糸組合自動車にて運搬に從ふ人夫七名從業す
四月二十九日
清水郡書記來所罹災救護金請求に就き
協議會決定に依り委員長と馬場氏と小松原區腰ノ手道路踏査協議の上小松原區長及代理者に對し早刻來所方を依囑す
桑接木移植の時機に依り大略調査の上郡農會及蠶種會社に向つて勞力應援希望の懇請を臼田技手に托す
高井郡須坂町明照會を代表し左の方々の慰問竝に同情金品を拜受せり
同會理事松倉專右衞門氏
權大僧都准補教大久保賢隨師
同會顧問小田切清之亟氏
簡易住宅請負者は丸子町船屋へ材料悉皆文取片につき同主任小河原氏立會の上代金殘渡す大澤技手長野市長原氏より櫻桃苗木木柿材苗木本西洋杏苗の寄贈を得たり
福井助役小河原氏新聞掲載の件につき信濃及長野新聞特派員と篠ノ井町に於て會見其要領左に
一、接衝地は長野市兩新聞社何れにか指定の場所に於てすること
前掲松區代理者兩氏來所道路兩側の關係者諸君へ測量標出込の理解を得可き勞を乞ひしに快諾所に三十日午前中終了の諒知を得て清水郡書記堀内技手に至急出張方を托す
四月三十日
午前八時（バラック）建築委員全部出動
寺澤委員長小河原村會議員信毎長野兩新聞社へ義捐金品廣告依頼の爲め出張す
本郡信里村婦人會長小林とみ外一名見舞として來訪
埴科郡森村軍人分會外五團体代表者見舞として來訪
同郡西條村長松山友之亟氏村を代表して見舞として來訪
農學校教諭及樋口郡農會技手春蠶飼育に關する件に付來訪埴科郡西條村川崎基次より種子關取二斗金砂糯一斗寄贈申込あり入用の場合は品受取方出張のこと但し糯のみ入用なれば糯にて三斗にても宜しと糯種子戴くことに大澤技手を以て此の旨を通す
小松蠶具店より蠶籠運搬す參八枚同二百枚寄贈せらる

木工學校より（バラック）成工分受取方通知あり受取の爲め自轉車を用ひず羽黒下より柱類全部着に付篠ノ井町職工組合長へ明一日助力方の依頼狀を發送す
長野市各團体より自動車四台搭載同情品拜受す
五月一日
（道路施設上）豫定線踏査堀内技手外壹名及村會議員林部原田氏踏査路線は別表の通り（小田切　野口兩議員欠）
午後堀内氏の手に依り第一着手として腰ノ手路線測量に從事す從業者は堀内氏に托す（準備のため二時歸廳）
蘆崎村農會西澤技手農具等の寄贈あり
大澤技術員を埴科郡西條村川崎基次氏方へ糯種子及關取種子購入の爲め出張す
埴科郡東條村收入役小林稚治氏村を代表し見舞はれ同情品寄贈を得
同郡中條村長塚田氏村及各團体を代表同情品の寄贈を得
簡易住宅請負者南佐羽黒下吉本材木店より明日金員受收したき旨の電知あり
長野縣會より本縣農商課縣賞募集の移住者　住宅設計圖面備用方野口敬一郎氏より申出との件につき別紙の通牒あり
更級農學校後藤先生より愛知縣地方に使用せらる蠶箔調製送付せらる村會議員及關係者協議會を二日午後三時事務所内に開會の案内狀を發す
一、道路の件外數件
五月二日
罹災救助金の件に關して左記の如く清水郡書記の名に於て通知あり
等級の甲に對しては鍬鎌甕釜バケツ等を與へざること
（四拾八戸分）此金一九五、八四減額せらる
差引金八千四拾七圓貳拾錢也査定せらることに決定
梅谷知事慰問來場の報あり時刻未定
堀内技手來所の上現場測量に從事（人夫四人從業）
原田委員信濃木工學校へ材木等運搬處理上につき打合の爲め行く
午後梅谷知事慰問現場一覽同行者栗林屬更級郡篠ノ井警察署長同署長より署員一統を代表し同情品の寄贈を得たり
羽黒下興志本合資會社へ「バラック」料金殘額支拂ふ
一、トタン板貳百五拾枚、參百五拾枚
一、二寸五分釘一樽
一、一寸二分釘一樽
右古澤商店へ明三日午前八時當方より自動車にて注文す
篠ノ井町役場へ職工方明三日出場の勞を得たき旨依頼す

當日協議事項

一、道路の件

前日の踏査線につき堀内技手を煩はし路線は左の五線とす

(1)腰の手線　(2)福井有本氏前の線　(3)馬場林治氏前の線　(4)飯田良隆氏宅より貫通する線　(5)久保田宅薫氏前山地往還の線

以上路線は調査に止め實況につきては後日に留保す

二、情寄消防組消防手中の重輕傷者慰問金は村長一任

三、繭糸利用販賣組合寺澤書記及應援自動車及運轉手手當等村長一任

四、蠶籠は競賣を以て希望者に分讓のこと

五、野口榮雄氏寄贈の籾は一時繭糸内農業倉庫に保管を托すること

六、野口高之助氏方謝禮金五拾圓とすること手當共人夫は壹人當金壹圓參拾錢とす

七、松本和市氏寄贈の材は調査の上競賣に付すること

八、事務所（松所在）

九、議員等出動の件（議員等に日割決定一任）

本郡中津村北原三宅理髮店は從業者一人引卒罹災者の無料理髮に從はる（大人小人計百五拾人）

五月三日

堀内技手前日に引續き作業

中津村貝澤戸澤金太郎氏は火災の當日惠與の握飯につき照會（中津村より寄贈白米一俵の由）

長野市大字返目小根山乙吉氏等より蠶種分讓之申込ありしも目今の狀態は差障なきも萬一之場合には御願す可く其際要求を達せらることに回答す

小縣郡長瀬村白井多三郎阿澤壽太郎兩氏より建家賣却竝に建具代價　送　郵券

小諸町島田材木店之來所同材木につきては時機相當渡し結果當方にて調達の材もある故に精算は兩三日延期の旨を講述承諾を得内金壹千圓渡す

追加材代金壹百五圓六拾錢

寺澤金物店へ購入代金として壹千圓渡す

本郡八幡村志川小松蠶具店へ蠶籠送渡し案内狀を發す

寺澤金物店へ「トタン」板一一四枚一寸二分釘一樽注文狀を發す

埴科郡坂城町市川清雄氏へ蠶種無償提供方申越され二つ挨拶狀發す

靜岡縣駿東郡清水村東京モスリン紡績株式會社沼津分工場内宮澤茶惠嬢外參拾壹名の方々へ禮狀を發す

五月四日

松本和市氏寄附の杉及落葉松材競賣を告示す材木種別別

表の通り

衞生組合長副長會を五月五日午後開催の通知を發す

五月五日

配給品中米のみ最高限定日を參拾四として一週間分のみを剩す此配給者區分は配給者主任及松區の議員各位に一任す

味噌及醬油は全部配給濟尙寄贈物品少量のもの例へば古蠶籠一三〇繩網裝敷物等は適宜接配の上配給のことゝす

以上の情況によりて貳日決定の事務所移轉は徹廢のことに諒解を得たり

簡易住宅は百二十四を以て打切りとす

住宅提供以外の罹災に對しては曩に決定の住宅提供規定を準用す參拾四戸人別は別表の通り保健上に對し午後衞生組合副組長會を開く目今借用使用しつゝある（小屋）は村に於て買受のことに決定す（出席福井助役馬場瀧澤坂田小田切野口(藤)小林山口外に松區長瀧澤代理者久保田氏

トタン板參百枚（寺澤へ注文す）

參學校より借受けの「シート」は洗濯の上返却すること

小松蠶具店主來所注文の蠶籠に逐次送付のことを依頼し尙莚及棚竹相場を承知す

一、莚下等品壹圓八九拾錢上等貳圓壹貳拾錢地下留め貳圓三四拾錢より貳圓五拾錢

一、棚竹貳間もの貳圓又は壹圓八拾錢二十本入

參間ものは拾本壹束貳間半は拾五本束九州產來口九分乃至一寸貳間もの貳圓參拾錢

右何れも役場着の値

中津村堀仁一郎氏來所厚き同情を相受く尙溜水及井戸消毒につき（漂白粉使用）チフス豫防注射につき七日午後七時假事務所内に於て產業上につき罹災者總會を開設す

特に實行組合長及農家組合長には萬障一排出席を要望す

松代町長代理書記長谷川政夫氏慰問

松本氏寄贈の木材開札の結果左記の通り（材積別表の通り）

一金壹百參拾七圓七拾錢　海沼豊松氏

一金壹百貳拾參圓五拾壹錢　唐木田宇多治氏

一金壹百拾五圓也　中澤菅次郎氏

海沼氏に競落受書提出濟

衞生組合長會開催渡邊聯合組合長野口清水丸野阿部巡査出席

協　議　要　項

一、春季清潔法施行期間五月七日より九日まで三日間

二、成績巡檢日及巡檢區域五月十日拾一日岡田區拾貳日拾參日小松原區

附巡檢と同時に每戸健康調査を行ふ
三、健康調査の際左の事項を注意す
（イ）、飲料水の消毒同覆蓋のこと
（ロ）、腸チフス豫防注射の件
右二件は各號組長に囑托して勵行を圖る
四、濕地不潔の個所には石油乳劑を撒布することを奬勵す
漂白粉（クロールカルシューム）拾匁を（ビール瓶）に溶き約五石の水に對して拾回に撒布す時刻は午前九時前後乃至拾時頃）
稚蠶飼育に關し郡是蠶種會社技師宮下氏來所小林、山口氏出勤
五月六日
本郡鹽崎小學校長及軍人會青年會代表として來所同情を拜受す
南安有明村野月清三郎氏へ蠶種につきて挨拶狀を發送す
消防組頭及岡田部長來所臨時夜警の件につき（通水止のため）來所
下水内郡溫井青年會より蓑八拾枚寄贈㊀の手を經て發送の案内あり
午前九時開會出席者五拾六名福井助役の火災配給の狀態につき農會長より災禍につき今後御互に執る可方針尙焦眉の急に迫りつゝある稚蠶飼育等につき大澤技術員稚蠶飼育並に蠶具等につき別表につき詳細說明の上明日中に該表に記入の上農家組合長へ提出方依託種々御話あり尙林部組合より此際更始一新總ての施設か共同的ならざるべからざるを力說加之組合員と否とに係らず此際此時盡力す可く言明蠶具等購入金は總て組合に於て代行の言明あり閉會午后拾壹時半剩餘桑葉も出來得る限り販賣の旨言明す
五月七日
數量の關係上配給し得ざる寄贈古蠶箔壹百貳拾六枚糸網壹分目—四分目繩網空俵拾參俵等競賣に附す開札の結果金貳拾貳圓五拾錢にて福井邦友氏に競落代金受領山口仁科馬場等に建設の簡易住宅一巡
上高井郡小布施村より同情を拜受す
大澤技術員を八幡村志川小松蠶具店へ蠶具等の爲め煩はす
堀醫師會長より危險の井水を淸淨ならしむる漂白粉使用の旨傳命刷書受領す
五月八日
嶋田材木店へ木材代金殘本月拾日支拂の案内狀を發す
海沼氏より競落木材代金殘壹百圓受領兩角代理收入役の手に於て佐賀縣農會募集の農村住宅設計圖一部割愛の書

狀を發送す
戸谷材木店へ簡易住宅料金殘壹千七百五拾圓也渡濟
篠ノ井唐澤屋へ購入代金支拂ふ金九拾九圓廿六錢
甲州屋材木店椴板及腰高障子四拾本代金貳百圓也支拂
收入役鹽崎村消防手及運轉手負傷につき慰問金贈呈の爲め出張
稚蠶依託飼育及蠶具農具等斡旋希望者の數量調査に着手
五月九日
小松蠶具店より蠶箔五百枚入手店主の希望にては曩に注文せし五千枚は本月末日迄に引渡追加分は六月貳拾日迄に引渡し度き旨ありしも其日時にては需用者の困却あらんと信ず依つて日時の繰上の要望何れ大澤技術員歸所の上は相談の上一應申入る可き旨尙追加數量は壹兩日中に締切りの上確答すべく挨拶を與ふ「スクラ」台壹百枚金六圓參拾錢着相場
（折ス）代價壹百枚分壹圓五拾錢（着相場）大澤技術員
稻荷山町桶屋へ肥桶等注文の爲め尙上田市蠶具店へ
上高井郡井上村大字福嶋竹内源之助氏より蠶種五枚と拾四蛾寄贈あり
郡是蠶種會社宮下技師來所希望蠶種白又は黃稚蠶飼育の蠶種は白又は黃か取調方依託あり唐箕代價照會松代町西澤勇次郎氏へ
組合へ保管の白米壹俵配給所へ送る
五月十日
小松蠶具店へ見本調製の件及追加蠶箔參千枚の通知を發す
嶋田材木店及稻荷山町角一金物店及岡田大工職工久保田仲治氏へ工賃支拂
明拾壹日午後一時事務報告の件につき協議會開催の通知狀を發す
馬場氏と同道簡易住宅一覽す
若林蠶網店より出荷案内により運賃當方拂のこと
大澤君縣農商課より移住住宅設計圖案備入歸所
五月十一日
上高井郡井上村市川恒雄氏より蠶種八枚の寄贈あり
上水内郡神鄕村野黑重與村田左一兩氏より蠶種二枚の寄贈あり
上高井郡保科村養蠶組合長來所蠶種の件につき本村松坂辨之助氏より罹災者へとの趣旨を以て金五拾圓拜受す
長野市各區より同情金を拜受す
篠ノ井町より同情金壹千八百圓也寄贈申込あり
委員總會開催（原田委員欠）
一、殘材及障子並に板亞鉛鐵板壹百枚等處分（庵室式建設とし貳等分して領與すること

一、借入「バラック」處分ノ件（一金五拾圓として）
一、衣類壹百點處分の件
配分不足の疑あり委員精査の上配分のこと
一、今後の米配給に關する件（精査の上機宜を誤らざること（委員の手にて）
一、篠の井町職工組合長へ金五拾圓慰勞（同職工組合）
一、村職工へ金參拾圓の慰勞（久保田仲治氏へ托配分のこと）
一、丸子町船渡氏職工金拾五圓也（船渡氏へ托）
一、戸谷職工金拾五圓也（戸谷氏へ一任）
一、亞鉛鐵板張職工慰勞「バラック」一口に對し金參拾錢當りのこと職工は長野市米山(5)川中嶋村秋山(3)人
一、繭糸貨物自動車運轉手一日金拾圓當りのこと
一、本村高野自動車に對しては依頼せし請求料金により て慰勞金決定のこと村長委員長限りに於て
一、事務所借入（野口高之助）家賃金貳圓同家兩人雇人壹日兩人にて金貳圓として總括金八拾圓とす
一、書記手當は壹日金壹圓五拾錢とす
一、寺澤繭糸書記へは金拾圓とす
一、兩庵室建設資金補助として金壹百圓宛贈呈として豫て御定の配給規程に準據調査の上決定の上支給のこと委員として林部馬場野口(權)瀧澤氏に一任

左の諸氏へは感謝狀に記念品料金拾圓添付贈呈のこと
一、信濃木工學校甲州屋、船渡、與志本、嶋田、戸谷
一、役場員農會技術員學校等は後日に讓ることとす
五月十三日　晴　南風强
小縣郡依田村役場吏員及學校職員罹災見舞とし來場義捐金を惠まる
五月十四日　晴
野口高之助中村太一久保田仲治氏慰勞及謝禮
五月十五日　晴
亞鉛板職工秋山及「バラック」請負者戸谷及船渡へ慰勞金を
五月十六日　晴
日本赤十字社長野支部より同情を得
埴科郡埴生村大字櫻堂兒童農園代表者田中菊太郎罹災者見舞として義捐金を贈與せらる
上水内郡旭山阿彌陀堂住財春蠶種を持參して來場
五月十七日　晴
篠ノ井町職工組合長「バラック」禮會瀧澤賢一郎氏へ
五月十八日　晴
蠶籠　席ネコノ渡し方
五月十九日　晴
記事なし

五月二十日　晴
八幡小松蠶具店より蠶籠三一〇枚着
長國寺主催にて天照寺内に鎭火法要を施行す菓子料として金貳拾圓提出す
五月二十一日　降雨
村長馬場林部氏と貳拾參日午前一時委員會開催今後に對する萬般の協議をなす
五月二十二日　曇　小雨
前日の協議に基き午後一時委員會開催の通知を發す收入役出張し木工學校へ金四百圓の假渡す
五月二十二日　降雨
協議出席委員（野口權内氏野口藤伊氏事故欠）
一、同
一、同情金今日迄入手の金額報告經費支出の現額報告
一、神社復興費資金として支出の件
一、公會堂建設費として支出の件
以上罹災者總會開催協議の決定のことに定む
一、同情金分配第一期金壹萬五千圓と決す
分配率は左の率を基準とす
一、平均割四分資力割參割人頭割參分とす
資力割は曩に決定せし九階級を五等級とし前決議を二等級宛を合併し縣税等級額を基準とす（二、二、五三、三、五四ノ五等）
簡易住宅の代償金未收入等は交付金より差引交付のこと
一、罹災者以外左の諸氏へ慰問金を贈與のこと其額は金五拾圓以上壹百圓迄とし委員長に一任
野口榮雄　太田長重　唐木田宇多治　坂田茂一郎　松坂七藏　馬場林治の六氏
一、住宅を所有せさる罹災者へ同情金交付の件各率に依る分配金額の五割を交付すること其氏名左の如し
瀧澤喜四郎　庄田繁治　坂口まき　本戸寅吉　曾根原榮藏　水嶋留太　矢澤給治郎　吉澤繁喜　小山吉之助　福井とく　岡村牧治の拾壹氏
一、結末後粗宴を開き慰勞のこと
招待者等左の如し
學校職員、消防組頭及兩部長小頭軍人會正副會長兩區長代理者犀口組伍長及商工會正副會長常設委員農家組合長實行組合長參ケ寺院受持巡査衞生組合聯合會長及副組合長
委員及役場員一同
青年會及婦人會へは金拾圓贈呈のこととす
配給殘品「メンネル」單衣及反物配給は配給主任へ一任
一、同情金分配査定表等は助役福井氏に一任のことに同

氏の快諾を得たり
一、野口藤伊氏受持下に衣類配給不足の人二戸ありとのこと福井助役に調査方を托す
一、寄贈鍬配給のこと
五月二十四日
繭糸利用組合へ玄米代金支拂併せて貨物自動車賃として金壹百圓也運轉手等に對し金五十圓也慰勞として甲州屋へ材木荷揚料支拂
甲州屋運送店及高野貨物自動車部へ慰勞金を呈す
五月二十五日より二十七日記載すへき事項なし
五月二十八日
新衣類其他配給のこと
五月二十九日より三十一日迄
記事なし
六月一日
義捐金配給（第一回）
六月三日
火災見舞金品の受領謝禮廣告料信濃毎日長野兩新聞社へ支拂
金貳百七拾圓九拾錢宛
（千八百六行　一行拾五錢
長野新聞社より見舞金五拾圓受領

六月六日
小松原道路改修に關する協議會
出席者野口權內、福井邦友　原田宇吉
午前八時開會
一、松區委員に依頼して腰ノ手道路敷買收すへく決定
一、公會場新設神社復興費支辨は大に研究を要するを以て宿題とす
午後十時閉會
七月十八日
委員會開催出席委員瀧澤、馬場、坂田、野口（權）、野口（藤）、福井委員、平林、小河原、仁科、山口、原田、（欠小林、瀧澤區長、久保田副長）
本日までの同情總額及支出總額を調簿に依りて承認を得
一、神社復興資金として提供金額
金五千圓と決定（其殘額より　支出の　金引拂の上殘金は配付のこと共率は第一回の率に據ること）
一、公會堂建設の件
廢案と決定
一、救護等に關係せられし各種團体員慰勞會開催の額一人當り金壹圓と決定
一、同情金品印刷配付の件
印刷に決定村內一般と本部各町村役場へ配付

一、慰勞金及小宴會費並に支出の上精算殘額は神社へ寄贈のこと
一、本月二十五六日までに配布を了すること
一、罹災者以外の家屋を調査すること
委員全員本月拾九日午前九時馬場氏宅參集
一、配付調査は福井助役に一任す
一、寄贈の障子拾本風呂桶五本は拾九日相談に決す
七月二十五日
小松原に於て競賣施行
寄贈障子拾本風呂桶五本競賣の結果落札者左の如し
風呂桶　金貳拾五圓　坂松福太郎
同　金貳拾參圓五拾錢　野口藤伊
同　金貳拾八圓四拾錢　飯田藤太
同　金貳拾五圓五拾錢　內山定吉
同　金貳拾六圓五拾錢　坂田與四郎
障子拾本金拾參圓拾錢　同　人
計金百四拾壹圓八拾錢
七月貳拾六日
小松原委員より右の通り報告ありたり
一、準罹災者調査洩の調査決定
慰勞金五圓　金子甚作
同　內山せき
同　野口政之助
同　飯田捨雄
右以外は慰勞金支出の必要なき者と認む
一、救護關係者慰勞金は見合せられたきこと
一、前日競賣の結果前の通り
八月三日
北佐久郡岩村田町青年會長阿部良太郎氏より見舞金百四拾五圓拾錢寄贈ありたり
八月八日　（欠席者瀧澤主計）
左記の件に付午前十時協議會開催
一、神社復興資金五千圓は提出見舞配給ありたき旨有志總代より申出に關する件
其の他數件
八月九日　（全員出席）
前日繼續協議會の結果總代申出の件容認其旨總代に報告す
八月拾日
第二回配給完了す
八月十八日
午前十一時より同情金收支決算報告會を開く
出席者　委員（馬場林治欠席）
外岡田區長同代理者出席
八月二十三日

同情金殘金全部配給

八月廿四日

村全体へ見舞金品寄贈芳名錄配付

村有力者へ同情金收支決算書配付

總　務　部

村長　寺澤農會長　林部產業組合長

森書記　村會議員一同

一、救護事務の總手配指揮命令

一、見舞者の應接

三、記錄日々の記錄記入

見舞者名簿作製、記錄簿作製

四、出場人員調査台帳作製記入のこと

五、受附（救護品の受附を總務部に持參せるものを本部にて受附のこと台帳調製記入のこと

會　計

岡澤收入役　助手村會議員小林松助

一、金錢出納　罹災救護金會計帳簿作製

二、物品購入台帳

各掛へ購入帳作製主任者へ交付點檢し台帳へ記入のこと

三、出場人夫調査

調査の上台帳へ記入のこと

救護品受領保管配給係

兩角書記　小河原書記（義男）　大澤技手　臼田技手常設委員　區長　農家組合長　隣接町村青年團　軍人分會員

應援　郡役所員　小學校教員

一、救護品受領

台帳記入係　收入役　兩角書記

救護品分類保管係　小河原書記　常設委員

二、救護品の配給

米（食物）　區長臼田技手　宮下（常）　兩角（常）　大澤（常）

副食物（味噌醬油罐詰類）　大澤技手　嶋田（常）　寺澤（常）

湯茶及水　常設委員小林　農家組合長全員

寢具衣類　農家組合長

炊事用品　農家組合長

學用品　校長及青年會長

村會議員

仁科周平　小河原欽治　平澤竹次郎　山口新太郎

常設委員　清水寛之助

農家組合長

寺澤準四郎　仙田經雄　林部辰雄　磯貝条治

一、罹災者の收容に全力を注ぐこと

1、殘存の民家寺院等に收容すること

2、收容と同時に罹災人名所在を確め置くこと

3、臨時罹災者收容に要するシート天幕莚繩等の必要數を調査し材料其他居住場所の斡旋を爲し寢具衣類等の調査（必要）概數報告のこと

復興委員

一、委員長　寺澤種二郎

一、副委員長　馬場林治

購買委員　小河原欽治　原田宇吉

建築委員

南組　山口新太郎　久保田義三郎　仁科周平

中組　瀧澤主計　瀧澤鶴治　坂田袈裟治　小林松助

北組　野口權內　平杯竹治郎　野口藤伊　小田切良作

罹災家族人員調査表

調査上必要有之候條貴組合員現住家族人員ニ對シ別紙事項特急精査御取調ノ上本日午後二時迄ニ必ズ當役場出張所へ御報告相成度此段及御依頼候也

四月二十六日

第　號衛生組合長

殿

共和村役場

家族年齡別ニ依ル人員

氏名	男女別	自一歳至四歳	自五歳至七歳	自八歳至十二歳	自十三歳至十五歳	十六歳以上	計	男女計	摘要
森和重郎	男			二	一	二	四	九	
	女			一	一	三	五		
石黒才治	男	一	一	二			四	六	
	女					一	二		

坂田卓二	男	二	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
石橋安松	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
庄田茂雄	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
野口忠次郎	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
野口權内	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
庄田傳治郎	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
福井邦友	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
福井睦治郎	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
野口近治	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
福井有本	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
野口渙治郎	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
野口惣吾	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
野口兵治郎	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
庄田今朝二郎	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
野口繁治	男	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

野口俊治	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
野口薫	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
塚田幸治郎	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
飯田浦之助	男	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
太田時男	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
福井やす	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
吉田甚助	男	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
太田鷹治	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
野口藤伊	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
野口延治郎	男	一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
酒井市治	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
宮内儀作	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
宮内竹三郎	男	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
内兎良光	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
塚田瀨寡太	男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

飯瀧野唐瀧松坂内山野吉岡酒山岡
田澤木田澤坂田山田口岡村井田村
政之龜良太之道翠定龜文長俗才三寅
吉助作郎進治治吉治鹿藏治治郎藏

| | | |

瀧澤利作	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
瀧澤幸四郎	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
坂田まき	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
庄田繁治	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
曾根原榮雄	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
矢澤給治郎	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
松坂福太郎	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
水鳥留太	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
酒井袈裟太郎	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
吉岡熊太	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
本戸寅治	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
山田寛治	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
瀧澤瀧治	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
山田陸之助	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
太田鶴太	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

山田清吉	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
山田常右衛門	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
高野榮二郎	女男	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
飯田良隆	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
山田行太郎	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
瀧澤專吉	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
宮本義廣	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
坂田禮	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
堀內米太	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
飯田保	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
高野與一郎	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
高野角之助	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
瀧澤嘉久太	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
德永茂作	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
瀧澤好	女男	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

福井安太郎	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	六
唐木田友彌	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	四
飯田國之助	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	四
小出貞幸	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	七
小出重作	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	七
小出寅太郎	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	六
松坂廣太	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	五
清水鶴治	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	三
松坂義男	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	五
町田一太郎	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	六
飯田種吉	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	七
馬場時重	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	七
飯田慶作	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	六
吉岡袈裟雄	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	四
坂田友伊	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	六

横本つな	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	一
小出はない	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	三
吉澤繁貴	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	三
長田文作	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	五
瀧澤純之助	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	二
瀧澤淺太夫	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	五
吉岡福之亟	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	七
飯田新吉	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	三
庄田清作	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	八
馬場良之助	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	六
庄田肇	女男	二一	一一	一一	二二	二二	二四	九
町田植太郎	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	六
松坂兼治	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	七
福井佐市	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	四
飯田藤太	女男	一一	一一	一一	二二	二二	二四	六

| | | |

罹災同情金配頒表

戸別平均割	家族人員	罹災人員割 人員數	罹災人員割 付交額	資産割酌 標準	資産割酌 交付額	交付額	罹災者氏名	備考
四一、八〇円	二名	八名	四五、九二円	四、〇円	三二、〇八円	二九、八〇円	森和重郎	
四一、八〇	九	七	四〇、一八	四、〇	三二、〇八	一二四、〇六	石黒才治	
四一、八〇	四	四	二三、九六	四、〇	三二、〇八	九六、八四	石橋安松	
四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	坂田卓二	
四一、八〇	六	六	三四、四四	三、〇	二四、〇六	一〇〇、三〇	福井有本	
四一、八〇	三	三	一七、二二	三、五	二八、〇七	八七、〇九	野口權内	
四一、八〇	五	四	二三、九六	四、〇	三二、〇八	九六、八四	庄田茂雄	
四一、八〇	七	七	四〇、一八	三、五	二八、〇七	一〇〇、〇五	野口忠治郎	バラック補償料 三〇圓（未収）
四一、八〇	八	八	四五、九二	四、〇	三二、〇八	一二九、八〇	庄田傳治郎	
四一、八〇	六	六	三四、四四	三、〇	二四、〇六	一〇〇、三〇	福井邦友	
四一、八〇	四	四	二三、九六	四、〇	三二、〇八	九六、八四	福井睦治郎	バラック補償料 四〇圓
四一、〇〇	八	六	三四、四四	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	野口近治	バラック補償料 五〇圓
四一、八〇	五	五	二八、七〇	四、〇	三二、〇八	一〇二、五八	野口渙治郎	バラック補償料 一〇圓
四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	野口惣吾	
四一、八〇	八	八	四五、九二	四、〇	三二、〇八	一二九、八〇	吉田甚助	
四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	庄田今朝二郎	
四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	太田鷹治	
二〇、九〇	九	九	二五、八三	二、〇	一六、〇四	六二、七七	野口繁治	住宅無シバラック補償料 一〇圓

四一、八〇	八	七	四〇、一八	四、〇	三二、〇八	一二四、〇六	野口兵治郎	
四一、八〇	一〇	一〇	五七、四〇	三、五	二八、〇七	一〇二、五八	野口俊治	
四一、八〇	五	五	二八、七〇	四、〇	三二、〇八	一二九、八〇	野口薫	
四一、八〇	九	八	四五、九二	四、〇	三二、〇八	一〇二、五八	飯田浦之助	
四一、八〇	五	五	二八、七〇	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	塚田幸治郎	
四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三二、〇八	九六、八四	太田時男	
四一、八〇	三	一	一五、七四	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	福井やす	バラック補償料 一〇圓
四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	野口藤伊	バラック補償料 三〇圓
四一、八〇	九	八	四五、九二	四、〇	三二、〇八	一二九、八〇	野口延治郎	バラック補償料 五〇圓
四一、八〇	一〇	一〇	五七、四	〇	三二、〇八	一三一、三八	酒井市治	
四一、八〇	七	六	三四、四四	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	宮内儀作	バラック補償料 一〇圓
四一、八〇	七	七	四〇、一八	四、〇	三二、〇八	一二四、〇六	宮内竹三郎	
四一、八〇	四	二	一一、四八	四、〇	三二、〇八	八五、三六	塚田瀨喜太	
四一、八〇	一四	六	三四、四四	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	岡村寅藏	
四一、八〇	五	五	二八、七〇	四、〇	三二、〇八	一〇三、五八	山田彌三郎	
四一、八〇	六	四	二三、九六	四、〇	三二、〇八	九六、八四	酒井才治	バラック補償料 一〇圓
二〇、九〇	七	七	二〇、〇九	二、〇	一六、〇四	五七、〇三	岡村卷治	住宅無シ
四一、八〇	一一	八	四五、九二	四、〇	三二、〇八	一二九、八〇	吉岡長藏	
四一、八〇	五	五	二八、七〇	二、〇	一六、〇四	八六、五四	野口文廳	
四一、八〇	三	三	一七、二二	四、〇	三二、〇八	九一、一〇	山田龜治	バラック補償料 二〇圓
四一、八〇	七	七	四〇、一八	四、〇	三二、〇八	一二四、〇六	内山定吉	
四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三二、〇八	一〇八、三二	坂田袈裟治	バラック補償料 五〇圓
四一、八〇	二	二	一一、四八	四、〇	三二、〇八	八五、三六	内兎良光	
四一、八〇	一三	八	四五、九二	四、〇	三二、〇八	一二九、八〇	小山熊太郎	

四一、六〇	一三	九	五一、六六	二、五	三〇、〇五	一一三、五一	瀧澤安之進		
四一、六〇	七	七	四〇、一八	四、〇	三一、〇八	一一四、〇六	唐木田良太郎	バラック補償料	二〇圓
四一、六〇	六	六	三四、四四	四、〇	三一、〇八	一〇六、三二	野口春吉	同	三〇圓
四一、六〇	六	六	三四、四四	三、五	二六、〇七	一〇四、三一	瀧澤庄之助		
四一、六〇	四	四	三三、九六	四、〇	三一、〇八	九六、八四	飯田政吉	同	一〇圓
四一、六〇	六	六	三四、四四	三、五	二六、〇七	一〇四、三一	野口豊	同	五〇圓
四一、六〇	八	六	三四、四四	四、〇	三一、〇八	一〇六、三二	太田嘉	同	四〇圓
四一、六〇	四	四	三三、九六	四、〇	三一、〇八	九六、八四	小山利作		
四一、六〇	一〇	七	四〇、一八	四、〇	三一、〇八	一一四、〇六	太田丙作		
四一、六〇	三	三	一七、三一	四、〇	三一、〇八	九一、一〇	飯島雄	同	一〇圓
四一、六〇	七	七	四〇、一八	四、〇	三一、〇八	一一四、〇六	吉岡幸		
四一、六〇	八	六	三四、四四	四、〇	三一、〇八	一〇六、三二	松坂豊		
四一、六〇	九	八	四五、九三	四、〇	三一、〇八	一一九、八〇	小山雄		
一〇、九〇	六	二	五七、四四	二、〇	一六、〇四	四二、六六	坂田道		
四一、六〇	五	五	二六、七〇	四、〇	三一、〇八	一〇二、五八	小山幸治	住宅無シ	
四一、六〇	一一	七	四〇、一八	四、〇	三一、〇八	一一四、〇六	瀧澤信治	バラック補償料	二〇圓
四一、六〇	一〇	九	五一、六四	三、五	二六、〇七	一三一、五三	瀧澤鶴治		
四一、六〇	四	四	三三、九六	四、〇	三一、〇八	九六、八四	瀧澤國治		
四一、六〇	一〇	一〇	五七、四〇	四、〇	三一、〇八	一三一、二八	瀧澤喜久男	同	四〇圓
四一、六八	三	三	一七、三一	四、〇	三一、〇八	九一、一〇	瀧澤奥太郎		
四一、六〇	五	四	三三、九六	四、〇	三一、〇八	九六、八四	瀧澤譯利		
一〇、九〇	六	四	一一、四八	二、〇	一六、〇四	四八、四二	瀧澤作四郎	同	一〇圓
一〇、九〇	六	四	一一、四八	二、〇	一六、〇四	四八、四二	瀧澤喜四郎	住宅ナシ	
一〇、九〇	五	四	一一、四八	二、〇	一六、〇四	四八、四二	瀧澤藏治	住宅ナシ	

庄田繁治

一〇、九〇	八	七	一〇、〇九	二、〇	一六、〇四	五七、〇三	矢澤給治郎	住宅ナシ	
四一、六〇	一三	四	三三、九六	四、〇	三一、〇八	九六、八四	松坂福太郎	バラック補償料	二〇圓
一〇、九〇	二	二	五七、四四	二、〇	一六、〇四	四二、六六	水島留太	住宅無シ	
四一、六〇	六	四	三三、九六	四、〇	三一、〇八	九六、八四	吉岡餌太	バラック補償料	二〇圓
一〇、九〇	五	四	一一、四八	二、〇	一六、〇四	四八、四二	本戸寅治	住宅ナシ	
四一、六〇	一〇	五	二六、七〇	四、〇	三一、〇八	一〇二、五八	山田寛治		
四一、六〇	四	四	三三、九六	四、〇	三一、〇八	九六、八四	瀧澤瀧治	バラック補償料	三〇圓
四一、六〇	八	八	四五、九三	四、〇	三一、〇八	一一九、八〇	山田陸之助	同	二〇圓
四一、六〇	一〇	七	四〇、一八	四、〇	三一、〇八	一一四、〇六	太田鶴太		
四一、六〇	六	四	三三、九六	四、〇	三一、〇八	九六、八四	山田清吉		
四一、六〇	七	五	二六、七〇	四、〇	三一、〇八	一〇二、五八	山田常右衛門	同	一〇圓
四一、六〇	一二	二	六六、八八	四、〇	三一、〇八	一四二、七六	高野榮治郎	同	二〇圓
四一、六〇	九	九	五一、六六	四、〇	三一、〇八	一三五、五四	飯田良隆	同	五〇圓
四一、六〇	三	三	一七、三一	四、〇	三一、〇八	九一、一〇	山田行太郎		
四一、六〇	五	三	一七、三一	四、〇	三一、〇八	九一、一〇	瀧澤專吉	同	一〇圓
四一、六〇	三	二	一一、四八	四、〇	三一、〇八	八六、六六	坂宮本義		
四一、六〇	三	三	一七、三一	四、〇	三一、〇八	九一、一〇	坂田米		
四一、六〇	一〇	一〇	五七、四〇	四、〇	三一、〇八	一三一、二八	坂内禮太	同	二〇圓
四一、六〇	六	六	三四、四四	四、〇	三一、〇八	一〇六、三二	飯田保	同	二〇圓
四一、六〇	五	三	一七、三一	四、〇	三一、〇八	九一、一〇	高野與一		
四一、六〇	八	七	四〇、一八	四、〇	三一、〇八	一一四、〇六	高野角之助		
四一、六〇	六	六	三四、四四	三、〇	二四、六六	一〇〇、三〇	瀧澤嘉久太		
四一、六〇	三	二	一一、四八	四、〇	三一、〇八	八六、六六	瀧澤永茂作		
四一、六〇	九	九	五一、六六	三、五	二六、〇七	一三一、五三	瀧澤信人		

四一、八〇	六	四	三三、九六	四、〇	三二、八	九六、八四	福井安太郎
四一、八〇	七	六	三四、四四	四、〇	三二、八	一〇八、三二	唐木田友彌
四一、八〇	三	三	一七、二二	四、〇	三二、八	一一九、八〇	小出貞幸
四一、八〇	九	八	四五、九二	四、〇	三二、八	一〇八、三二	小出重作
四一、八〇	七	六	三四、四四	四、〇	三二、八	一〇二、五八	小出寅太郎
四一、八〇	三	五	二八、七〇	四、〇	三二、八	九一、〇八	松坂廣太
四一、八〇	六	三	一七、二二	四、〇	三二、八	一〇二、五八	清水鶴治
四一、八〇	九	五	二八、七〇	四、〇	三二、八	一二四、〇六	松坂義雄
四一、八〇	七	七	四〇、一八	四、〇	三二、八	一二四、〇六	町田一太郎
四一、八〇	八	七	四五、九二	四、〇	三二、八	一二八、八〇	飯田種吉
四一、八〇	四	八	三二、九六	四、〇	三二、八	九六、八四	馬場時重
四一、八〇	四	四	三二、九六	四、〇	三二、八	九六、八四	飯田慶作
四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三二、八	一〇八、三二	吉岡袈裟雄
四一、八〇	一	一	五、七四	四、〇	三二、八	七九、六二	坂田友伊
四一、八〇	四	四	三二、九六	四、〇	三二、八	九六、八四	横本ツナ
二〇、九〇	三	三	八、六一	二、〇	三二、八	四五、五四	長田文作
四一、八〇	三	三	一七、二二	四、〇	三二、八	九一、一〇	吉澤茂喜
四一、八〇	五	五	二八、七〇	四、〇	三二、八	一〇三、五八	小出はない
四一、八〇	二	二	二一、四八	二、〇	三二、八	六九、三二	瀧澤純之助
四一、八〇	五	五	二八、七〇	〇、	三二、八	一〇二、五八	瀧澤淺太夫
四一、八〇	七	七	四〇、一八	四、〇	三二、八	一二四、〇六	吉岡福之助
四一、八〇	四	四	一七、二二	四、〇	三二、八	九一、一〇	飯田新吉
四一、八〇	九	九	四五、九二	四、〇	三二、八	一二五、五四	庄田嘉平

バラック補償料 住宅無シ 一人行衛不明 四名寄留諏訪へ

四一、八〇	六	四	三四、四四	四、〇	三二、八	一〇八、三二	庄田肇
四一、八〇	四	七	五七、四〇	四、〇	三二、八	一三一、一八	町田植太郎
四一、八〇	七	七	三四、四四	四、〇	三二、八	一〇八、三二	松坂兼治
四一、八〇	九	七	四〇、一八	四、〇	三二、八	一二四、〇六	福井佐市
四一、八〇	三	六	三四、四四	四、〇	三二、八	一〇八、三二	飯田藤太
四一、八〇	一三	七	四〇、一八	四、〇	三二、八	一二四、〇六	宮尾常雄
四一、八〇	六	六	二八、七〇	四、〇	三二、八	一〇二、五八	久保田駒五郎
四一、八〇	六	六	三四、四四	三、五	三二、八	一〇四、三二	久保田義三郎
四一、八〇	六	五	二八、七〇	四、〇	三二、八	一〇二、五八	久保田喜市
四一、八〇	七	六	三四、四四	四、〇	三二、八	一〇八、三二	松坂慶作
四一、八〇	三	四	二三、九六	四、〇	三二、八	九六、八四	馬場チノ
四一、八〇	七	五	二八、七〇	四、〇	三二、八	一〇三、五八	久保田千松
四一、八〇	四	二	一一、四八	四、〇	三二、八	八五、三六	久保田長治
四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三二、八	一〇八、三二	小出本太郎
四一、八〇	三	三	一七、二二	三、五	三二、八	八七、〇九	久保田岩太郎
四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三二、八	一〇八、三二	久保田善一郎
四一、八〇	一二	八	四五、九二	四、〇	三二、八	一一九、八〇	清水多美衛
四一、八〇	四	五	二八、七〇	四、〇	三二、八	一〇三、五八	清水榮治郎
二〇、九〇	四	四	一一、四八	二、〇	三二、八	四八、四二	小山吉之助
四一、八〇	二	一	五、七四	四、〇	三二、八	七九、六二	鈴木周助
四一、八〇	八	六	三四、四四	四、〇	三二、八	一〇八、三二	小山莊三郎
四一、八〇	八	八	四五、九二	四、〇	三二、八	一一九、八〇	松本和市
四一、八〇	三	二	一一、四八	四、〇	三二、八	八五、三六	久保田治作
四一、八〇	三	四	二三、九六	四、〇	三二、八	九六、八四	福井莊

同 一〇圓
同 三〇圓
同 三〇圓
同 一〇圓
同 二〇圓
同 二〇圓
同 三〇圓
同 一〇圓
同 一〇圓
住宅無シ
バラック補償料 一〇圓
同 五〇圓
同 三〇圓
同 一〇圓
同 五〇圓
同 五〇圓
同 三〇圓
一人行衛不明
同 一〇圓
同 三〇圓
同 五〇圓
同 二〇圓
一名出産 同 一〇圓
住宅無シ
バラック補償料 二〇圓
同 五〇圓
同 一〇圓
同 一〇圓

四一、八〇	六	六	三四、四四	四、〇	三三、〇八	一〇八、三二	松	坂	同
四一、八〇	五	五	二八、七〇	四、〇	三二、〇八	一〇二、五八	秋	田	同
四一、八〇	七	七	四〇、一八	四、〇	三二、〇八	一四、〇六	松	藤吉	同
四一、八〇	五	二	二一、四八	四、〇	三二、〇八	八五、三六	清水兵藏		
四一、八〇	三	四	三二、九六	四、〇	三二、〇八	九六、八四	柳澤行之進		
四一、八〇	六	四	三二、九六	四、〇	三二、〇八	九六、八四	柳澤房太郎		同
四一、八〇	三	二	二一、四八	四、〇	三二、〇八	八五、三六	坂田菊治		同
四一、八〇	七	五	二六、七〇	四、〇	三二、〇八	一〇二、五八	松坂久		同
四一、八〇	五	二	二一、四八	四、〇	三二、〇八	八五、三六	渡邊宇一郎		同
四一、八〇	六	三	一七、三二	四、〇	三二、〇八	九一、一〇	久保田安之亟		
四一、八〇	三	三	一七、三二	四、〇	三二、〇八	九一、一〇	久保田宅意		
五、九九八、三〇	八〇九	四五〇、一六	算法上不足 〇、一六	四、四九九、三三	算法上殘 〇、七六	一四、九九七、六八	飯田國之助		同
算法上殘り 一、七〇						差引算法上殘 二、三三			バラック補償料
						一四九名			一〇圓
									一、七〇〇圓

總計　一萬五千圓

微災ノモノ左記ヘ見舞金頭書ノ通リ給與

七〇、〇〇円	野口榮雄		
七〇、〇〇	太田長重		
七〇、〇〇	唐木田宇多治		
七〇、〇〇	坂田茂一郎		
七〇、〇〇	松坂七藏		
七〇、〇〇	馬場林治		
七〇、〇〇	川中島村北澤健治郎		
計　四百九拾圓			

以上合計金一萬五千四百八拾七圓六拾八錢

一、一時的經濟關係により表面二戸の如く戸數割を担税せる者は委員會の決議に基き一戸と見做し交付金を査定す

該當者（瀧澤安之進　酒井市治　山田彌三郎）
（瀧澤主計　酒井袈裟太郎　山田隆之助）

一、從來家屋（住宅）を有せざるものには總ての査定額の半額を交付す

一、人頭割は現住者を本位とし現住者にあらざるものにも入營兵或は病氣治療の目的を以て一時外泊するもの又は學生にして父兄の扶助を受けつゝあるものには交付す

一、期節職業者（屋根葺）にして本村に常住せず尙罹災後も本村以外に於て居住し引續き就職しつゝあるものには同情金を交付せず（該當者　小河高次）

◎配分各部落配當

南組　金五千八百四十二圓十九錢
　内輕微の罹災者配分金貳百拾圓を含む
　内七百四拾圓　仮住宅料控除
　差引　金五千八百四拾八圓八拾壹錢

中組　金四千八百四十八圓八拾壹錢
　内微災者配分金七拾圓を含む
　内金四百八拾圓　仮住宅料
　差引　金四千參百六拾八圓八拾壹錢

北組　金四千七百九拾六圓六拾八錢
　内微罹者配分金貳百拾圓を含む
　内金四百八拾圓　仮住宅料
　差引　金四千參百拾六圓六拾八錢

合計　金壹萬五千四百八拾七圓六拾八錢也

◎同情金分配査定案總括

第一回配分總額金壹萬六千圓

一、戸別平均割金六千圓

一戸當り貳拾圓九拾錢宛　十一戸金二百二十九圓九十錢

一戸當り四拾壹圓八十錢宛　百三十八戸金五千七百六拾八圓四拾錢

計金五千九百九拾八圓三拾錢

二、人頭割金四千五百圓

一名當り五圓七十四錢　七百五拾九名金四千參百五拾六圓六拾六錢

一名當り貳圓八拾七錢　五拾名金四拾參圓五拾錢

計金四千五百圓拾六錢

三、資産割金四千五百圓

參拾貳圓〇八錢　百參拾貳戸　金參千九百四拾五圓八拾四錢

貳拾八圓〇七錢　九戸　金貳百五拾貳圓六拾參錢

貳拾四圓〇六錢　參戸　金七拾貳圓拾八錢

貳拾圓〇五錢　一戸　金貳拾圓〇五錢

拾六圓〇四錢　拾參戸　金貳百〇八圓五拾貳錢

計金四千四百九拾九圓貳拾貳錢

三口合計金壹萬四千九百九拾七圓六拾八錢

算法上殘金貳圓參拾貳錢

更級郡共和村大字小松原罹災調査

一、燒失戸數　一五三世帶　一五二戸

內　縣稅戸數割納額平均額以上の者　四八戸

同上平均額未滿の者　一〇五戸

同上中平均額の二分の一未滿の者　七二戸

同上中平均額の四分の一未滿者　四二戸

一、燒失棟數

本屋、物置、土藏、其他は別頁の被害調査に依りて知るべし

一、職業別戸數

い、農　蠶　業　一三七戸

ろ、商　業　五戸

は、大　工　職　二戸

に、桶　屋　職　二戸

ほ、電氣精米業　一戸

へ、小學校教員　二戸

と、銀　行　員　一戸

ち、屋　根　職　二戸

り、日　雇　二戸

一、罹災人員　九四五人

內　年齢十二才未滿　二六一人

同　七十才以上　三五人
同　其他　六四九人

一、罹災小學兒童　一四七人　學用品計五百四十六圓
内　尋常一年　二四人　學用品　四十八圓
同　二年　二二人　同　四十四圓
同　三年　一〇人　同　三十圓
同　四年　三一人　同　百二十四圓
同　五年　一六人　同　八十圓
同　六年　一六人　同　八十圓
高等一年　一五人　同　七十五圓
同　二年　一三人　同　六十五圓

一、燒死人員　二人　（庄田清作　瀧澤みか）

◎火災被害

一、燒失戶數　百五十六戶
一、燒失居宅棟數　百四十九棟
同上　總坪數　四千五百五十四坪八合
一、燒失土藏棟數　六十七棟
同上　總坪數　七百二十七坪七合五勺
一、燒失納屋棟數　八十一棟
同上　總坪數　七百十二坪五合
一、燒失物置棟數　九十六棟

同上　總坪數　七百五十四坪三合
一、燒失便所棟數　百〇七棟
同上　總坪數　百二十一坪九合五勺
一、不動產損害見積額　五拾參萬七千〇九拾八圓也
一、動產損害見積額　五拾四萬〇六百參拾圓也
内　通貨金額　參千七百六拾七圓八拾錢也
合計　損害見積金額　壹百〇七萬七千七百貳拾八圓也

一、罹災家族の數　男　四百二十人　女　三百九十六人　合計　八百十六人
一、總棟數　五百棟（一棟追加せるため）
一、總坪數（建坪）　六千八百七十一坪三合

罹災者各戶に就き男女別年齡別の調査を爲し單衣各一枚宛調製配給の準備を爲す

一才より四才迄	男	四三人	五才より七才迄	男	三一人
	女	三八人		女	三二人
八才より十二才迄	男	五五人	十三才より十五才迄	男	三三人
	女	四七人		女	一九人
十六才以上	男	三二八人	合計	男	四九〇人
	女	三二二人		女	四五八人

罹災建物の被害調査を進めつゝ有り
本日應援の爲め來訪せる消防組及び各種團体等左の如し（別紙の記入の如し）
今夕より罹災者に炊餐をさすべく本日中に各戶（一五四戶）に對し配給したるもの左の如し

醬油	七樽	一戶當り	ビール瓶一本宛
鍋	三一〇枚	一戶當り	二枚づゝ
白米	二十四石	一戶當り	一斗五升づゝ